

まき　が　たわ

# 槇ヶ塙遺跡

尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 3



平成16（2004）年3月

国土交通省中国地方整備局  
島根県教育委員会

まき が たわ

# 槇ヶ埜遺跡

尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 3

平成 16 (2004) 年 3 月

国土交通省中国地方整備局  
島根県教育委員会

## 序

当事務所では、いわゆる斐伊川・神戸川治水計画3点セットの一翼を担う事業として、斐伊川の上流において尾原ダムの建設事業を進めています。

ダム建設事業の実施に際しては、埋蔵文化財の保護にも充分に留意すべく関係諸機関と協議しながら進めることとし、鳥根県教育委員会を始め関係各位の御協力を頂き、これら遺跡についての発掘調査を平成11年度から計画的に実施してまいりました。

この間には、数多くの貴重な遺跡や遺物が発見され、先人の技術の高さや努力の跡を目の当たりにすることができました。当報告書が掲載する槙ヶ塚遺跡をはじめとして、これらの調査成果が郷土の歴史教育や地域社会の諸活動などに広く活用されることを願うとともに、埋蔵文化財に対するよりいっそうの关心と御理解を得るための資料として広く役立てていただければ幸いに思います。

最後になりましたが、当遺跡の調査並びに報告書のとりまとめに関係された皆様に深く感謝申し上げます。

平成16年3月

国土交通省中国地方整備局

斐伊川・神戸川総合開発工事事務所

所長田中 靖

## 序

鳥根県教育委員会では、国土交通省中国地方整備局の委託を受け、平成11年度から尾原ダム建設予定地内の埋蔵文化財発掘調査を実施してまいりました。本書は、このうち平成12・13年度に発掘調査を実施した、木次町槙ヶ井遺跡の調査成果をまとめたものです。

尾原ダムが建設される斐伊川は中国山地に源を発し、日本海に向け北流することから、古くは陰陽を結ぶ交通路としての役割を担っていました。流域には、埋蔵文化財も含めて数多くの歴史的文化遺産が残されています。ことに上流部では古代から、良質の砂鉄と豊富な森林資源を使った鉛製鉄が、盛んに行われていました。

本書に掲載した槙ヶ井遺跡では、縄文時代から江戸時代に至る数多くの出土品などから、人々の営みの痕跡を明らかにすることができました。これらの調査成果は、この地域の歴史を解明していく上で貴重な資料となるものと考えられます。本書が、地域の歴史と埋蔵文化財に対する理解と関心を高めるための一助となれば幸いに思います。

おわりに、発掘調査及び本書の作成につきましては、地元の皆様をはじめ、国土交通省斐伊川・神戸川総合開発工事事務所など関係者各位より御協力・御指導を賜りましたこと、心より感謝申し上げます。

平成16年3月

鳥根県教育委員会

教育長 広沢卓嗣

## 例　　言

1 本書は、島根県教育委員会が国土交通省中国地方整備局より委託を受けて平成13（2001）年度に実施した、尾原ダム建設事業とともにう埋蔵文化財発掘調査の成果をまとめた報告書である。平成14・15（2002・2003）年度に報告書作成作業を実施した。

2 本書に掲載した遺跡とその所在地は下記の通りである。

横ヶ井遺跡　島根県大原郡木次町大字北原159　外　所在

3 平成13年度の現地調査と同14・15年度の報告書作成は下記の組織で実施した。（職名は当時）  
調査主体　島根県教育委員会

平成13年度

事務局　宍道正年（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター所長）

内田　融（同総務課長）　今岡　宏（同総務係長）

川原和人（同調査第2課長）

調査員　西尾克己（同調査第2課調査第4係主幹）　目次謙一（同主事）　山根令子（同教諭兼文化財保護主事）　佐々田満（同調査補助員）　田中強志（同調査補助員）

調査指導　（五十音順、敬称略）

穴澤義功（たたら研究会委員）

河瀬正利（広島大学人文学院文学研究科教授）

朽津信明（東京国立文化財研究所）

竹廣文明（島根大学汽水域研究センター助教授）

田中義昭（島根県文化財保護審議会委員）

蓮岡法障（島根県文化財保護審議会委員）

平成14年度

事務局　宍道正年（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター所長）

卜部吉博（同副所長）

内田　融（同総務課長）　坂本淑子（同総務係長）

川原和人（同調査第2課長）

調査員　西尾克己（同調査第2課調査第4係主幹）　是田　敦（同調査第1課主事）  
古川和明（同調査補助員）　目次謙一（島根県古代文化センター）

調査指導　穴澤義功（たたら研究会委員）（敬称略）

平成15年度

事務局　宍道正年（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター所長）

卜部吉博（同副所長）

永島静司（同総務課長）　川原和人（同調査第2課長）

調査員　熱田貴保（同調査第2課調査第4係長）　目次謙一（島根県古代文化センター）

調査指導　大澤正己（たたら研究会委員）（敬称略）

4 現地発掘調査（発掘作業員雇用・重機借り上げ・諸道具調達等）については、国土交通省中国地方整備局・社団法人中国建設弘済会・島根県教育委員会の三者協定に基づき、島根県教育委員会から社団法人中国建設弘済会へ委託して実施した。

（職名は当時）

受託者 社団法人中国建設弘済会

現場担当 倉橋博之（技術員） 藤井利恵（事務員）

現地作業 大原郡大東町・仁多郡仁田町在住の皆様方

5 現地調査および報告書作成に際しては、調査の指導をお願いした方々のはかに、多くの方から有益な御指導・御助言をいただいた。記して感謝の意を表します。（五十音順、敬称略）

坂本諭司（島根県木次町教育委員会） 杉原清一（島根県文化財保護指導委員）

田波文雄（吉田村教育委員会） 中村唯史（財団法人三瓶フィールドミュージアム財団）

野津 旭（島根県仁多町教育委員会） 山田康弘（島根大学法文学部助教授）

6 第6章「製鉄関連遺物の考古学的観察」の作成にあたっては、穴澤義功氏の協力を得た。

7 調査に関連する自然科学分析については次の方々に依頼した。合わせて、本書第7章にその結果を執筆いただいた。記して感謝の意を表します。（本書掲載順）

石器の原材料产地分析 梶科哲男（京都大学原子炉実験所）

土製耳飾りの顔料分析 朽津信明（東京文化財研究所）

製鉄関連遺物の金属学的調査 人澤正己・鈴木瑞穂（九州テクノリサーチ・TACセンター）

また、放射性炭素年代測定については、（財）九州環境管理協会に委託して実施した。

8 本書の作成について、各種作業の分担は下記の通りである。（五十音順）

実測図作成 是田・佐々田・田中・古川・目次・山根

遺構・遺物の写真撮影 是田・古川・目次

9 本書の執筆は第7章を除き調査員が協議して行い、文責は目次に明記した。なお、第2章第2節はほぼ全文を『尾白Ⅰ遺跡・尾白Ⅱ遺跡・家ノ勝Ⅱ遺跡3区・川平Ⅰ遺跡 尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1』より転載した。編集は各調査員の協力を得て目次が行った。

10 本書に掲載した出土遺物および実測図・写真などの記録資料は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センターで保管している。

## 凡　例

- 本文および挿図・写真図版での遺構・遺物番号は、同一番号のものは同一対象を指す。
- 図中に示した方位北は、測量法による第Ⅲ座標系X軸の方向（座標北）を示している。また、平面直角座標系XY座標値は、前述の第Ⅲ座標系での位置を表す。
- 標高値（レベル）は、すべて東京湾平均海面水準（T.P.）を0メートルとする。
- 挿図の作成にあたり、転載あるいは改変するなどして使用した図は下記のとおりである。

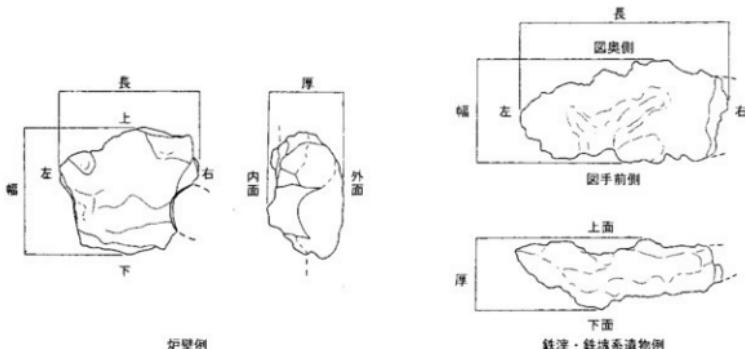
第2図：国土地理院発行の1/50,000地図「木次」「横田」

第3図：加藤義成 1957『修訂出雲國風土記参究』松江今井書店 出雲國風土記要図

第4・5・20図：国土地理院の測量成果をもとに、斐伊川・神戸川総合開発工事事務所とワールド航測コンサルタント株式会社が作成した1/1,000地図

第16・30図：有限会社創互技研が設置した基準杭により国際航業株式会社が製作した測量図

- 写真図版のうち図版1・2上段・13・25については、国際航業株式会社が撮影した。
- 遺構実測図での表現については、網掛けの濃い部分が製鉄関連遺物の分布範囲を示している。また、土坑やピットで包含層へ掘られたものには断面図に薄い網掛けを、地山へ掘られたものには断面図に濃い網掛けを施した。
- 遺構番号は調査時のものを概ね踏襲した。そのため、I区では本文の記述と遺構番号の順序が必ずしも一致していない。
- 遺物実測図での表現については、網掛けの濃い部分が製鉄関連遺物の溶融部分を、薄い部分が同じく砂鉄の付着範囲を示している。遺物番号は、製鉄関連遺物とその他の遺物を分けて、それぞれに通し番号を割り振った。
- 土器の時期決定は主として巻末の参考文献を参考に目次が行った。
- 製鉄関連遺物の本文・観察表における各部の呼称は下図の通りである。



製鉄関連遺物凡例図

(島根県教育委員会2002年『殿洞山遺跡・獅子谷遺跡(1)』より転載)

## 本文目次

### 本文編

第1章 調査に至る経緯と調査の経過	1
第1節 調査に至る経緯	(是田) 1
第2節 調査の経過	(日次) 2
第2章 遺跡の位置と環境	3
第1節 地理的環境	(目次) 3
第2節 歴史的環境	(名越) 3
第3章 横ヶ井遺跡I区の調査	9
第1節 調査の方法	9
第2節 第2層上面の調査	10
第3節 第3層上面の調査	11
第4節 第4層上面の調査	11
第5節 出上遺物	12
第4章 横ヶ井遺跡II区の調査	(日次) 13
第1節 調査の方法	13
第2節 製鉄関連遺構の調査	13
第3節 その他の遺構の調査	15
第4節 製鉄関連遺物	15
第5節 その他の遺物	20
第5章 まとめ	(目次) 21
第1節 縄文時代の遺構・遺物について	21
第2節 近世・近代の麻蒸し土坑について	22
第3節 製鉄関連遺構・遺物について	22
挿図・表編	25
写真図版編	
分析編	
第6章 製鉄関連遺物の考古学的観察	(穴澤・目次) 171
第7章 自然科学的分析	207
第1節 横ヶ井遺跡出土七安山岩製石器の原材料产地分析	207
第2節 横ヶ井遺跡出土の耳飾りに付着した赤色顔料について	219
第3節 横ヶ井遺跡出土炭化物の <sup>14</sup> C年代測定	222
第4節 横ヶ井遺跡出土製鉄関連遺物の金属学的調査	223

## 挿図目次

第1図 搬移遺跡の位置	第36図 I・II区 出土石器・土製耳飾実測図 S=2/3・1/1
第2図 搬移遺跡の位置と周辺の道路 S=1/50,000	第37図 I・II区 出土製鉄関連遺物構成図
第3図 奈良時代における南安堵泊部の墓・施設図 S=1/400,000	第38図 I区 土山製鉄関連遺物構成図 ※は分析資料
第4図 遺跡周辺地形図・調査区設定図 S=1/4,000	第39図 I区 出土製鉄関連遺物実測図 S=1/3・1/2
第5図 I区 調査前地形図・グリッド設定図 S=1/400	第40図 II区 出土製鉄関連遺物構成図1 ※は分析資料
第6図 I区 2層上面平面図 S=1/400	第41図 II区 出土製鉄関連遺物実測図1 (伊壁) S=1/4
第7図 I区 調査区内土層断面図 S=1/100	第42図 II区 出土製鉄関連遺物実測図2 (伊壁) S=1/4
第8図 I区 2層上面断面図1 S=1/40	第43図 II区 出土製鉄関連遺物実測図3 (伊壁) S=1/4
第9図 I区 2層上面断面図2 S=1/40	第44図 II区 出土製鉄関連遺物実測図4 (伊壁・他)
第10図 I区 2層上面断面図3 S=1/40	S=1/4・1/3
第11図 I区 2層上面断面図4 S=1/40	第45図 II区 出土製鉄関連遺物構成図2 ※は分析資料
第12図 I区 3層上面平面図 S=1/400	第46図 II区 出土製鉄関連遺物構成図3
第13図 I区 3層上面断面図1 S=1/40	第47図 II区 出土製鉄関連遺物実測図5 (伊壁) S=1/4
第14図 I区 3層上面断面図2 S=1/40	第48図 II区 出土製鉄関連遺物実測図6 (伊壁) S=1/4
第15図 I区 3層上面断面図3 S=1/40	第49図 II区 土山製鉄関連遺物実測図7 (伊壁) S=1/4
第16図 I区 4層上面平面図 S=1/400	第50図 II区 出土製鉄関連遺物実測図8 (伊壁) S=1/4
第17図 I区 4層上面断面図1 S=1/40	第51図 II区 出土製鉄関連遺物実測図9 (伊壁) S=1/4
第18図 I区 4層上面断面図2 S=1/40	第52図 II区 出土製鉄関連遺物実測図10 (伊壁) S=1/4
第19図 I区 4層上面断面図3 S=1/40	第53図 II区 出土製鉄関連遺物実測図11 (伊壁) S=1/4
第20図 II区 調査前地形図・トレンド設定図 S=1/400	第54図 II区 土山製鉄関連遺物実測図12 (伊壁) S=1/4
第21図 II区 調査区内土層断面構造図	第55図 II区 出土製鉄関連遺物実測図13 (伊壁) S=1/4
第22図 II区 調査区全体図( 掘削場検出時) S=1/200	第56図 II区 出土製鉄関連遺物実測図14 (伊壁) S=1/4
第23図 II区 平坦面平面・断面図 S=1/100	第57図 II区 出土製鉄関連遺物実測図15 (伊壁) S=1/4
第24図 II区 平坦面上SK01平面・断面図 S=1/20	第58図 II区 出土製鉄関連遺物実測図16 (伊壁) S=1/4
第25図 II区 平坦面上炉建群平面図 S=1/15	第59図 II区 比土製鉄関連遺物実測図17 (伊壁) S=1/4
第26図 II区 掘溝場平面図・グリッド設定図 S=1/150	第60図 II区 出土製鉄関連遺物実測図18 (伊壁) S=1/4
第27図 II区 掘溝場土壌断面図 S=1/150	第61図 II区 出土製鉄関連遺物構成図4 ※は分析資料
第28図 II区 SK02-03(掘京し+坑)平面・断面図 S=1/40	第62図 II区 出土製鉄関連遺物実測図19 (砂鉄焼粘埃・他)
第29図 II区 加工段平面・断面図 S=1/100	S=1/3
第30図 II区 調査後地形図 S=1/200	第63図 II区 出土製鉄関連遺物実測図20 (伊川底動層)
第31図 I区 出土石器実測図1 S=1/3	S=1/3
第32図 I区 出土石器実測図2 S=1/3	第64図 II区 出土製鉄関連遺物実測図21 (单位底動層・他)
第33図 I区 出土石器実測図3 S=1/3	S=1/3
第34図 I区 出土石器実測図4 S=1/3	第65図 II区 出土製鉄関連遺物実測図22 (流出孔隙)
第35図 II区 出土石器・陶器留実測図 S=1/3	S=1/3

第66回	II区 出土製鉄関連遺物実測図23	(流出孔岸) S = 1 / 3	第70回	II区 出土製鉄関連遺物実測図31	(伊底塊) S = 1 / 4
第67回	II区 出土製鉄関連遺物実測図24	(流出孔岸) S = 1 / 3	第78回	II区 出土製鉄関連遺物実測図32	(伊内岸) S = 1 / 3
第68回	II区 出土製鉄関連遺物構成図5	※は分析資料	第79回	II区 出土製鉄関連遺物実測図33	(伊内岸) S = 1 / 3
第69回	II区 出土製鉄関連遺物構成図6	※は分析資料	第80回	II区 出土製鉄関連遺物実測図34	(伊内岸) S = 1 / 3
第70回	II区 出土製鉄関連遺物実測図25	(流出孔岸・流出構岸) S = 1 / 3	第81回	II区 出土製鉄関連遺物実測図35	(伊内岸・河結合岸)
第71回	II区 出土製鉄関連遺物実測図26	(流川構岸) S = 1 / 3 - 1 / 4	第82回	II区 出土製鉄関連遺物実測図36	(鉄製品・木炭)
第72回	II区 出土製鉄関連遺物実測図27	(流出構岸・流動岸) S = 1 / 4 - 1 / 3	第84回	赤色顔料痕影の上製耳飾り 実測図 S = 1 / 1	
第73回	II区 出土製鉄関連遺物実測図28	(流動岸・伊底塊) S = 1 / 3 - 1 / 4	第85回	麻糸と作業の復元想像図	
第74回	II区 出土製鉄関連遺物実測図29	(伊底塊) S = 1 / 4	第86回	II区 製鉄炉推定復原平面図 S = 1 / 10	
第75回	II区 出土製鉄関連遺物実測図30	(伊底塊) S = 1 / 4	第87回	模ヶ峯跡製鉄関連遺物組成図	

## 表 目 次

第1表	尾原ダム建設予定地周辺の道路・電線	第16表	横ヶ峰遺跡 製鉄関連遺物 一般観察表12
第2表	横ヶ峰遺跡 I区 出土土器類觀察表	第17表	横ヶ峰遺跡 製鉄関連遺物 一般観察表13
第3表	横ヶ峰遺跡 II区 出土土器類觀察表	第18表	横ヶ峰遺跡 製鉄関連遺物 一般観察表14
第4表	横ヶ峰遺跡 出土石器類觀察表	第19表	横ヶ峰遺跡 製鉄関連遺物 一般観察表15
第5表	横ヶ峰遺跡 製鉄関連遺物 一般観察表1	第20表	横ヶ峰遺跡 鋼鐵関連遺物 一般観察表16
第6表	横ヶ峰遺跡 製鉄関連遺物 一般観察表2	第21表	横ヶ峰遺跡 製鉄関連遺物 一般観察表17
第7表	横ヶ峰遺跡 製鉄関連遺物 一般観察表3	第22表	横ヶ峰遺跡 製鉄関連遺物 一般観察表18
第8表	横ヶ峰遺跡 製鉄関連遺物 一般観察表4	第23表	横ヶ峰遺跡 製鉄関連遺物 一般観察表19
第9表	横ヶ峰遺跡 製鉄関連遺物 一般観察表5	第24表	横ヶ峰遺跡 製鉄関連遺物 一般観察表20
第10表	横ヶ峰遺跡 製鉄関連遺物 一般観察表6	第25表	横ヶ峰遺跡 製鉄関連遺物 故障分析表21
第11表	横ヶ峰遺跡 製鉄関連遺物 一般観察表7	第26表	横ヶ峰遺跡 製鉄関連遺物 一般観察表22
第12表	横ヶ峰遺跡 製鉄関連遺物 一般観察表8	第27表	横ヶ峰遺跡 製鉄関連遺物組成一覧表
第13表	横ヶ峰遺跡 製鉄関連遺物 一般観察表9	第28表	横ヶ峰遺跡 鋼鐵関連遺物分析結果一覧表
第14表	横ヶ峰遺跡 製鉄関連遺物 一般観察表10	第29表	横ヶ峰遺跡 製鉄関連遺物構成・遺物の主要要求一覧表
第15表	横ヶ峰遺跡 製鉄関連遺物 一般観察表11		

## 図版目次

図版1	概ヶ跡遺跡上空から北原方面を望む（南東から）	下	II区半堀面上鉢墳群（西から）
図版2	上 T区調査前状況（上空から）	図版15	上 II区半堀面上鉢墳群（北東から）
	下 同（北西から）		下 II区平塚面（北東から）
図版3	上左 I区第5回 A-A'土層断面	図版16	上 II区SK01検出状況（北東から）
	上右 同 B-B'土層断面		中 同 土層断面（西から）
	中 同 C-C'土層断面		下 同 完掘状況（北東から）
	下 同 D-D'土層断面	図版17	上 II区半堀面上造構完掘状況（北東から）
図版4	上 T区北半2層上面造構完掘状況1（東から）		下 II区北半2層上面造構完掘状況（南西から）
	中 T区北半2層上面造構完掘状況2（東から）	図版18	上 II区北半2層上面造構完掘状況
	下 T区北半2層上面造構完掘状況3（北から）		中 II区北半2層上面造構完掘状況
図版5	左上 I区SK05（北東から）		下 II区北半2層上面造構完掘状況
	上 I区SK06（北東から）	図版19	上 II区北半2層上面造構完掘状況（南から）
	左 T区SK07土層断面		下 同（山西から）
	左上 I区SK09（山西から）	図版20	上 II区北半2層上面造構完掘状況1（西から）
	上 I区SK10土層断面状況		中 II区北半2層上面造構完掘状況2（西から）
	左 I区西側斜面土層断面状況		下 II区北半2層上面造構完掘状況3（山西から）
図版6	上 I区南半2層上面造構完掘状況（南東から）	図版21	上 II区北半2層上面造構完掘状況（南東から）
	中左 右斧（36-5）出土状況		中 II区北半2層上面造構完掘状況（東から）
	中右 耳飾り（36-6）出土状況	図版22	上 II区北半2層上面造構完掘状況（山西から）
	下 SK38（山西から） SK39（山西から）		中 II区北半2層上面造構完掘状況（山西から）
図版7	1段 SK40（東から） SK42（西から）		下 II区北半2層上面造構完掘状況（山西から）
	2段 SK44（南から） SK46（北西から）	図版23	上 II区SK02土層断面（西から）
	3段 I区北半作業状況 SK15（南東から）		中 同 土層断面（西から）
	4段 SK17（北西から） SK19（東から）		下 II区SK02-03光棍状況（南から）
図版8	上 I区北半3層上面造構完掘状況1（東から）	図版24	上 II区加工段土層断面（西から）
	中 I区北半3層上面造構完掘状況2（東から）		中 II区SK04（西から）
	下 T区北半3層上面造構完掘状況3（北西から）		下 II区SP01（東から）
図版9	上 I区南半3層上面造構完掘状況（南東から）	図版25	上 II区調査終了後状況（上空から）
	中 SK50（西から） SK51（西から）		下 同（山西から）
	下 SK52（北東から） SK54（南から）	図版26	I区出土遺物1
図版10	1段 SK55（東から） SK57（山から）	図版27	I区出土遺物2
	2段 SK59（西から） I区南半作業状況	図版28	I区出土遺物3
	3段 SD01（東から） SK21（南から）	図版29	上 II区出土遺物
	4段 SK22（東から） SK24（南東から）		下 I・II区出土遺物
図版11	上 T区北半4層上面造構完掘状況1（東から）	図版30	I・II区出土遺物
	中 I区北半4層上面造構完掘状況2（東から）	図版31	出土製鉄関連遺物1
	下 I区北半4層上面造構完掘状況3（南東から）	図版32	出土製鉄関連遺物2
図版12	上 I区南半4層上面造構完掘状況（南東から）	図版33	出土製鉄関連遺物3
	中 SD02・03（東から） SK65（東から）	図版34	出土製鉄関連遺物4
	下 SK68（北から） ST20（北から）	図版35	出土製鉄関連遺物5
図版13	上 I区調査終了後状況（上空から）	図版36	出土製鉄関連遺物6
	下 同（南東から）		
図版14	上 II区調査前状況（東から）		
	中 II区半堀面向北採石跡（北東から）		



# 本 文 編



# 第1章 調査に至る経緯と調査の経過

## 第1節 調査に至る経緯

**ダム事業の概要** 島根県東部を南北に貫流する二大河川、斐伊川と神戸川の治水事業は、古く近世松江藩以来の懸案であった。昭和47年（1972）の大洪水を契機として、同51年（1976）に「斐伊川水系工事実施基本計画」の改訂が行われ、①両河川の上流におけるダムの建設・②中部の斐伊川放水路事業と斐伊川の改修・③下流の大橋川改修と中海・宍道湖の湖岸整備のいわゆる「治水3点セット」を基本とした治水対策が計画された。これを受け同54年（1979）には、「斐伊川・神戸川の治水に関する基本計画」の具体的な内容が建設省中国地方建設局（現国土交通省中国地方整備局）と島根県から発表された。これにより尾原ダム建設事業は斐伊川上流域の志津見ダム・斐伊川放水路・大橋川改修の各事業とともに、島根県東部の治水対策の根幹をなす事業として位置づけられた。

尾原ダムは、島根県東部の松江市・出雲市等の斐伊川・神戸川流域の洪水防御とともに、斐伊川の流水の正常な機能の維持および工業用水の供給を目的とした多目的ダムである。ダム本体は斐伊川上流域の大原郡木次町北原地内に建設が予定されている。渓水地域は木次町から隣接する仁多町へも広がり、その総面積は230haに及ぶ。

尾原ダムは諸々の調査・関連手続き等を経て平成3年度から建設事業に着手され、平成5年12月に水源地域対策特別措置法のダム指定を受けた。つづく平成6年2月にダム建設基本計画の公示が行われ、平成7年11月には地元3団体と損失補填基準協定書の調印を取り交わして、用地買取作業が着手された。

**ダム事業と文化財** 尾原ダム建設事業に伴う埋蔵文化財の取り扱いについては、事前の協議を受け、平成3年6月に建設省中国地方建設局斐伊川・神戸川総合開発工事事務所（現国土交通省中国地方整備局斐伊川・神戸川総合開発工事事務所、以下同じ）から島根県教育委員会に埋蔵文化財の分布調査が依頼された。島根県教育委員会ではこの依頼を受けて、平成5年3月と平成6年3月の2回に渡り分布調査を実施し、合計81箇所の遺跡及び要範囲確認調査地を確認した。

この調査結果をもとに、平成10年12月に建設省斐伊川・神戸川総合開発工事事務所と島根県教育委員会は協議を行い、平成11年度からの範囲確認調査の実施を決定した。また、平成10年12月に島根県教育委員会・木次町教育委員会・仁多町教育委員会の三者は協議を行い、①再度の分布調査の実施、②現段階ではダム本体部分は県が調査し、残土捨て場部分は町対応すること、③調査状況や調査体制に応じて調整しながら調査することを確認した。これを受け、平成11年3月に島根県教育委員会・木次町教育委員会・仁多町教育委員会は共同で分布調査を行い、更に32箇所の遺跡と要範囲確認調査地を確認した。これにより遺跡及び要範囲確認調査地は合計113箇所となった。

また、平成11年度からの範囲確認調査が決定した際、平成4年に交わされた建設省中国地方建設局・島根県教育委員会・社団法人中国建設弘済会の三者による埋蔵文化財発掘調査覚書に基づき、発掘調査を円滑に進めるため、作業員の確保、発掘現場における物件の確保、測量、掘削工事などの調査補助業務を社団法人中国建設弘済会島根支部に委託することとした。

平成11年度、島根県教育委員会は29箇所の遺跡及び要範囲確認調査地の範囲確認調査を実施した。そのうち11箇所の遺跡及び要範囲確認調査地については、本発掘調査が必要であると確認された。

翌12年度には、2箇所の全面発掘調査と20箇所の遺跡及び要範囲確認調査地の範囲確認調査が実施された。範囲確認調査の結果、13箇所について全面発掘調査が必要であると確認された。この13箇所の要全面発掘調査地の中に槙ヶ井遺跡が含まれていたのである。また、平成12年9月には工事中に遺跡（寺仏山横穴）が発見されるなどしたことから、国土交通省中国地方整備局斐伊川・神戸川総合開発工事事務所から島根県教育委員会に再度の分布調査の依頼があった。これを受け島根県教育委員会は、平成13年3月に再々度の分布調査を実施し、新たに2箇所の要範囲確認調査地を確認した。

平成13年度には槙ヶ井遺跡を含む6遺跡の全面発掘調査と3箇所の範囲確認調査が実施された。範囲確認調査では、1箇所について全面発掘調査が必要とされている。同年度に実施された全面発掘調査が槙ヶ井遺跡を含めて終了した後、島根県教育委員会文化財課は国土交通省中国地方整備局斐伊川・神戸川総合開発工事事務所と協議をおこない、各遺跡とも記録保存の取り扱いをすることを了解した。

なお、昭和63年（1988）以降島根県教育委員会と木次・仁多両町教育委員会によって、民俗文化財の調査が相次いでおこなわれている。その成果は公刊され、現在貴重な資料となっている。（1）

### 第1節 註・参考文献

- （1）『尾原の民俗－本文編－』1990 建設省中国地方建設局・島根県教育委員会。

### 第2節 調査の経過

**確認調査** 平成12年（2000）6月26日から7月13日まで実施した。トレントを19か所に設定して進めた結果、4から12・15トレント（I区）、16から19トレント（II区）周辺を本調査対象範囲とした。なおI区とII区の中間（1から3トレント）には近年まで紀られた大山櫛現跡があり、I区北西の13・14トレントでは明瞭な遺構が確認できず、いずれも対象範囲より除外した。

**現地調査** 本調査は平成13年（2001）4月11日、II区から着手した。5月上旬までに平坦面上の遺構等をほぼ確認し、同月11・15日には調査指導を受けた。梅雨時の降雨では北側斜面が自然崩落したが大過なく、排水場を主に掘り進めて8月3日にII区の調査を終了した。重機掘削の後、8月22日からはI区の調査を取りかかった。また、製鉄関連遺物の現地整理作業を開始し、11月上旬に調査指導を受けた。調査は複数遺構面と堆積状況を確かめつつ掘り下げ、12月17日に空中写真撮影を実施、12月19日に全作業を終了した。

調査期間中、9月末をもって佐々田が島根県教育委員会を退職する一方、9月からは田中が調査に加わった。また、現地調査の終了後、放射性炭素年代の測定や出土石器の石材分析・出土耳飾りの顔料分析を実施した。

**報告書作成** 平成14年度には目次のはか是田・古川が作業にあたり、製鉄関連遺物の整理作業を主に進めた。7月・12月には穴澤氏の調査指導を受けている。製鉄関連遺物の分析も実施した。

翌15年度には熱田のもとで目次が資料整理や原稿執筆作業を進め、本報告書の刊行をみた。

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

鳥取県との県境、仁多郡横田町五反田の船通山（標高1142.5m）に源を発する斐伊川は、横田町・仁多町・木次町・三刀屋町・加茂町・出雲市・斐川町の1市6町を経て、宍道湖に注いでいる。

楨ヶ峠遺跡は、斐伊川が木次町北原地区のやや開けた平坦地で西へ蛇行する地点から約800m上流に位置し、島根県大原郡木次町大字北原所在の遺跡である。その立地は、斐伊川へ向け伸びた丘陵の南側斜面中ほど、標高210～230mに位置する。斜面には斐伊川に沿って狹小な平坦面があり、そこからは約30m以上の高低差がある。周辺は起伏のある山地が斐伊川まで迫っている地形であり、楨ヶ峠遺跡から斐伊川流域へかけては、三成盆地に至るまで丘陵地や山地が続いている。

遺跡周辺の表層地質は閃緑岩～花崗岩複合岩質岩石が広く分布している<sup>(1)</sup>。

この斐伊川流域は、神戸川流域ほど二瓶山（標高1126m）の噴火の影響を受けていないようである。二瓶山は約3600年前まで噴火活動を繰り返し、それに由来する火山灰や火碎流等の堆積物や黒ボク土壌が、神戸川流域では広く見られる。が、この地域では第1ハイカ層（二瓶太平山降下火山灰：約3600年前）<sup>(2)</sup>と同時期と推定される層が、木次町家の後I遺跡で確認された程度である<sup>(3)</sup>。

一帯の気候は日本海性気候に属し、低温・多雨・多雪の寒冷地帯である。遺跡周辺の土地利用は、コナラなどの広葉樹林や、スギやヒノキの人工林などによる樹林地となっている。

### 第1節 註・参考文献

- (1) 『島根県の地質』1985 島根県。
- (2) 松井義司「二瓶火山の噴出物とその年代」『板見遺跡 志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書5』1998 島根県教育委員会。
- (3) 『垣の内遺跡・家の後I遺跡 尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1』2003 島根県教育委員会。

### 第2節 歴史的環境

尾原ダムは、大原郡木次町平田にダムサイトを築いて斐伊川の本流をせき止めるものであり、貯水池の範囲は町境を越えて仁多郡仁多町三成に及ぶ。尾原ダムの建設事業はしばしば、「平成のオロチ退治」と称せられるが、付近は、『古事記』や『日本書紀』に記述のある、スサノオ（須佐之男命・素戔鳴尊）による八岐大蛇退治伝説の故地である。

出雲地方南部を雲南と称するが、大原・仁多両郡は、その雲南地方に属する。『出雲国風土記』（以下『風土記』と略す）によれば、大原郡は神原・屋代・屋裏・佐世・阿用・海潮・来次・斐伊の8郷で構成され、『和名抄』はその8郷に大原郷を加える。一方仁多郡は、『風土記』は三处・布勢・三沢（三津とする説も有力）・横田の4郷を載せ、『和名抄』はその4郷に漆仁・阿位の2郷を加える。漆仁・阿位の2郷は、三沢郷から分立したものと推定されている。なお、ダムサイトの建設予定地である木次町平田は、昭和30年に木次町・日登村と合併する以前は仁多郡温泉村に属しており、旧温泉村の村域は『和名抄』の漆仁郷とほぼ等しい。従って、ダム湖に水没したり、道路などダム関連工事が行われる範囲は、『風土記』でいう仁多郡の4郷のうち、横田郷を除いた各郷に及ぶことになり、この事業が仁多郡に与える影響は少なからぬものになるであろう。

仁多郡の郡名は、大穴持命が「此の国は大きくも非ず小くも非ず。…是は尔多志枳小國在り」と述べたことに由来すると、『風土記』は伝えている。小ぢなりとして水田耕作に適した肥沃な土地、と言った意味である。現況は過疎化の進んだ典型的な中山間地になっているが、以下では、周辺の遺跡の紹介等をしつつ、この地域の歴史的環境を概観してみたい。

**旧石器時代** この時期の遺跡は、木次・仁多両町内およびその周辺地域では、現在のところ、確認されていない。

鳥取県全体をみても旧石器時代の資料は多くはないが、宍道湖・中海の周辺地域では、松江市下黒田遺跡をはじめ、この時代に遡ることのできる遺跡が見つかっている。雲南地域においても、今後の開発の進行等をきっかけに、旧石器時代の遺跡が発見される可能性は高いと言えるだろう。

**縄文時代** 斐伊川中・上流域は、神戸川中・上流域と同様、縄文時代の遺跡の分布が密な地域である。

近年この地域で、縄文時代の遺跡として注目されたのは、木次町の平田遺跡である。平田遺跡は、斐伊川とその支流の阿井川の合流地点に位置する。この遺跡では、縄文後期から晩期初頭の土器が大量に出土したが、岡山県の福田貝塚出土品と酷似した浅鉢や、鐘崎式土器など、山陽地方や北部九州の影響を強く感じさせるものが見られる。また大量の石鏃や石斧が割片をともなって出土しており、この遺跡は石器の製作工房跡であったと考えられる。さらに、上器の出土状況等から、埋甕が行われた可能性が指摘され、土坑も8基検出されるなど、縄文時代の墓制の一端を知る上で貴重な遺跡である。埋甕が行われた遺跡として、周辺には、県指定史跡である三刀屋町の宮田遺跡、平田遺跡から直線距離で5kmほどの場所に位置する仁多町の暮地遺跡が知られている。

平田遺跡から阿井川を遡り、町境を越えて仁多町に入ると、やがて下鴨倉遺跡にいたる。阿井川の河岸段丘上に存在するこの遺跡は、かつて「縄文のデパート」と評されたように、出土した土器は、縄文前期から晩期にいたる山陰・山陽の諸様式をほぼ網羅するばかりか、北部九州の影響も色濃い、貴重な資料となるものである。

また、仁多町の林原遺跡からは、試掘調査の結果、縄文後期を中心とする土器や磨製石器などの石器が出土したほか、縄文後期前葉から中葉のものと思われる上器が1点確認されており、本調査の成果が期待されるところである。同じく仁多町の暮地遺跡でも大量の縄文時代後・晩期の土器と共に3点もの土器が出土している。

この地域で最も古いものに分類できる遺跡は、斐伊川上流の横田町に所在する、押型文土器が出土した国竹遺跡や下大仙子遺跡であり、これらは縄文時代早期に遡ることができるものである。尾原ダム建設に伴う発掘調査では、川平I遺跡からも縄文早期の押型文土器が出土している。川平I遺跡からはその他、大量の石鏃が出土しており、この遺跡の大きな特徴となっている。この他にも、木次町の家の後I遺跡では縄文時代後期、垣ノ内遺跡では縄文時代中期と後期の土器が出土している。

**弥生時代** 以前より、木次町では早稻田遺跡、本郷谷遺跡、仁多町では鹿谷遺跡、横田町では国竹遺跡、代山遺跡、横田高校グランド遺跡などが弥生時代の遺跡として知られてきた。しかし、縄文時代の遺跡に比べると数そのものが少なく、遺構が確認されたのも国竹遺跡のみであり、この地域では、わずかに、横田町の横田八幡宮に伝えられた銅劍（巾細形銅劍C）、木次町日登から出土し

たと言われる銅鐸（外縁付鉢I式）が注目される程度であった。

しかし近年になって、この地域の弥生時代の様相を知る上で、貴重な資料を提供する遺跡が出現した。それは、縄文時代の項でも触れた、木次町の平田遺跡である。ここからは、円形に近い多角形を呈した径8.8m～9.0mの堅穴建物跡1棟が見つかった。建物内からは鍛冶炉が4基検出され、鉄鎌やその未製品、板状や棒状の鉄片、慾、低石などが出土した。のことから、この建物は、鉄素材を鍛錬し、慾を用いて鉄器を製作した工房として使われたものと考えられる。これとほぼ同様の性格をもった建物群が、八束郡宍道町の上野Ⅱ遺跡で見つかったが、平田遺跡の鉄器工房跡は、上野Ⅱ遺跡のものに比べてやや新しく、弥生時代の末から古墳時代初頭のものと考えられている。

さらに、尾原ダム建設に伴う発掘調査では、木次町の垣ノ内遺跡から、弥生時代中期後半から後期末にかけての堅穴住居が15棟、掘立柱建物が数棟発見された。斐伊川中・上流域では、弥生時代の集落跡の調査例が少なく、住居跡・建物跡がこれだけまとまって検出された例もないことから、注目される遺跡である。他に、仁多町の森地遺跡でも堅穴住居が2棟確認された。

古墳時代 斐伊川中流域には、副葬品に最初三年銘の三角縁神獣鏡を持っていたことで著名な大原郡加茂町神原の神原神社古墳をはじめ、木次町東方の斐伊中山古墳群、飯石郡三刀屋町給下の松本古墳群1号墳・3号墳など、名高い前期古墳が点在する。これらの古墳は、斐伊川の本流に、赤川、あるいは三刀屋川といった大きな支流が合流し、平地が遠望できる微高地や山丘上に立地するという特徴がある。

一方、中流から上流域では、從来、前期や中期の古墳はほとんど見当たらないとされてきたが、近年、この定説にも変化が生じた。まず、仁多町三成の須坂古墳群は15基から構成される古墳群で、前方後方墳1基を含み、一部に弥生時代の台状墓と思われるものも含む、前期古墳群に類似するものである。近い例として、斐伊中山古墳群を挙げることができる。また、同じく仁多町三成の丸子山古墳群は、円墳2基からなるが、副葬品等の状況は中期末墳の様相を呈しており、この地域の首長クラスの墳墓と推定されるものである。

後期になると、斐伊川中・上流域の主要古墳は、多く、仁多町高田・郡村の付近に築かれるようになる。この付近は、後述のように『山雲国風土記』（以下『風土記』と略す）の時代に仁多郡の郡家が置かれていたところで、岩星古墳、常楽寺古墳など、それに相応しい古墳が存在する。岩星古墳は7世紀前半頃の円墳で、墳丘の規模は直径約15mと大きくはないが、全長約7mの仁多郡では群を抜いて大きい横穴式石室を持つ。常楽寺古墳は、墳丘を欠き、また羨道部も欠いているものの、整った横穴式石室を持つ円墳である。この古墳の特徴は、何と言っても、円筒埴輪14以上、馬形埴輪1、男子人物埴輪3、女子人物埴輪2と、豊富な埴輪を持つことである。石室内部の調査がなされていないこともあって、被葬者の人物像は評らかにはできないが、相当な勢力がここに存在していたことは確実であり、それならばその勢力は何に依拠したものなのかを分析していくことが今後の課題となるであろう。

横穴墓は、木次町で10群、仁多町では16群を数えることができる。その形態は、ほとんどが玄室の平面プランが縦長方形、断面が三角形のテント形で、妻入りであり、この形態は斐伊川中・上流域の奥出雲地方に広く分布するものである。副葬品もおおむね等質的であるが、木次町寺領の平ヶ廻横穴墓には金銅装刀子が副葬されていたのが注目される。また、尾原ダム建設に伴い調査が行われた木次町の下布施横穴墓群では、1号横穴墓から遺存状態の極めて良好な装飾大刀が出土した。

その装飾は、柄に葛を密に巻き、柄頭には黒漆を塗った上に金箔・銀箔を貼ったもので、畿内で一括生産される一般の装飾大刀とは技術的系譜が異なるものとして注目される。

なお、最後に、木次町口登に所在する原口古墳群は、6基のうち調査されたのは1号墳のみであるが、松江市友田遺跡の土塙墓や墳丘墓との共通点が指摘され、古墳群と呼ばれてはいるものの、弥生後期の墳丘墓の可能性が高いと指摘されていることを記しておきたい。

奈良・平安時代 『風土記』によれば、大原郡の郡家は斐伊郷、飯石郡の郡家は多爾郷、仁多郡の郡家は三處郷にそれぞれ置かれた。出雲国府からは、現在の国道9号にあたる「正齒の道」で「玉作の街」、そこからは「正南の道」をたどって現在の宍道町和名佐と大東町細船の間で意宇郡との郡境を越え、やがて斐伊川のほとりに程近い大原郡家に至る。ここで道は「南西の道」と「東南の道」に分かれる。「南西の道」は、斐伊川を渡ると現在の国道54号とほぼ同じルートをたどって飯石郡家に至り、さらに備後國三次郡に通じていた。一方「東南の道」は、大原郡家から現在のJR木次線に沿うようにして山間に分け入って、大東町下久野樋の谷で、仁多郡との郡境を越えて郡家に至る。仁多郡家からは道は三方向に分かれ、一つは伯耆国に、残る二つはそれぞれ備後國に通じていた。また、仁多郡家と飯石郡家とを結ぶ「通道」も存在した。その道は、仁多町郡村から佐白を経由して木次町に入り、北原から櫛屋を経て斐伊川を渡り、飯石郡に至っていたものと推定される。すなわちこの道は、まさに尾原ダムの予定地内を通過していたのである。なお、『風土記』には、「通道。飯石の郡の界なる漆仁の川の辺に通ふ、二十八里。即ち川の辺に薬湯有り…」とあり、この道の半ばに温泉があることを紹介している。老若男女が昼夜を分かたず薬効を求めて訪れたとされるこの温泉は、飯石郡吉田村と木次町の境にある湯村温泉である。

飯石郡家の所在地は現在の飯石郡掛合町郡のあたり、大原郡家は、現在のJR木次駅の北方約500mの地点と推定され、また以前には大東町仁和寺のJR輪屋駅付近にあったらしいが、いずれも『風土記』の距離里程や地名からの推測であり、物的証拠はない。それに対して、仁多郡家には有力な推定地があり、それは仁多町郡村のカネツキ免遺跡付近である。カネツキ免遺跡からは須恵器や土師器をはじめ、多くの遺物が出土しているが、上器には墨書き上器も含まれ、また円面鏡・転用鏡も見られる。付近には大領原や内裏原という字名があり、近隣の芝原遺跡からは「厨」と墨書きする須恵器が出土している。これらのことから、カネツキ免遺跡は道構こそ確認できていないものの、仁多郡家と関わりの深い遺跡と言える。

『風土記』から寺院関係の記述を見ると、出雲国には「教美寺」と10カ所の「新造院」があるが、そのうち大原郡には新造院が三つ存在しており、寺院数では国府のある意宇郡に次いでいた。木次町に関わるものは二つあり、一つは「郡家の正南一里なり。嚴堂を建立つ。僧五軀あり。大領勝部臣藤麻呂が造りし所なり」と記載されるもので、『風土記』で複数の僧の存在を記載するのは当寺だけである。現在のJR木次駅付近に推定され、「塔の石」と呼ばれる礎石と考えられる石がある。もう一つの新造院は「郡家の東北一里なり。嚴堂を建立つ。尼二軀あり。斐伊郷の人、樋印支知麻呂が造る所なり」と記載されるものであり、『風土記』で尼寺とされるのは当寺だけである。その推定地からは、やはり礎石と考えられる石が出土している。

一方で仁多郡には、寺院に関する記述がない。しかし、遺跡としては仁多町高田に高田庵寺が存在している。高田寺は『風土記』にみえる仁多郡司人領廻部臣の祖父が建立したと伝えられる奈良時代の寺院で、軒丸瓦等が出土している。中世に至るまで栄えたが、横田町の岩屋寺との対立や南

北朝の騒乱の中で次第に衰えた。

神社は、大原郡に官社が13社でその他の神社が16社、仁多郡には官社が2社でその他の神社が8社の記載がある。このうち、仁多郡三津郷（三沢郷）の三津社は、現在の仁多町三沢にある三沢神社で、阿遼須伎高口子命を祀るものである。三津郷の地名の謂れとして、『風土記』ではこのような山來を紹介する。即ち、阿遼須伎高口子命は大神穴持命の御子であるが、大人になっても泣いてばかりで言葉をしゃべることができなかつた。そこで大神が夢見を祈願し、その結果御子が初めて発した言葉が「御津」であり、大神の「それはどこか」という間に、御子は答えてその地を案内した。そして、その時に御子が津の湧き水で沐浴したことに因んで、出雲國造が神吉詞を奏上するために朝廷に参向する際にはその水を淨めに用いるようになったという。この「御津」の位置は、完全に特定されるには至っていない。なお、木次町平田の家の上造跡は、配石造構から上馬・手づくね土器・土工などが出土した7~8世紀の水辺の祭祀に關係する遺跡と考えられている。この遺跡は、三津郷（三沢郷）の範囲に含まれており、あるいは阿遼須伎高口子命の故事に何らかの関わりがあるのかも知れない。

**鎌倉・室町時代** 承久3年（1221）、承久の乱の後は、大原郡内にも東国の大御家人が進出してきた。中でも日伊郷の伊北氏、大東庄の土屋氏、大西庄の飯沼氏、淀本庄の中沢（牛尾）氏、佐世郷の佐世氏らである。また、尼子・毛利両氏の合戦においては、この地が、尼子氏の木撻富田城の西方前哨にあたることもあって、激戦が展開された。従ってこの地域には、牛尾氏の三笠山城・高平山城（大東町）、佐世氏の金剛山城（同町）、立原氏の近松城（加茂町）など、重要な城が集中していた。しかしながら、木次町内においては、有力な勢力が現れず、宇山氏の宇山城（日登城）、広田氏の霞籠山城などが見られる程度である。むしろ、この時期の木次町内において特筆すべきは、来次市庭における商業活動である。戦国期に発展したこの市は、奥出雲で生産された鉄や、馬・牛などを、斐伊川の舟運によって竹築市場（大社町）まで輸送した。江戸時代初期には紙市が起り、慶安二年（1649）には松江藩唯一の紙座が設けられるなど、活況を呈したと伝えられる。

仁多郡では、信濃国の御家人の飯島氏が、承久の乱の戦功を賞されて、三沢郷に所領を獲得した。飯島氏が実際に三沢郷に移り住み、三沢氏を称して本格的な所領經營に乗り出したのは、鎌倉時代末期のことである。三沢氏は鴨倉山（要害山）に居城である三沢城を構えると、隣接する阿井郷・布勢郷・三所郷に支配領域を広げ、室町期には横田庄にも進出した。三沢城は14世紀初頭の築城とされ、主郭を中心にとして北側と東側の尾根筋に大小14段以上の郭をもつ山城で、西と南は絶壁状をなし、南の麓には阿井川が流れる。鴨倉山の標高は418.5mと周囲の山々に比べて低いにも関わらず、四方の要衝をほとんど望める位置にある。三沢氏は、奥出雲の鉄の生産と流通を掌握し、出雲国内で最大の勢力を誇る国人へと成長を遂げた。天文11年（1543）には尼子氏に征服されるが、それでもなお出雲最大の国人領主として影響力を保持し続けた。三沢城は、永正六年（1509）、横田庄内に藤ヶ瀬城が築かれるまで、三沢氏の本拠地であった。

**江戸時代** 『風土記』の仁多郡の条には「諸の郷より所出る鐵、堅くして、尤も鍛の具を造るに堪ふ」、飯石郡の条には「飯石小川。源は郡家の正東一十二里なる佐久嶮山より出で北に流れて三尾川に入る。鐵あり」と記されるなど、古来より、雲南地域では盛んに製鉄が行われてきた。大原郡の記事にはこのような記述がないが、事情は同様と考えられる。しかし、雲南地域では現在のところ、古代にまで遡る可能性がある製鉄遺跡は発見されていない。12世紀後半と推定される木次町平

田の上畠内たら跡、13世紀後半の可能性が高い木次町北原の枯木ヶ谷鉱遺跡などが、この地域で確認されているもっとも古い製鉄遺跡で、野だら様式のものである。

近世になると横田町の絲原氏・卜茂氏、仁多町の櫻井氏、吉田村の田部氏など著名な鉄師が現れ、彼らによって半永久的な構造の高殿たたらが営まれると産鉄量は飛躍的に増大する。これら鉄の生産は、砂鉄をとるため河川に砂を流出させる鉄穴流しによる川床の上昇を招き、斐伊川流域は度々大洪水に見舞われることになった。しかし同時に、鉄の生産はこの地域に富をもたらすものでもあった。前述の来次市庭（木次市場）は、奥出雲の「たら」で生産された鉄の集散地であった。江戸時代の末期、奥出雲産の鉄を材料として生産された木次千歛は、脱穀能力も高く、木次商人の行商によって全国市場に確固たる地位を占めた。

### 【参考文献】

- 加藤義成『山雲国風土記参究』 1962 原書房  
 加藤義成校注『校注出雲国風土記』 1965 千鳥書房  
 加藤義成『山雲国風土記』 1965 今井書店  
 『道路改良計画に伴う 下鴨倉跡緊急発掘調査報告』 1981 仁多町教育委員会  
 『発掘調査報告書 常来寺古墳』 1985 仁多町教育委員会  
 『北丘尼原横穴群緊急発掘調査報告』 1986 仁多町教育委員会  
 『龍野敷古墳 - 調査と石室の移築』 1986 仁多町教育委員会  
 『緊急発掘調査報告 上分・原たら跡』 1989 仁多町教育委員会  
 『道路改良工事に伴う第2次発掘調査報告 下鴨倉遺跡』 1990 仁多町教育委員会  
 『古代の山雲を考える 7 松本古墳群 -斐伊川流域の前期古墳をめぐって-』 1991 出雲考古学研究会  
 『発掘調査報告書 野上たら跡』 1992 仁多町教育委員会  
 『発掘調査報告書 斐伊川山古墳群-西支群- 木次町文化財調査報告書第2集』 1993 木次町教育委員会  
 『高山小学校跡予定地内発掘調査報告書 日ヤケたら跡・芝原遺跡』 1994 仁多町教育委員会  
 『尾原ダム建設に關わる発掘調査報告書 武者山道路 丸子山古墳群』 1995 仁多町教育委員会  
 『妙見山遺跡発掘調査報告書 木次町文化財調査報告書第3集』 1995 木次町教育委員会  
 『主要地方道上湯若狭山線改良工事に關わる発掘調査報告書 宇根たら跡』 1996 仁多町教育委員会  
 『中田第二中幹線ルート送電鉄塔建設予定地内遺跡調査報告書 須坂遺跡・他』 1997 仁多町教育委員会  
 『平田遺跡 木次町文化財調査報告書第4集』 1997 木次町教育委員会  
 『家の下遺跡・石牽遺跡 尾原ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書1』 1998 木次町教育委員会  
 『鳥根県小豆坂城廻跡分布調査報告書(第2集) 出雲・關崎の城廻跡』 1998 鳥根県教育委員会  
 『下畠内たら跡 北原1遺跡 条屋の廻遺跡 尾原ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書2』 1999 木次町教育委員会  
 萩原千鶴『出雲国風土記』 1999 講談社学術文庫  
 『枯木ヶ谷鉄遺跡 尾原ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書3』 2000 木次町教育委員会  
 『平川遺跡第Ⅲ調査区 斐伊川広域一般河川改修工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』 2000 木次町教育委員会

## 第3章 槓ヶ堺遺跡Ⅰ区の調査

### 第1節 調査の方法

**調査の進行** 本遺跡所在地は戦後に柔畑として開墾されたというが、調査開始前には低木や雜草の生い繁る荒地であった。草木類の除去と表土掘削を重機にて行ったのち、人力により遺物包含層を掘削し、調査を実施した。なお、残土処理の都合上調査区を北半と南半に分け、北半を最終遺構面まで調査した後、南半の調査へ移った。また、Ⅰ区では3時期の遺構面が存在したが、下層の2時期の遺構面覆土については土層観察目的に設けたトレンチ（第7図）内で全く遺物が出土せず、遺構のみ確認された。これにより、それぞれの遺構検出面までは重機により掘削している。

**調査区の設定（第4図）** 近代の遺構を残す丘陵斜面中ほどの平坦地をはさんで、北側をⅠ区、南側をⅡ区とした。調査面積はⅠ区が2300m<sup>2</sup>、Ⅱ区が700m<sup>2</sup>である。

**基本層序（第6・7図）** 事前の範囲確認調査では、Ⅰ区の南東から北西方向へ向かって複数のトレンチが設定された。第5・7トレンチでは地表面下1.5m程度で少量の焼土や炭化物の面が確認されており、製鉄関連遺構・遺物の存在が予想されている。一方第10・11トレンチでは、地表面下約1.6mと0.6mで少量の土器が出土する暗褐色土層となった。Ⅰ区全体で地表面直下に灰黑色土が厚く層を成し、その下に暗褐色土層が存在することを確認している。

本調査では、確認調査時のデータに加えて前述の土層観察用トレンチを設定して、下層の状況を確認するためさらに掘り下げた。また、調査の進行に合わせて調査区全体が深い谷状地形になることが予測されたため、トレンチを谷とは直交する方向へ設定して斜面上方へできる限り延長し、土層堆積状況から谷自体の土層についても把握できるように努めた。

以上の作業により把握した基本層序（第7図）をみていく。まず、直近の土地利用に由来すると思われる第1層灰黑色土が全体に厚く存在しているが、調査区を設けた斜面頂部（標高234m付近）では、やや薄くなっている。この下に遺物包含層である第2層暗褐色土が調査区全体で広く見られ、その下に第3層褐色土～黒褐色土の層が存在する。第2層と第3層は、いずれも下部に砂粒が多く混じるほか、旧地形に沿って堆積していることから自然堆積によるものとみられる。さらに下層では風化岩塊に由来する第4層黄灰色土が全面にあり、基盤層となっている。

**検出遺構** 第2・3・4層それぞれの上面で掘り方を確認した。なお、第2層上面は第1層形成時の造成作業による削平を多分に受けていると推測された。また、第2層・第3層を掘削後の段階で検出された上層の遺構もあるため、本報告ではこれらを本来該当した遺構面で一括して取り扱っている。

**記録方法** 遺構実測には基本的に測量機器を使用し、一部で平板測量と遺構面測量を併用した。基準点については、調査区内に10m方眼の国土座標系にのっとった杭を適宜設置し、不足分は追加した。これに併せて水準点も設けている。第3遺構面では、航空写真による測量図化を実施した。

遺物の取り上げは、測量機器により座標値を記録する方法と、調査区の方向に沿って任意に設定した10mグリッドごとに行う方法とを併用した（第6図）。グリッド名は北西方向の交点名による。

写真撮影作業には、35・120mmのモノクローム・リバーサル・ネガカラー（35mmのみ）の3種類のフィルムを随時使用した。第3遺構面では、測量図化と合わせて空中写真撮影を実施している。

## 第2節 第2層上面の調査

3時期の遺構面のうち第2層上面では、多数の土坑やピットを確認した。遺構面直上で出土した土器の大半は縄文時代後期から晩期と推定され、遺構も同時期と考えられる。遺構の分布は、I区の中央を北西から南東へドービングする谷地形の谷底部分に集中している。谷の傾斜はI区の中央付近を除き、比較的緩やかであった。ほかに、確認調査時に認められた製鉄関連遺構も上層で存在する。

**製鉄関連遺構群（第8図）** 調査区南東端に位置し、第2層暗褐色土中で確認された焼土および炭化物の面の広がりを括して把握した。南北5.4m・東西4.3mの範囲内に、焼土（S Y）や炭化物（S C）が不整形にまとまった部分がいくつか存在した。いずれも面の硬化や被熱程度は弱く、第2層に相当する暗黒褐色土が混入している。SK 3-6も底面の一部が被熱するのみでごく浅く、製鉄炉地下構造ではない。ただ、I区ではこの周辺でのみ、ごく少量だが製鉄関連遺物が出土している。時期を推定できる土器等の出土はなかった。

以上から、本遺構は製鉄関連遺構の可能性が指摘できるものの、二次的な堆積だったり相当程度の変容を受けていることも考えられる。製鉄関連遺物は考古学的観察により、II区のそれと時期や生成環境が類似するものと推測される。

**土坑（第8～11図）** ほとんどの土坑は出土遺物がなく、北西から南東へのびる谷の底や付近の斜面に集中して位置する。平面・断面の規模や形状からいくつかの特徴を指摘でき、分類できる。第2層を基盤層とし、埋土は第1層灰黒色土が多い。以下、特徴的なものについて述べる。

**SK 01（第8図）** 調査区西壁に掘り方の一部が含まれており、平面全体の規模は不明だが、直径1.4m程の長楕円形の土坑であろうか。深さは1.6m。

**SK 03（第8図）** SK 01とはほぼ同じ深さだが掘り方の平面規模は小さく、直径1.2m。底面へ向けて狭くなり、断面は台形状となる。上部から徐々に埋まったことが土層から読みとれる。

**SK 04・07（第9図）** 平面は楕円形で、底面に直径20cm程度の小ピットが掘られている。立地が谷底・斜面と違はずは見られるものの、直径1m以上、深さ1.5mを超える大型の土坑である。埋土の大部分を第1層灰黒色土が占めており、埋没の進行が比較的緩やかだったことがうかがえる。

**SK 05・06・09（第9図）** 長方形を基調とする掘り方と、底が平らな台形の断面が特徴といえる。1～1.2mの深さに対して掘り方の規模は長軸方向に2m強となり、長大な印象を受ける。

**SK 10（第9図）** 調査区北半と南半の中間、やや急な斜面に位置している。平面形はほぼ正円形で、直径は約1.7m。底部付近は第3層上面の調査時に確認した。掘り方の壁面に付着するようにして、安山岩製の石礫1点（第37図-2）が出土している。

**SK 38・39（第10図）** 調査区南半では、形状の異なる2基の土坑が近接して並んでいる例が見られた。SK 38はやや浅く不整形な平面であって、一方SK 39は方形の平面に2か所突出があり、底面に小ピットを持つ。埋土はともに第1層灰黒色土である。

**SK 41・42・46（第10・11図）** 長方形掘り方の片側長辺に段がつき、断面形も片側は斜めになる。深さはいずれも0.8m程度であり、埋土に変化は乏しい。

**SK 44（第11図）** 長径1m強の楕円形平面の土坑で、底面中央に小ピットが掘られている。深さは約1mで、土層からは徐々に埋まったことが観察できる。

### 第3節 第3層上面の調査

第3層上面でも、土坑やビットを確認した。出土遺物がなく時期は不明だが、縄文時代後期から晩期以前と推測される。第2層上面同様、谷地形の谷底部分に遺構が集中するがその数は減少しており、複数の土坑が一定の範囲内にかたまって位置している。谷の傾斜はやや鋭くなり、最も急斜面となる調査区中ほどでは遺構がほとんど存在しない。

遺構は第3層黒褐色土を基盤層とする。埋土は上に第2層暗褐色土で、一部に大小の石が混じる。

**S K 1 1 · 1 5 · 1 8 · 1 9 (第13図)** いずれも平面楕円形・断面台形で、深さはSK11が1.3m、SK18が1.8mであり、より人念に掘られている印象を受ける。残る2基は掘り方の規模が長径0.8~1m・深さ1mである。前述の2基と比較して一回り小さい。

**S K 1 3 · 5 0 · 5 4 · 5 5 · 6 0 · 6 2 · 6 3 (第13~15図)** いずれも底面中央に小ビットを持つ。大半が長径1m超で、長楕円形平面の土坑である。深さは0.8~1m程度のものが多いが、SK60は1.6mを超えており、調査区内の平坦部分・斜面を問わず確認された。SK54は浅く小規模だが、本来は上層の遺構であり、底部付近のみ残存している可能性も考えられる。

**S K 5 1 · 5 2 (第14図)** 深さが0.7mとほぼ同じ大小の土坑が、近接して確認された。埋土もよく似ており、石が残る点も共通する。

**S K 5 9 (第14図)** 平面が隅丸長方形の掘り方は長軸方向に2mと大きなものだが、1m弱の深さはやや浅い印象を受ける。掘り方の北側は外へ向けて広がり気味である。

### 第4節 第4層上面の調査

第4層上面では、縄文時代後期から晩期以前と推定される土坑やビットのほか、溝状遺構を確認した。上層遺構面同様、旧谷地形周辺に遺構が集まっているが、その数が著しく減少しているため、まばらな印象を受ける。谷の傾斜は最も鋭く、調査区北端の谷頂部付近にのみ平坦地が存在する。

遺構は第4層黄灰色土を基盤層とする。この第4層は水分を含むと粘質度が増す。遺構の埋土は基本的に第3層黒褐色土であり、一部に大小の石や第4層が混じる。出土遺物はなかった。

**S D 0 1 (第17図)** 調査区北端に位置し、東西方向に伸びる溝状遺構である。西側は調査区外へ続く。平面規模は現存長8~8.5m・最大幅1.7m、東端は徐々に細くなる。北側は緩やかに立ち上がるため、断面形は一边が極端に長い三角形である。深さは0.3m弱と浅い。

**S D 0 2 · 0 3 (第17図)** 調査区北東の斜面で確認した。SD02は長さ4.2mだがごく浅い。SD03は当初溝状遺構と認識したもの、精査の段階で2基の土坑と判明した。なお、これらは第4層を基盤層とするものの、埋土が第1層灰黑色土でもあり、時期は全く新しいと考えられる。

**S K 2 1 · 2 2 (第18図)** 切り合い関係から、SK21が新しく、SK22が古い。長楕円形の平面形や0.7m程度の深さなど、ほぼ同規模である。断面台形で、底面は平坦である。

**S K 2 4 · 3 0 · 3 3 (第18図)** 円形から楕円形の平面形で、緩やかに落ち込む底面中央には小ビットを持つ。3基とも本来は、SK33のように1.2m程度の深さがあったと推測される。

**S K 4 8 (第19図)** 掘り方の規模は長径1m・深さ1.6mで、その肩部分には石が見られた。平面規模に比べてかなり深い点が特徴といえる。

**S K 6 5 · 6 8 (第19図)** 掘り方断面が台形となる、隅丸長方形の土坑である。規模や埋土に細かな相違点はあるものの、類似の遺構として考えられる。SP20も同種の遺構であろう。

## 第5節 出土遺物

遺物は基本的に第1遺構直上から出土しており、遺構に伴うものはごくわずかである。調査区全体が谷地形であるため、周辺から流れ込んだものと推測される。形状の判明するものが少ない中、岡化可能な遺物は調査区南半に多く、北半では小片がほとんどであった。大半は縄文時代後期から晩期の粗製土器が占め、文様のある上器は少量で、搬入土器はない。ほかに、弥生土器・土師器がわずかに有る。なお、製鉄関連遺物については次章で一括して記述する。

**縄文土器（第31～33図・第2表）** 遺構に伴う遺物は第31図1～5で、みな上坑から出土した。粗製土器深鉢の口縁部片がほとんどである。2の外側には、凹線と6に似た縄文が観察される。

6以降はグリッドで取り上げた。6は屈曲部で直径30cm近くになる、浅鉢の体部片。10は縦帶文上器の深鉢で、外面の縄文は粗雑である。11～14は口縁部の内面・端部・外面に刻みを持ち、13・14の外面には刻みのある突帯が付く。15～20は口縁部の端部や外面に凹線が入れられるもの。22～25は縦帶文土器の一部と推定され、23はやや古相を示す。全般に色調は白みを帯びる傾向がある。

第32図・第33図は、粗製土器の浅鉢ないし深鉢である。第32図2は口縁部やや下でいったん内側へ屈曲したのち、口縁端部が外反気味にのびる。第33図7のみ底部片を岡化したが、ほかにも複数出土した。同8は壺と思われるもので、胴部最大径を計る付近へ押し引きにより施文される。

これらの時期は、まず第32図10は彦崎K1式平行とみられ、後期前葉に相当する。小片ながら、他にも同種の土器が出土している。一方で、第34図2は中葉の絲原式（滋賀里Ⅲb式）平行、第33図24は晩期後葉の谷尻式平行と推定される。第32図6は器形から前池式以降の突帯文土器が伴う時期と考えられ、ほかにも晩期の凸帯文土器が前述のとおり見受けられる。全体として、後期前葉から晩期後葉までの年代幅があると考えられよう。

**弥生土器（第34図・第2表）** すべて遺構外から出土した。1は、器種不明だが胴部に波状の凹線が施されている。4～7は口縁部に多条の沈線が、8は胴部に刺突文が見られる。9から13は底部片。器壁の厚さに違いを見てとれる。14・15は複合口縁下端が明瞭な棱をなす。

これらは4～7が松本編年V-3期（後期後葉）、14・15がV-4期（後期末）と推定される。

**土師器（第34図・第2表）** 16・17は甕の口縁部片で、いずれも端部は丸くおさめる。18の底部調整は回転糸切りによる。

**石製品・土製品（第36図・第4表）** I区では石鎌2点と石斧2点が出土し、肉眼観察ではみな石材が異なる。4は途中で折れているものの、表面はよく磨かれ丁寧に仕上げられている。

6の土製耳飾りは第1遺構直上、谷底近くのやや緩やかな斜面において単独で出土した。周辺では粗製の縄文土器がまばらに出土しており、周辺の丘陵頂部や斜面から流れ込んだと考えられる。発掘時に一部を破損したものの比較的良好な状態だったため水洗作業を行わず、表面の赤色顔料を保存した。形状が同じ鼓形のものは関東など他地域でもよく見られ、縄文時代後期前葉から中葉のものである。全遺物中、赤色顔料を塗装した遺物はこの土製耳飾り1点のみであった。

## 第4章 槓ヶ堺遺跡II区の調査

### 第1節 調査の方法

**調査の進行** I区同様に荒地であったことから、草木類の除去と表土掘削を重機にて行ったのち、人力により遺物包含層を掘削して調査を実施した。排溝場については可能な限り全域を掘り下げ、製鉄関連遺物を取り上げている。排溝場下層では水分を多く含む土質により壁面が崩壊する危険があったため、重機掘削で上層と遺物の状況を観察し、無遺物層となることを確認した。調査終了後は、I区の掘削上処理に場所がなかったため、やむをえずII区を残土処理場としている。

**調査区の設定（第20図）** 調査区は、南西方向へ向く丘陵斜面や下方の狭い平坦地を中心に設定した。II区はI区の南約50mに位置する。II区内では10m近い標高差があり、I区・II区間は平坦地が存在するためにさほど標高差がないものの、両調査区とも斜面に位置することから最大標高差は25m以上になる。

**基本層序（第20・21図）** 事前の範囲確認調査では、調査区北側に4か所トレンチが設定された。調査中には製鉄関連遺物がまとまって確認されたことを受け、斜面上方へ1か所トレンチを設定し（第20図Tr 4）、遺構の有無を探った。また、調査区を南北方向に縦断する畦を設け、土層観察を隨時行った。

以上により観察された層序は次のような。第21図のように、表土を除き上層から1層明褐色土～2層褐色土～3層黒色土～4層黄灰色土と堆積している。明褐色土は平均して1m以上の厚さがあり、まれに褐色土上面近くで中世・近世の遺物が出土した。褐色土は包含層であり、斜面上方では流れ込んだ上器類が出土しているほか、排溝場の製鉄関連遺物もこの層に含まれる。黒色土は斜面上方の加工段で土に堆積していた。風化花崗岩に由来する黄灰色土以下が無遺物層となる。

遺構は概ね褐色土の上面から黄灰色土上面にかけて確認された。なお、地表面からの掘削深度は最大で4m以上になる。

**記録方法** 基本的にはI区と同様の方法をとっている。調査区全体を対象とする10mグリッドは設定しなかったが、製鉄関連遺構、ことに排溝場については1mグリッドを遺構に沿った任意の方向に設定し、製鉄関連遺物の取り上げを実施した。また、調査終了前に空中写真撮影・測量図化を実施している。

### 第2節 製鉄関連遺構の調査

II区の主な遺構・遺物は、古代の鉄生産に関わるものであった。製鉄炉自体は確認されなかったが、調査区北側の狭い平坦面では炉壁がまとまって出土した。斜面下方では、製鉄関連遺物が大量に廃棄された排溝場が確認されている。本節ではこれらについて記述する。

**平坦面上炉壁群（第23・25図）** 平坦面は標高217m前後に位置しており、東西に細くのびている。上方のさらに狭い平坦部分には新しい時期の採石跡が残り、（図版13）そこから急傾斜で平坦面に降りている。平坦面下方には排溝場があり、緩やかにくだっている。

平坦面に堆積していた明褐色土を掘り下げると、製鉄炉の炉壁が平坦面の方向に沿って、2m×1mの範囲内にまとまって出土した。図に示した範囲の東側でも調査区南北方向の畦を取り除いて

全体を確認したが、炉壁の出土はまばらだったため個別に取り上げた。炉壁の下は面的に強く熱を受けた痕跡はなく、周辺とほとんど異なる。また、炉壁取り上げ後に薄い黒色砂層が広がっているのを確認したが、いわゆる地下構造の一部ではなかった。後述のSK01を除けば付近に明瞭な遺構はなく、被熱部分も存在しないため、製鉄炉は平坦面の上方に存在していた可能性が高い。

炉盤は0.5m近い大きさのものから、小片まで様々である。第25図27・28など南側の炉壁で外面を上にし、原位置で倒れ込んだ状況をうかがわせるものもあるが、反対の北側は必ずしも対応しない。炉壁自身には著しい摩耗等が認められないため、自然流入によるものではなく、製鉄炉操業後二次的に現在位置へ移動した可能性が推測できよう。これらの炉壁は考古学的観察の結果、排滓場出土のものと操業・生成条件が同一と見なし得ることが明らかになった。したがって、時期も排滓場と同じと推定される。

また、炉跡を確認するための第4トレーナーでは、表土の下層でごく新しい磁器片1点のみが出土した。同層の直下は赤褐色の無遺物層（地山）であり、製鉄炉跡を含め遺構は全くなかった。

**SK01（第23・24図）** 平坦面西側、炉壁とはほぼ同標高で確認された不整長方形平面の土坑で、主軸の方向は北西から南東にとり、長軸1.1m・短軸0.9mの大きさである。深さは20cmもない程度で浅く、堆土は炭化物や焼土が混じった褐色土と、黒色炭化物層が主である。土坑の東寄りに黒色炭化物層が固まってみられ、含まれた木炭の一部を観察・分析用に採取した（第82図405）。平坦面下方へ向けては明瞭な掘り方が確認できず、斜面の流出に伴って崩れたものと推測される。底面は東側が西側よりも浅いため全体的に西へ傾斜しており、東側は弱く被熱している。鉄塊系遺物数点が出土したが、小塊のため掲載していない。時期の分かる遺物は出土しなかったが、炉壁群に近いことや製鉄関連遺物から、同時期かそれ以降と推定される。

本遺構は炉壁群とはほぼ同じ時点で確認し、当初は炉壁群の位置に炉の本体を、土坑を排滓目的のものと推定した。逆に黒色炭化物層の埋土から、本遺構を製鉄炉地下構造の一部とすることも否定はできない。が、ごく弱い被熱状況や土附状況、少量の製鉄関連遺物では製鉄関連遺構と断定することは困難と考えられ、そうであっても残存状況はきわめて悪いといわざるを得ないであろう。

**排滓場（第26・27図）** 平坦面下方の南西斜面一帯では製鉄関連遺物が大量に出土した。遺物の分布には粗密があり、集中するのは1号土坑の南西8×4mの範囲である。本来はより西側へ広がっていた可能性も高いが、調査区壁面は伏流水による崩落の恐れがあり、調査を断念した。調査区東側では0.4~1.5m程度包含層を掘削したが、図示した範囲よりはるかに出土量が少なかった。

1層観察からは排滓堆積層が斜面上方に薄く、下方で厚いことが明らかである。下方では大小の礫も多く混じっており、遺物が廃棄後に移動した可能性をうかがわせる。そのためか、操業回数を反映したような分層は行えなかった。排滓場南端では堆積層下面から約3m掘り下げたが、湧水や斜面傾斜の急激な変化から、排滓堆積層がより深い位置や南へは広がっていないことを確認した。

調査では、遺物を1辺1mのグリッドごとに取り上げる方法を採用した。グリッドの設置範囲は順次広げ、最終的に第26図のようになった。詳細は本章第4節や次章に譲るが、遺物はグリッド別に洗浄・分類・抽出・記録作業を行い、最終的にコンテナ500箱近く、総重量4.6トンに達した。

年代決定の指標となるものとして、概ね10世紀代と推定される黑色土器や土附器が排滓堆積層の直下、数か所で出土した。土器の層序から考え、この年代を排滓場および平坦面の時期としてよいと考えられる。よって、未確認だが存在したであろう製鉄炉の時期も同じ10世紀代と推測される。

### 第3節 その他の遺構の調査

II区では製鉄関連遺構のほか、近世以降の土坑2基や、加工段1とその周辺遺構が確認された。また、調査区西側で以前の耕作などに伴う南北方向の石列1条を確認している。

**S K 0 2 (第28図)** II区南東隅の斜面に位置し、風化花崗岩の多く混じる黄灰色土に掘られている。平面隅丸長方形の十坑と、その北側斜面上方へ向けて平面三角形となる掘り込みからなる。土坑の規模は一辺1.6～1.8m・深さ0.6m。図示していないが、掘り方内には大小の自然石が比較的密に詰め込まれていた。これら石や土坑内部に貼られた粘土には被熱した痕跡が見受けられ、とりわけ南側内壁は著しい熱のため赤く変色かつ固く縮まっていた。石や埋土の間に少量の炭化物が残っており、一時的にせよ土坑内や上面で燃焼作業が行われた可能性が高い。

土坑北の掘り込みは土坑と同様の埋土ではあるが、焼けた石や掘り方に被熱の痕跡はない。深さは土坑付近の0.4mから、斜面上方へ向けて徐々に浅くなる。東側はS K 0 3との関係から明確に判別できなかった。

**S K 0 3 (第28図)** II区南東端で確認した、平面不正長方形の土坑である。規模は2m×1.2m以上で、本来はS K 0 2に先行して掘られていたため、交錯する部分は失われている。S K 0 2と同様の構造であれば、調査区外へ続く可能性も考えられる。埋土は同じ暗灰褐色土で、少量の焼けた石と多量の炭化物を含んでいた。掘り方内壁に粘土貼りは認められなかった。

S K 0 2では埋土から在地産（布志名焼）の陶器碗小片が出土しており、少なくとも19世紀以降の時期に比定できる。神戸川流域の類例や当地域の伝承から、S K 0 3とともに、近世以降盛んになった麻を蒸して繊維をとる目的で使用された土坑と推定される。

**加工段1 (第29図)** 排溝場の調査中、平坦面のすぐ下方の斜面で黒色土が向て堆積していることが明らかになった。この辺を掘り下げ、南北7m・東西8mの範囲に不正形に広がる加工段1を確認した。人為的な地形加工の痕跡がはっきり認められたわけではなく、自然地形の可能性もあるが、便宜上加工段と呼んでおく。遺構の性格は不明である。

遺構の底面は平坦でなく中央がくぼみ、斜面上方と下方の高低差は2.5m余りである。埋土の状況は、黒色土下層に異なる複数層が数回に分けて堆積したことを示している。出土遺物は多くの層で繩文晩期や弥生後期の土器小片が出土するが、時期のばらつきや摩耗度から周辺より流れ込んだと推測される。1層の上部寄りでは製鉄関連遺物が出土しており、下限年代は10世紀代と推測される。

**S K 0 4・S P 0 1 (第29図)** ともに加工段1に隣接する。S K 0 4は長さ2.7mで長楕円形の土坑である。埋土は黒色土。S P 0 1は2段の掘り方を持ち、深さは0.6mである。いずれも埋土中から遺物は出土せず、時期は決定できない。位置関係から加工段1と同時期のものであろうか。

### 第4節 製鉄関連遺物

本節ではI区・II区出土の製鉄関連遺物について記述する。これらは遺構と異なる有益な情報を得るために、遺構が直接確認されなかった当遺跡での鉄生産を探る上で重要である。整理作業は、洗浄・分類・抽出・記録を順に行なった。各分類の代表資料は金属学的分析を実施し、興味深い成果が得られている（第7章参照）。なお、確認調査時出土資料も整理作業の対象としている。

作業工程の概略は第37図のように、肉眼で鉄滓類と非鉄滓類をまず分類し、強力磁石で鉄を含むものをさらに抽出、金属探知器により鉄の含有量で区分するというものである。肉眼分類は各段階で行い、資料の持つ情報によって細分していった。分類項目は大別して「炉壁類」・「流動滓類」・「炉内滓類」・「鉄塊系遺物」・「木炭」・「砂鉄」・「土」が挙げられる。

#### I 区出土製鉄関連遺物（第38・39図）

I区では製鉄関連遺物の出土総重量が1.3キロとごく少量であったため、確認調査時の資料を合わせて分類した。全体は製錬系の資料で構成されており、特徴も古代にさかのぼる様相を示している。

**炉壁類** 2点挙げたが、いずれも部位を特定できるほど大きくはない。胎土にスサを含む点は、中世以前のものと推定する根拠の一つである。

**砂鉄焼結塊** 小片が製鉄関連遺物群の斜面上方、第7トレンチから出土した。炉内へ投入された製鉄原料である砂鉄が、還元状態になる前に熱を受け固まったものである。

**鉄滓類** ごく少數だが流出孔滓・流出溝滓を抽出した。流出孔滓は、炉外へ滓を流し出すために短軸側壁面の下端へ設けられた円形の流出孔周辺で生成される。流出溝滓は、炉外へ排出された滓が流れれる溝で生じたものである。いずれの遺物からも排滓孔・流出溝の内径が比較的小さいことがうかがえ、そう大きくない炉で操業した可能性が指摘できる。第39図7～9は一般的な流動滓である。

**炉内滓** 製鉄炉内で生成された滓を鉄の含有量によって分類した。11・15・19・20は炉壁表面で生成されたことが、表面の剥離痕跡や付着した炉壁上から推測できる。また、木炭痕が観察できるものも多いが、錆化や付着土砂により本来の形状が不明なものも少なくない。

**木炭（第38・47図）** 21は製鉄関連遺物群で採取した。年数を経た広葉樹を使用している点は、II区排滓場出土木炭と共に通す。

#### II区平坦面出土製鉄関連遺物（第40～44図）

既述のとおり、II区平坦面上では炉壁がまとまって確認された。これらは出土位置が異なるため排滓場出土資料とは分けて扱い、わずかに出土した鉄滓類も合わせて第40図のように構成した。

**炉壁類** 炉壁は長軸側・短軸側の区別と、壁面の上端から下端に至るまで推定される原位置ごとに分類し、ほぼ炉の全体に対応する代表的な資料を抽出できた。これらから製錬炉の構築時・操業時・操業後各段階の情報を得ることができ、炉形の復元にも有益である。

**上段上半（頂部）** 1・2は炉壁の頂部にあたり、平坦な上面が確認できる。内面の被熱も弱い。

**上段上半（被熱）** 頂部よりやや下方で若干被熱しており、上面は接合面となる。短軸側は全体に湾曲し、平面形がやや弧状となる。

**上段下半（砂鉄焼結）** 6～11はいずれも内側表面に砂鉄焼結部分が見られる。上半部も含めて上段の資料では内面に上下方向の筋目が残るものがあり、炉壁整形時の痕跡と推測される。

**中段上半（滓化）** 内側表面は滓化が始まり、一部砂鉄が焼結するほか、気泡や垂れが見られる。15は大型の破片で、各面や内面に接合部・接合痕跡が観察された。ここから、炉壁を積み上げる際の粘土単位1段は高さ約8cmと推定できる。外側はヘラ状工具によるケズリ調整である。短軸側の16は平面形が強い弧状となり、角部と推定される。

**中段下半（通風孔上）** 内側表面の滓化が進み、炉壁の浸食も大きくなる。19では滓化した内側表面に酸化・還元状態が13cm前後の間隔で交互に見られ、通風孔部に対応すると推測された。

**下段下半（通風孔付－1）** この部位は炉壁底部近くに位置し、通風孔が残る。滓化部分が厚くなる傾向にあり、胎土の被熱もより顕著である。通風孔は主として直徑約2.5cm以上の円形であるが、上下方向へ広がる梢円孔もあり、炉内を観察するために通風孔を拡張する見穴の技法が行われた可能性を指摘できる。22は角部近くにあたり、通風孔間隔が8cmと狭くなっている。

**下段下半（通風孔付－2）** 27～29は接合可能な一連の資料である。通風孔も各資料に残り、27では径2.7cm前後、絞りのない直孔で、炉壁に対し斜め右方向に9～10cmの間隔で開孔する。29では逆方向へ約7cmの間隔で通風孔が残る。胎土にはスサがわずかに入る。

**炉内滓** 表面の一部に、炉内に特徴的な炉壁土や焼結した砂鉄が観察される。31では表面に工具痕が残り、流出孔付近から炉内へ工具を入れた際のものと考えられる。

**流出孔滓** 固化した3点は、流出孔の奥で生成された点が共通する。35の形状からは、傾斜角度の強い流出孔だった可能性が推測される。

**流出溝滓** 流出溝滓の多くは複数の溝が重層する形状となる。36・38では直徑約5cmの棒状流出孔岸が上部に認められた。

## II 区排滓場出土炉壁（第45～60図）

平坦面上でまとまって確認された炉壁と同様、排滓場出土の炉壁も長軸側・短軸側の区別と壁面における推定位置により分類し、炉の全体観をうかがわせうる資料群を抽出した。特筆すべき資料として通風孔目印穴を持つものや、操業後に粘土を貼り重ねた補修痕のあるものなどが挙げられる。

また、平坦面上の炉壁は砂質胎土で通風孔径が小さめなのに対し、排滓場出土の炉壁は粘土質胎土で通風孔径が比較的大きい傾向にある。補修された炉壁は砂質のものを粘土質へ変えており、これを操業の全体的な変遷と捉えるならば、平坦面・排滓場での前後関係を示すと言えるかもしれない。

**通風孔・目印穴付** 目印穴は通風孔を設けるために、炉壁積み上げ単位の接合面へ窓戸の際に穿たれたと考えられる。直徑1.3cm前後の円孔で、間隔や方向は通風孔と連動していると推測される。

**上段上半（頂部）** 頂部内側の断面形は緩やかに弧を描く。内側に整形痕が残るものもある。

**上段上半（被熱）** 内外面が生じる49は、厚さ約6cm。胎土に石英質の石粒を多量に含むものと、粉炭やスケを多く含むものがある。

**上段下半（砂鉄焼結）** 59の内側表面ではこの部位に特徴的な砂鉄焼結部分に加え、その上方に被熱面、下方に強い滓化面を確認でき、炉内の熱分布が明らかになる。また、57では炉壁積み上げ時の痕跡から木製ヘラ状工具の使用を、62からは炉体作成時に炉壁外面に巡らされた細の痕跡を、それぞれ推定できる。

**中段上半（滓化）** 内外面とも残る資料を挙げた。内側表面が滓化するため厚さにはばらつきがあるものの、最大で約10cmである。70は外面の横断面形をL字形に整形した角部の資料である。

**中段下半（通風孔上）** 角部にあたる81は70と類似した外観を持ち、外面の形状もよく似ている。86の通風孔は直徑約2.7cmの円孔であり、12.3cm前後の間隔で設けられている。

**下段上半（通風孔付－1）** 通風孔は多くが上下へ広がる梢円孔で、その間隔は9～12cm、角度は緩やかである。93・99では、長軸中央から短軸側へ向け水平位置が高くなるように通風孔が設けられていた。また97は炉壁本体と通風孔部の胎土が違い、通風孔の直徑や間隔も異なっている。

**下段上半（通風孔付－2）** 稚円形通風孔の下に溶損部分が8～10cm程度残る。通風孔間隔は長軸中央で14cm、角部付近で9.5cm。111では流出孔から内部へ工具が挿入された痕跡が残っていた。

**下段下半（炉底塊付）** 内側に炉底塊が生じており、下面是接地面か炉底塊との破面になる。通風孔も各資料に残り、118・119には長軸側の最終通風孔が残り、炉壁に対する角度は45度を測る。120では丸棒状と浅いV字状の工具痕が下面近くで観察された。

**補修** 操業後に炉壁内側表面へ粘土を貼り重ねて補修しているものをまとめた。補修上の厚さは上部で1.5cm、下部で3~4cmである。補修に際して土を粘土質から砂質へ変えたものもあり、注目される。通風孔位置に変動がない資料が存在することから、操業後の炉壁が直立したままの状態で補修が行われたと推定できる。また補修は炉の上部から基部に至るまで確認されるため、全面的に実施されたことが想定される。

**被熱曲がり** 操業後に通風孔下部は溶損で薄くなってしまっており、前屈するようにして下方の炉壁内側表面へ接着することがある。固化した3点はいずれも通風孔周辺の炉壁である。

**工具痕・流出孔跡付** 148・149は通風孔近辺に棒状の工具痕が認められるもの。操業時に炉内へ差し込まれたものであろう。150は上面を炉壁上が覆い、下部に流出孔跡が残る。

#### 土・砂鉄類（第61・62図）

**地山粘土** I区・II区の炉壁胎土と比較分析するため、地山の土としてI区では第4層黄灰色土を、II区では緑色土をいずれも調査区内の任意地点で適量採取した。

**砂鉄** 自然堆積による153は、II区南の道路脇排水溝から採取した。この地域では、降雨後に土砂が流れると黒い砂鉄を肉眼で識別し採取できる。154は分析試料（TOI-11）で、排滓場D12グリッドの製鉄関連遺物を洗浄後の残砂から抽出した。

**砂鉄焼結塊** 大半が炉壁表面で生成されたもの。焼結状態はまちまちで、磁着部位も異なる。

**マグネタイト系遺物** 焼結した砂鉄の溶融が進み、流動状態へ至る段階の資料である。172に代表されるように、砂鉄焼結塊と同様に炉壁表面で生成されることが多い。

#### II区排滓場出土流動滓類（第61~68・70~73図）

**炉内流動滓** マグネタイト系遺物の溶融がさらに進むと、炉内流動滓となる。ここでは大きさと生成の進行により3種類に分けた。小では、細い単位流動滓が集合して1個の滓が形成されていることが分かる。中・大と大きくなるにつれて生成場所も炉の下方へと移り、複数の滓が合わさっていく。中では粉炭痕・木炭痕が、大では炉壁粉の混じる地山土が下面に見られる。

**単位流動滓** 流動滓の最小単位であり、幅は1cm弱とごく細い。

**工具痕流入滓** 炉壁内側表面に見られた工具痕へ、流動滓が流れ込んで固化したもの。滓の形状から棒状工具が使用されたことがうかがえる。

**流出孔跡** 流出孔の直径の大小に応じて3種類に分けたほか、つまり先や工具痕付、炉底塊から連続するもの、含鉄のものを分類した。流出孔径は最小で2cmに満たず、最大のものは10cm近くになる。つまり先は流出孔跡の先端部にあたり、人為的に滓の表面や形状が変えられた痕跡も見受けられる。同様に工具痕が明瞭に残るものは炉底塊から続くものでも存在し、操業途中で炉内環境へ干渉しようとする行動がたびたびあったことを示すものと言えよう。

**流出溝跡** 溝の規模を示す滓の幅・厚さにより、大中小と分けた。横断面は多くがV字形だが、一部に梢円形のものもある。293のような大型のものでは、複数の滓が長時間流れ続けている様相がうかがえる。

**流动滓** 炉外での流动滓を大きさごとに把握した。平坦面上を流れたものも含まれている。

## II区排滓場出土炉内滓類（第68・69・73～81図）

炉底塊 319～333は、製鉄炉内の底部で生成された塊状の滓である。流动性は低い。

319～321は厚さの違いや炉の内幅で分類し、第69図では炉内での位置を復元することを狙って配列した。319は5cmに満たない厚さのものが多く、320ではみな10cm近い厚さであった。321-1は短軸側の両側部がほぼ残り、幅は25cm程度になる。また、各資料は接合しないもののほぼ炉長辺にそって残ることから、内法で長軸方向に0.9～1m程度の長さと推測される。なお、これら炉底塊でも工具痕や工具による変形は多數確認でき、操業末期と推定される324では4か所に工具痕が残っていた。

炉底塊（含鉄） 325～333は鉄を多く含む炉内滓である。鉄部が存在するため表面に酸化土砂が付着したり銹化しているものも多い。磁着域の状況や破面の観察結果から、鉄が散在して生成されていると推測される。

炉内滓 製鉄炉内で生成された滓のうち、鉄分を含まないものを334～352のとおり選び出した。滓質には緻密なものと気孔が多いものとがある。343以降では工具痕が観察され、その多くは丸棒状のものであった。

炉内滓（含鉄） 炉内滓でも鉄を多く含むものを抽出したのが、353～390である。炉底塊と比較して小片が多い。メタル度の低いものは、炉壁表面で生成された砂鉄焼結塊やマグネタイト系遺物に由来する傾向が見受けられる。排滓場のみならず本遺跡では鉄塊系遺物が全く出土せず、特に鉄分の多い資料は第77図に挙げたメタル度Lの炉内滓のみであった。387・389は炉底塊を割った破片と推測されるが、同様の資料はメタル度M・Hでも少量である。



製鉄関連遺物選別状況

## II区排溝場出土の他資料（第77・81・82図）

**再結合滓** いったん溶けた滓が再び固化する際に、周辺の別の滓や木炭・砂鉄などを巻き込んでできあがった。大小織り交ぜて6点を掲載した。性質上破面が多いため、元の形状は推定しにくい。

**鉄製品** 鋳造品は397～403で、鉄片や釘などである。397や403は刀子の一部であろうか。鋳造品は1点404のみであり、鉄製鍋の体部片と推定される。いずれも排溝堆積層から出土しており、同じ時期のものと考えられる。

**木炭（第77・81・82図）**

鉄生産時の燃料となる木炭については、平坦面上の炉壁群やSK01、排溝場グリッドから採集した。どれも広葉樹を用いた黒炭であり、比較的年輪数の多い点やミカン割りという点も共通している。409は排溝場A8グリッドから出土しており、下端部に鋭利な加工痕を持つ。製鉄関連遺構に木炭伴っていた作業建物の柱である可能性も考えられる。410は裏面に鉛色の光沢を持った面が認められる。

## 第5節 その他の遺物

本節ではII区出土遺物のうち、製鉄関連遺物を除いた土器・陶磁器や石製品をとりあげる。繩文土器・弥生土器は人半が第3層黒色土から、土師器や陶磁器は第2層褐色土からそれぞれ出土しており、直接遺構に伴うものは限られている。したがってほとんどは流れ込みによると考えられた。これらの総量は28リットル入りコンテナで2箱程度である。

**縄文土器（第35図・第3表）** 3～6は粗製浅鉢ないし深鉢の口縁部片である。5を除いて口縁端部あるいは口縁部外側の突縫に刻みが施される。時期は晩期と推測され、I区でも同時期のものがある。多くが加工段1の堆積土であった黒色土より出土した。

**弥生土器（第35図・第3表）** 弥生土器も加工段1の黒色土から出土しているものがほとんどである。また11以外は複合口縁を持つ甕口縁部であり、I区でも同時期の遺物が出土した。11は前期の甕口縁部片で、器壁が荒れているものの施文を観察できる。

**土師器（第35図・第3表）** 16は高杯の杯部と脚部の接合部分であり、杯部の17とは接合しない別個体である。19・20は内面にまばらに掘り目に入るもので、斜面中ほどで出土した。

21・22・25は排溝層の直下から出土しており、製鉄関連遺物の時期決定の指標とした遺物である。21・22は内面が黒くともに高台を持つ。21の高台径が後のものより小さく古い様相を示している点や、縁釉陶器の模倣により高台が出現したとされる点を考慮するならば、これらは10世紀の資料と推定できるように思われる。

**陶磁器（第35図・第3表）** 1・2は、八束郡玉湯町所在の布志名窯で生産された、碗の口縁部と底部片である。布志名での本格的な生産開始は19世紀以降といわれ、SK02の年代もそのころと推定した。同様の遺物は上層の明褐色土からも出土している。

23・24は肥前系陶器で、24の内面には胎上目が残る。18は青磁口縁部小片である。

## 第5章 まとめ

### 第1節 縄文時代の遺構・遺物について

I区の土坑群（第6～19図） 調査開始前は南東にひらける緩斜面であったI区も、旧地形は尾根の斜面が交じわる狭い谷だったことが明らかになった。谷が埋まっていた中で確認された3時期の遺構面では、第2層上面で22基、第3層上面で23基、第4層上面では半減して11基と、それぞれ土坑が複数確認されている。なおこの数からは、第2層上面SK36や第4層上面SD03といった時期の下るものを除いている。

土坑の多くは出土遺物がなく、埋設土器や果実類も全く確認されていない。形状では直径1～1.5m程度の円形・梢円形平面のものや長辺が2m強となる長方形平面のものが、比較的多く存在した。断面形が袋状のものはほとんどなく、台形もしくは半梢円形に掘られていた。ごく浅いものがある一方で、深さが1.5mを越えるものも少なからず確認されている。

土坑の立地は、第4層上面の南側を除き、調査区の北西から南東へのびる谷の底やその間近の斜面に集中している点が各遺構面で共通する。土坑2基が対のごとく接近して掘られる点や、5～10mの間隔をおいて複数の土坑がまとまっている点、谷底で直線状に並ぶ点など、配置には規則性が指摘できそうである。また、底面中央に小ピットが掘られた土坑も存在する。杭が埋め込まれたものであろうか。

これらの土坑は、出土遺物がほとんど見られない点やその規模、配置の規則性や落下物に対する構造などから、墓坑や貯蔵穴よりは落とし穴であった可能性が高いように思われる。出土遺物より土坑の時期と推定される縄文時代後期から晩期にかけては、当時の楕ヶ井遺跡周辺が狩猟の場であったという推測も可能であろう。むろん断定はできないため、墓坑など他の可能性も念頭に置いておくべきである。

赤色顔料を塗布した土製耳飾り（第36・84図） I区第2層上面では、表面に赤色顔料を残す土製耳飾り1点が出土した。既述のとおり出土地点は第2層上面のP11西側で、流れ込みによると見られる。大きさは直径3.2cm・厚さ1.7cmで、重量は9.2gである。赤色顔料は固化した面でだいぶ剥落しているが、裏面や側面では比較的良好残る。全遺物中、この土製耳飾り1点のみが赤色顔料を塗されていた。口型で文様のない外観から、設楽博巳氏による分類のT2A1類に相当する。<sup>(1)</sup>

管見の限り、これまで島根県内では赤色顔料が塗布された土製耳飾りが3点出土している。いずれも縄文時代後期から晩期のものであり、楕ヶ井遺跡出土のものとはほぼ同時期とみなしうる。形状は小浜洞窟遺跡例のみや小型ではあるものの、いずれも白型であって大きさもほぼ一致している。

出土状況ではキタバタケ遺跡・小浜洞窟遺跡・沖大遺跡のいずれもが、集石遺構や人骨の周辺から出土しており、埋葬行為との関わりがうかがえる。楕ヶ井遺跡での出土状況は、前述の通りこれらとは異なるが、形状面での共通点をより重視するならば、楕ヶ井遺跡出土のものも元来は埋葬行為に関連するものであった可能性を指摘できると思われる。

一方、朽津信明氏には、沖大遺跡を除く3点と楕ヶ井遺跡周辺の顔料を塗布した土器数点のX線分析を依頼した<sup>(2)</sup>。その結果、楕ヶ井遺跡とキタバタケ遺跡では朱が使用され、他はベンガラであることが判明した。沖大遺跡は残念ながら実施できず、各資料間の詳細な比較も行っていないが、

ほぼ同じ年代・形状のもので同種の顔料が使用されている点は注目される。小浜洞窟遺跡を除いた3遺跡が山間地域に位置するという分布の観点からも、朱や耳飾りの生産・流通を考える上で極めて興味深い事例と評価できよう。

## 第2節 近世・近代の麻蒸し土坑について

いわゆる麻蒸し土坑とその作業（第28・85図） 本節では、Ⅱ区で確認されたSK02・03について地元の方からの聞き取り内容を紹介し<sup>(3)</sup>、それを参考につつ報告する。

当地域での麻の生産は江戸時代より盛んで、戦前まで行われた。麻は春に種を蒒き夏に1~2.5m程度に伸びたものを収穫していたという。太さ10cmの束にまとめ、燃料となる松の根や薪と合わせて麻蒸し作業を行う場所へ人力運搬車（大八車）で運んでいった。

作業場所はSK02と同様の構造であり、それは土坑状の燃焼部分と上方の麻を置き蒸す部分とに別れている。燃焼部分では多量の石を焼き温度を上げる一方で、石の間に水を置いて蒸すことを約3回繰り返した。表面には濡れむしろや土の付いた柴などを乗せ、蒸気を上方へ送るよう工夫がされている。麻を置く部分との境には濡れむしろを乗せた大きな丸太を置いて火を防ぎ、麻を替えるたびに取り替えていた。麻は茎の太い部分を燃焼部分へ向けて置き、その上にむしろ、さらに土をかぶせたという。

この後麻は家に持ち帰って数日乾燥させてから、川へつけて柔らかくして表皮（荒そ）を剥ぎ、織維質の内皮を商品として販売したという。家庭では、表皮を灰で煮た後さらし・乾燥を経て織維として用いた。内側の部分（おから）は盆飾りや屋根葺き材に利用された。

上記のような麻蒸し作業場所の構造は本遺跡のSK02と全く同じであり、そこで作業をうかがわせるものである。燃焼部分のみ強く被熱し、上方の斜面は被熱していないものも理解できよう。

第85図は、飯石郡領原町地内での発掘調査で確認されている麻蒸し土坑での作業風景を復元したものである<sup>(4)</sup>。こちらは平坦地に石を充填した瘤円形土坑が燃焼部分として残っており、麻を置く部分は明瞭に確認されていない点が異なっている。原理は同じであるものの、地域性を反映した点として注目される。

## 第3節 製鉄関連遺構・遺物について

揖ヶ井遺跡の主要な出土遺物として製鉄関連遺物が挙げられ、遺跡を特徴づけている。本節では製鉄関連遺物を検討した後、確認されなかった製鉄炉の形態と操業について考察したい。なおT区についてはⅡ区にくらべ極めて少量の出土量であったため、量的な集計からは除いている。

機能 グリッド別も含めた製鉄関連遺物の組成は、第24~26表・第87~89図の通りである。重量比でみると流動炉が全体の半分を占め、炉喉が1/3、残り2割弱が炉内滓である。鉄塊系遺物や炉底塊が少ない分炉内滓が多い点は、操業状況を検討するうえで注目される。流出孔滓に加えて短辺の炉壁も少なかったため、短辺が短い形状の炉と推測される。

金属学的分析結果からは、I区とII区で操業の様相が全く異なっている点が指摘されている<sup>(5)</sup>。I区では二酸化チタン（TiO<sub>2</sub>）が12.20%もの高率で検出されたMAK-3のように高チタン砂鉄原料を用いた高温製鍊が行われているのに対し、II区ではほとんどが1~3%台の比率を示すなど低チタン砂鉄原料を使用した低温操業が想定されている。使用された木炭も、硫黄・リンの含有量

がⅠ区で問題ない程度に低い一方でⅡ区は非常に高く、生成鉄への影響が懸念される程度である。

以上のようにⅠ区・Ⅱ区間に存在する相違については、操業の目的とする生成鉄の種類の違いではないかと指摘されている。残念ながら両地区とも製鉄炉自体を確認できず、Ⅰ区の分析資料数がⅡ区に比較して少ないということはあるものの、Ⅰ区・Ⅱ区間で操業内容が異なっている可能性は充分考慮されるべきと考える。また、放射性炭素年代によれば70年という時期の開きが両地区間に認められており<sup>(6)</sup>、操業内容の相違が時期差と関連づけられることも考慮すべきであろう。

またⅡ区では、内部に鉄分が不定形かつ散在し止まっている鉄滓類が多いことから、鉄分の還元や鉄と滓の分離が不充分な操業（いわば失敗）も存在したことが明らかになった。製鉄関連遺物の考古学的観察による推測が、金属学的分析結果からも裏付けられた点が注目される。丘陵地帯では古代の製錬炉についてまだまだ調査例が少ないため、資料・データの蓄積という点でも、本遺跡で遺物の詳細とあわせて金属学的分析による特性が明らかになった意義は大きい。

**立地** 横ヶ井遺跡は、山間を流れる斐伊川を見下ろすような丘陵南側斜面中ほどに位置し、斐伊川沿いの狭小な平坦面からは約30m以上の高低差がある。原料砂鉄や燃料となる薪炭の調達には相応の労働力が必要だったろうが、利点としては、斜面下方へ向け排滓が容易な点が挙げられる。

また、時期は異なるものの仁多町亀ヶ谷遺跡（12世紀初頭）は丘陵の緩斜面に立地しており<sup>(7)</sup>、当地域における製鉄遺跡の分布傾向をうかがわせている。

**時期** Ⅱ区排滓場の製鉄関連遺物包含層の直下で出土した土師器片は、10世紀代と推測される。また、製鉄関連遺物の考古学的観察からは炉盤胎上・被熱状況等に古代の様相が指摘でき、10世紀代までの操業と考えられる<sup>(8)</sup>。確実な焼土面がなく地磁気年代測定は実施していないため、木炭を分析した放射性炭素同位体による年代が考古年代との比較対象となる<sup>(9)</sup>。これは曆年較正後の年代として、Ⅰ区構造群でAD.790±60（8世紀末前後）、Ⅱ区排滓場でAD.860±60（9世紀半ば前後）といった全体にやや古い年代観が示されている。とはいえ炭素年代には幅があるため、結論として遺構と合致する10世紀前葉の時期を推定しておきたい。

**製鉄炉の操業と形態（第86図）** 製錬炉の各部位（頂部・通風孔周辺・基底部・角部・外面）の炉壁頑が一通り揃い、炉底塊も厚さや幅など生成状況に応じて複数確認できたことから、炉の復元を行った。なお、図とは異なる形状の資料もあり、あくまでも一試案であることを申し添えておく。

炉は長方形箱形炉で、外形が長さ1.4m強・幅0.5m・高さ1.0m、内法が長さ1.2m強・幅0.3mと推定した。長さと幅は炉壁・炉底塊から、高さは炉壁による。炉壁の厚さは上端で6cm、下端は現存で10cm程度だが、構築時は内面へより厚かっただろう。全体的に幅の割に細長い印象を受ける。

通風孔については、角部の直近のものが炉壁内面に対し45度の角度となることや、通風孔間隔を複数残るものから計測した上で、炉の長さに合わせて配列した。炉の内側基底部から通風孔までの高さは約10cmと一定しており、通風孔の傾斜角度は水平気味といってよいほど緩やかである。

また、炉壁内面や通風孔部分のみに異なる胎土を貼って補修したものがあり、製錬炉では希少な例として注目される。

操業状況については、砂鉄枕組塊が多い点や炉壁の溶融状態・鉄塊系遺物がごくわずかな点などからは、炉内温度がさほど上がらず、通風孔付近に小鉄塊がいくつか形成された程度と推測される。古代に特徴的な、流れるがまま一定の排滓を行って炉内の小鉄塊を採集するというあり方は、奈良時代以降見られる官衙的な大規模鉄生産とは大きく異なる。本遺跡では自家消費分程度であろうか。

少量を生産したのであろう。しかし、炉壁を補修する点や原料砂鉄・炉壁胎土を近隣に直接求めていない点など、一概に牧歌的な生産形態とは片付けられない点にも注意しておきたい。

いずれにせよ島根県内では古代の製錬炉の調査例は多くなく、新資料として評価できる。

## 第5章 註・引用文献

- (1) 渡瀬博己「土製耳飾」『縄文文化の研究』9 p.206-217 2000 雄山閣。
- (2) 本書第7章第2節。
- (3) 聞き取り調査には、2002年3月島根県仁多郡仁多町那村の杠政義氏宅へ山根が伺った。ここに感謝申し上げる。
- (4) 『かんどのながれー総集編ー～志津見ダム地内の遺跡～』 p.49 2002 島根県教育委員会。
- (5) 本書第7章第4節。
- (6) 本書第7章第3節。
- (7) 『船・迫積穴窓群 西尾社遺跡 龜ヶ谷遺跡 シベ石遺跡 時仏遺跡 時仏横穴墓群 尾原ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』2001 島根県仁多町教育委員会。
- (8) 穴沢義功氏のご教示による。
- (9) 本書第7章第3節。

## 参考文献

### 道路周辺の環境と調査

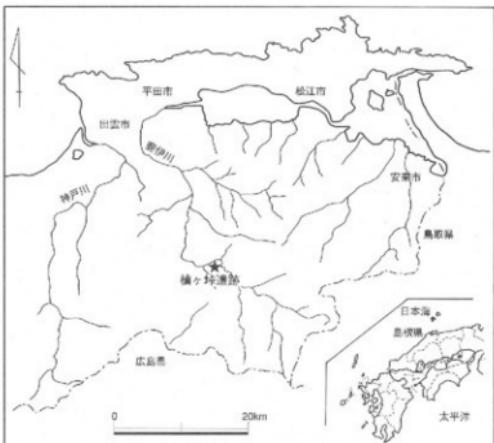
- 『日本歴史地名系 第三三巻 島根県の地名』1995 平凡社。  
広島大学文学部考古学研究室編『中国地方製鉄遺跡の研究』1993 漢水社。  
河瀬正利『たたら吹き製鉄の技術と構造の考古学的研究』1993 漢水社。  
小林達大編『縄文土器大観』1988 小学館。  
島根県教育委員会『板屋町遺跡 志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書5』1998。  
松木岩雄『出雲・隠岐地域』『弥生土器の様式と偏年』山陰・山陽編』1992 木耳社。  
橋本久和ほか『概説 中世の土器・陶磁器』1995 真陽社。  
『九州陶磁の偏年－九州近世陶磁学会10周年記念－』2000 九州近世陶磁学会。



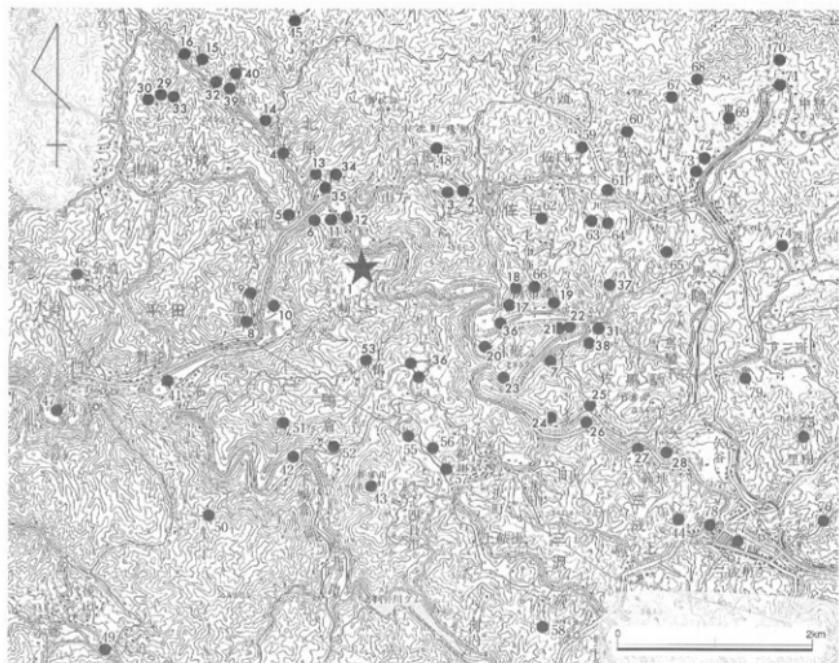
積ヶ堺遺跡調査班

# 挿図・表編





第1図 掘載遺跡の位置

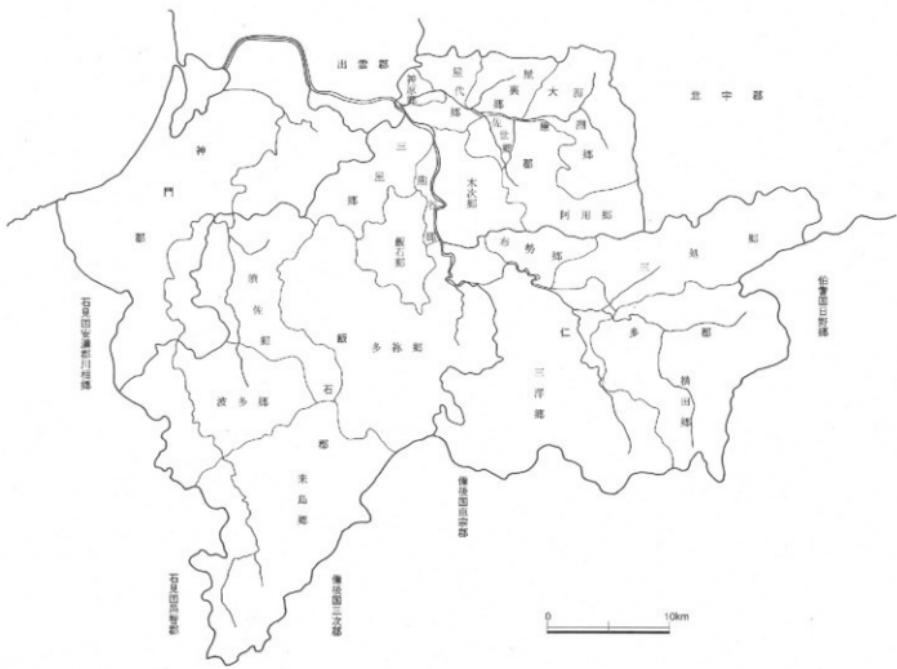


第2図 掘載遺跡の位置と周辺の遺跡 S = 1 / 50,000

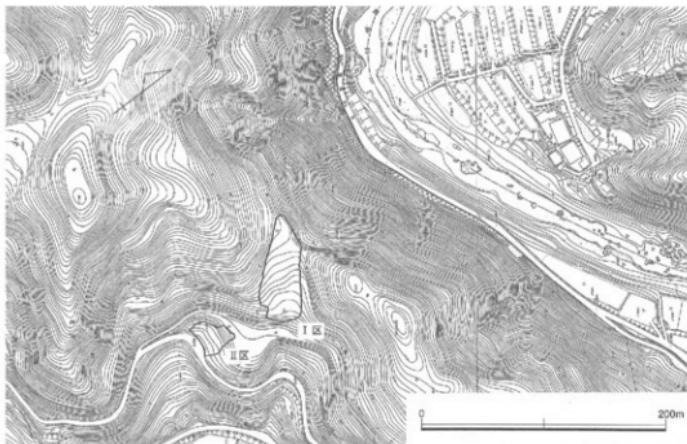
第1表 尾原ダム建設予定地周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	種別	番号	遺跡名	種別
1	楨ヶ井遺跡	製鉄遺跡	41	平田遺跡	散布地・製鉄遺跡
2	尾白Ⅰ遺跡	散布地	42	下鴨倉遺跡	散布地
3	尾白Ⅱ遺跡	炭窯跡	43	三沢城跡(鴨倉城跡)	城館跡
4	垣ノ内遺跡	集落跡	44	丸子山古墳群	古墳
5	川平Ⅰ遺跡	住居跡・散布地	45	下布施澗の上鉢跡	製鉄遺跡
6	家の後Ⅰ遺跡	散布地	46	金剛遺跡	散布地
7	家の脇Ⅱ遺跡	散布地	47	平田鉢原鉢跡	製鉄遺跡
8	石壺遺跡	散布地	48	尾白横穴群	横穴
9	上垣内たたら跡	製鉄遺跡	49	上山城跡	城館跡
10	家の上遺跡	祭祀遺跡・製鉄遺跡	50	戈の原遺跡	散布地
11	家の後Ⅱ遺跡	散布地	51	松木山城跡	城館跡
12	北原本郷遺跡	散布地	52	光善寺古墳	古墳
13	下布施氏館跡	城館跡	53	芝原遺跡	製鉄遺跡
14	案久寺遺跡	城館跡	54	穴觀古墳群	古墳
15	茶屋の廻遺跡	製鉄遺跡	55	比久尼原横穴群	横穴
16	枯木ヶ谷鉢跡	製鉄遺跡	56	どけや古墳	古墳
17	西尾社遺跡	城館跡	57	布広城跡	城館跡
18	巖ヶ迫横穴墓群	横穴	58	八頭塚横穴群	横穴
19	円満寺跡	寺院跡	59	佐白・原鉢跡	製鉄遺跡
20	前田遺跡	散布地	60	金子松鉢跡	製鉄遺跡
21	林原遺跡	散布地	61	中山遺跡	散布地
22	林原古墳	古墳	62	佐白城跡	城館跡
23	小廻上遺跡	城館跡	63	上布施横穴群	横穴
24	家の前遺跡	散布地	64	上布施遺跡	散布地
25	寺畠遺跡	散布地	65	すげた横穴群	横穴
26	寺宇根遺跡	散布地	66	水の手城跡	城館跡
27	暮地遺跡	散布地・住居跡	67	三出平古墳	古墳
28	御崎遺跡	散布地	68	穴觀音古墳	古墳
29	北原Ⅰ遺跡	散布地	69	門屋遺跡	散布地
30	家の前鉢跡	製鉄遺跡	70	庄田鉢跡	製鉄遺跡
31	シベ石遺跡	城館跡	71	堂の前古墳	古墳
32	ゴマボリ鉢跡	製鉄遺跡	72	長福寺遺跡	散布地
33	下布施横穴墓群	横穴	73	金原鉢跡	製鉄遺跡
34	宮廻遺跡	散布地	74	下鴨倉大井鉢跡	製鉄遺跡
35	宮ノ脇遺跡	散布地	75	石原城跡	城館跡
36	原田遺跡	集落跡・古墳	76	里田遺跡	散布地
37	亀ヶ谷遺跡	製鉄遺跡	77	郡屋敷古墳	古墳
38	時仏山横穴墓群	横穴	78	三成殿治屋小路遺跡	製鉄遺跡
39	寺田Ⅰ遺跡	製鉄遺跡	79	須坂遺跡	古墳・横穴・建物跡
40	寺田Ⅱ遺跡	製鉄遺跡			

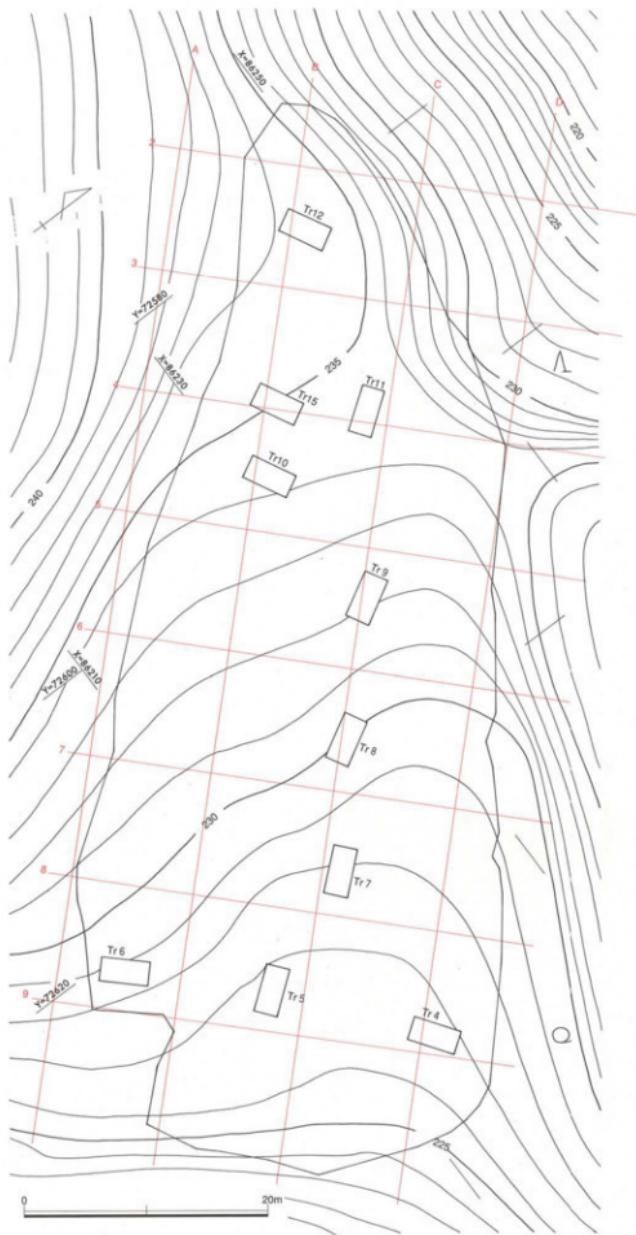
※アミを掛けた遺跡は、尾原ダム建設事業の調査対象遺跡



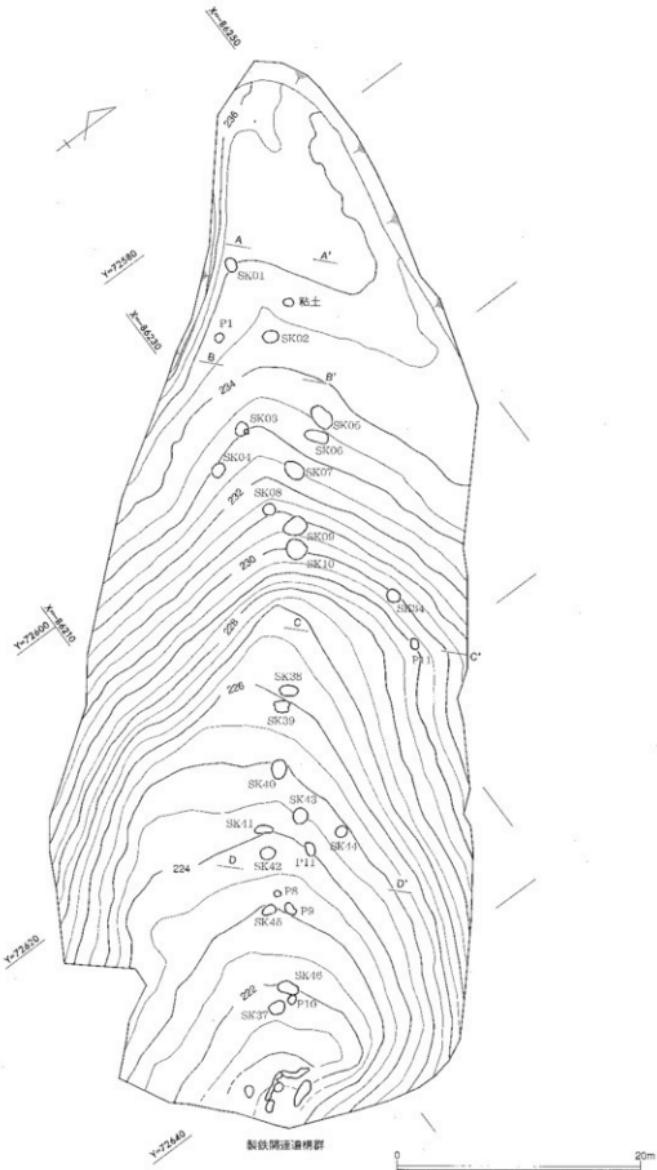
第3図 奈良時代における出雲国南部の郡・郷地図 S = 1 / 400,000



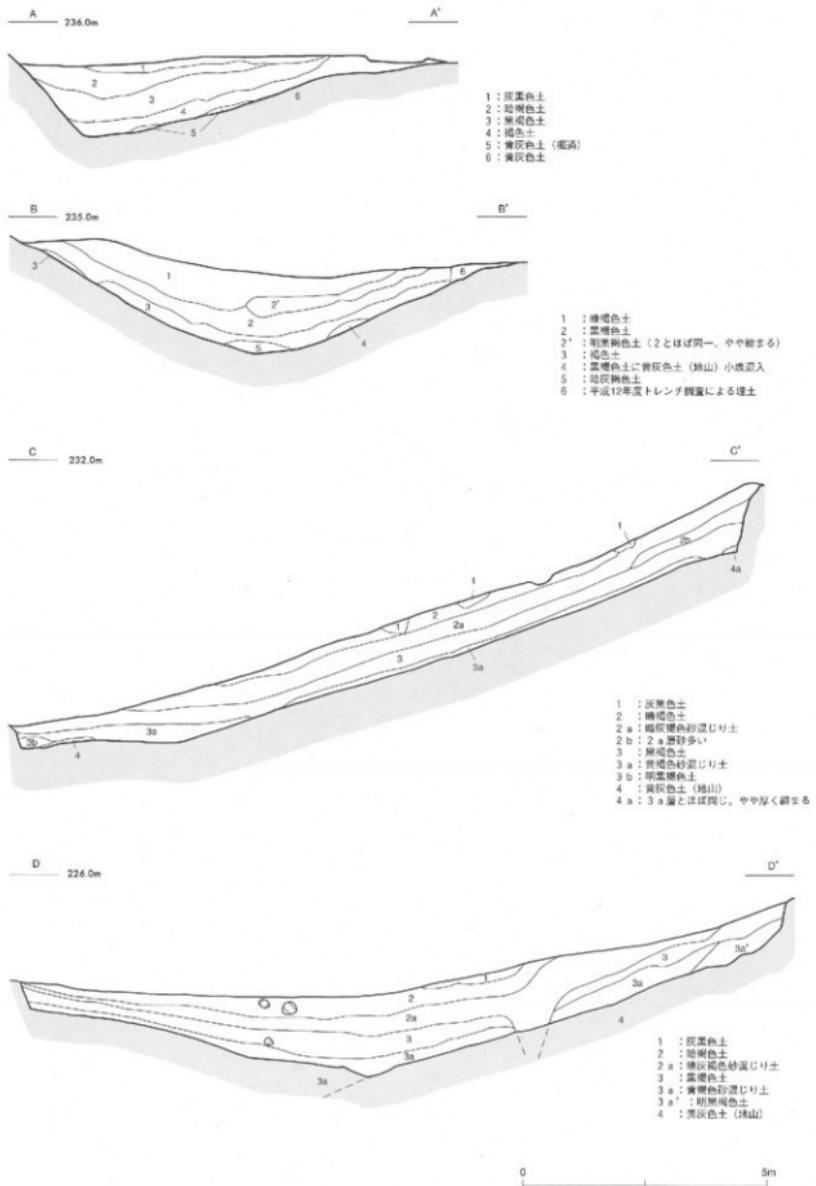
第4図 遺跡周辺地形図・調査区設定図 S = 1 / 4,000



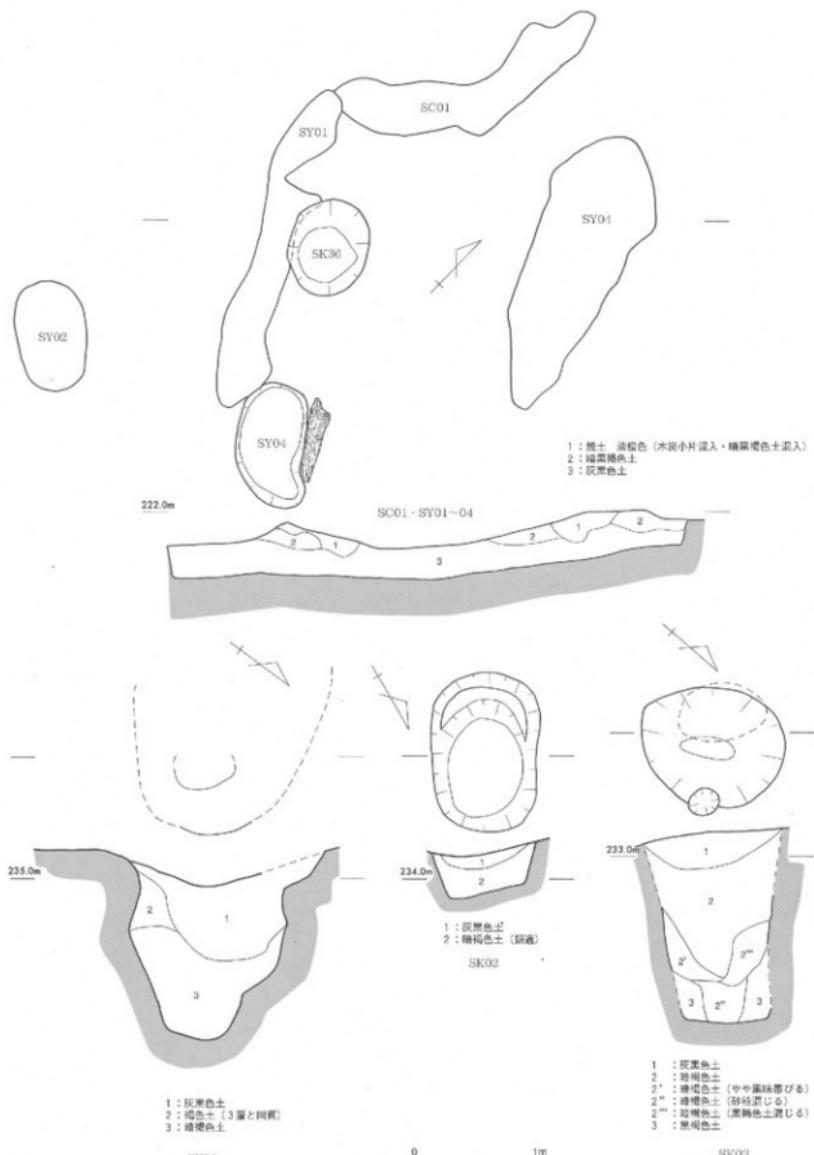
第5図 I区 調査前地形図・グリッド設定図  $S = 1/400$



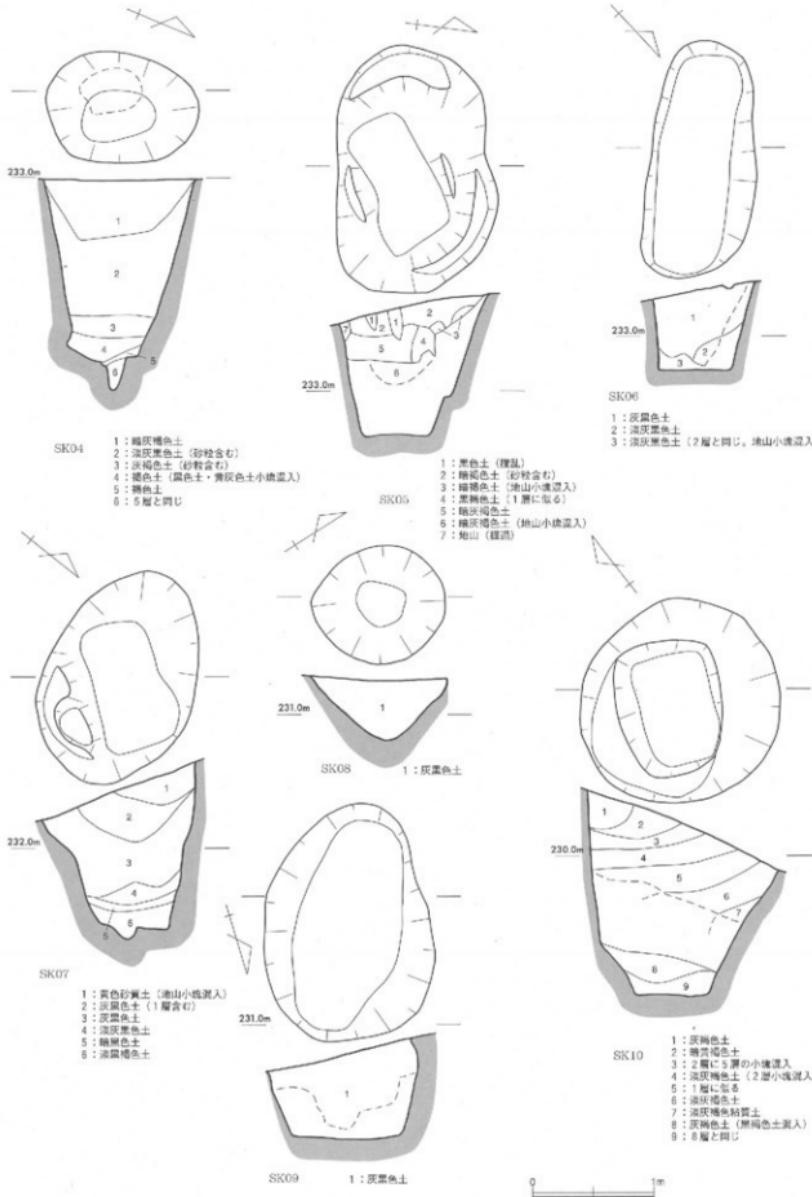
第6図 I区 2層上面平面図  $S = 1/400$



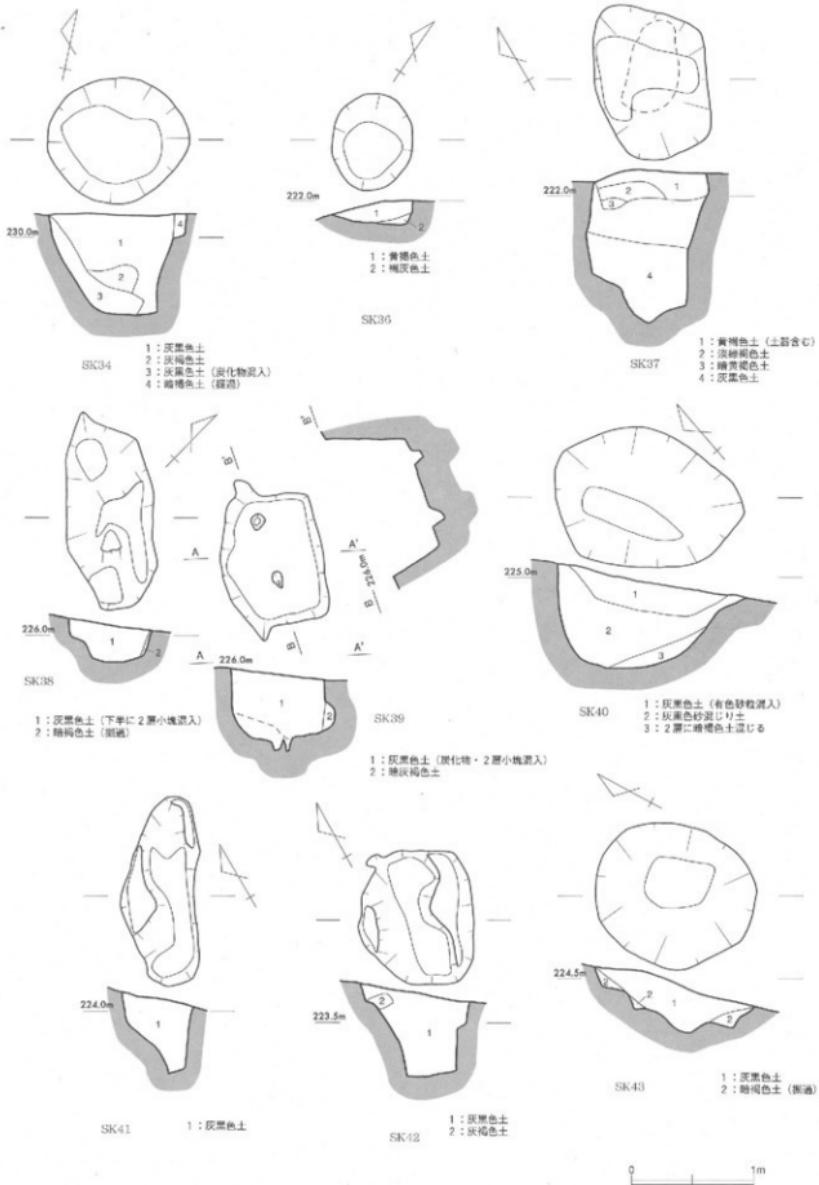
第7図 I区 調査区内土層断面図 S = 1/100



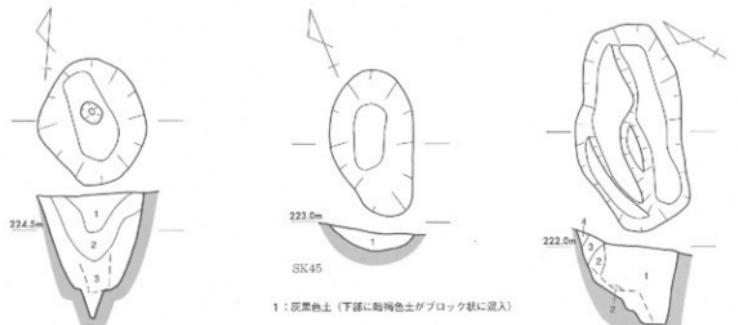
第8図 1区 2層上面遺構図 1 S = 1/40



第9図 I区 2層上面遺構図2 S=1/40

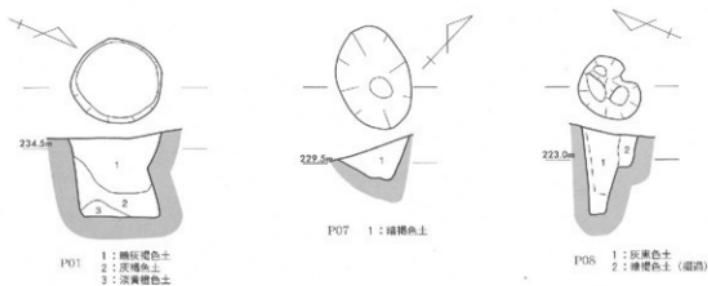


第10図 I区 2層上面遺構図3 S = 1/40



SK44 1:灰黒色土  
2:暗褐色土 (砂粒混じる)  
3:灰褐色土

SK46 1:灰黒色土  
2:灰褐色土  
3:灰褐色土に灰褐色土が混じる  
4:灰褐色土 (粗面)



P01 1:暗灰褐色土  
2:灰褐色土  
3:淡黃褐色土

P08 1:灰黒色土  
2:緑褐色土 (粗面)



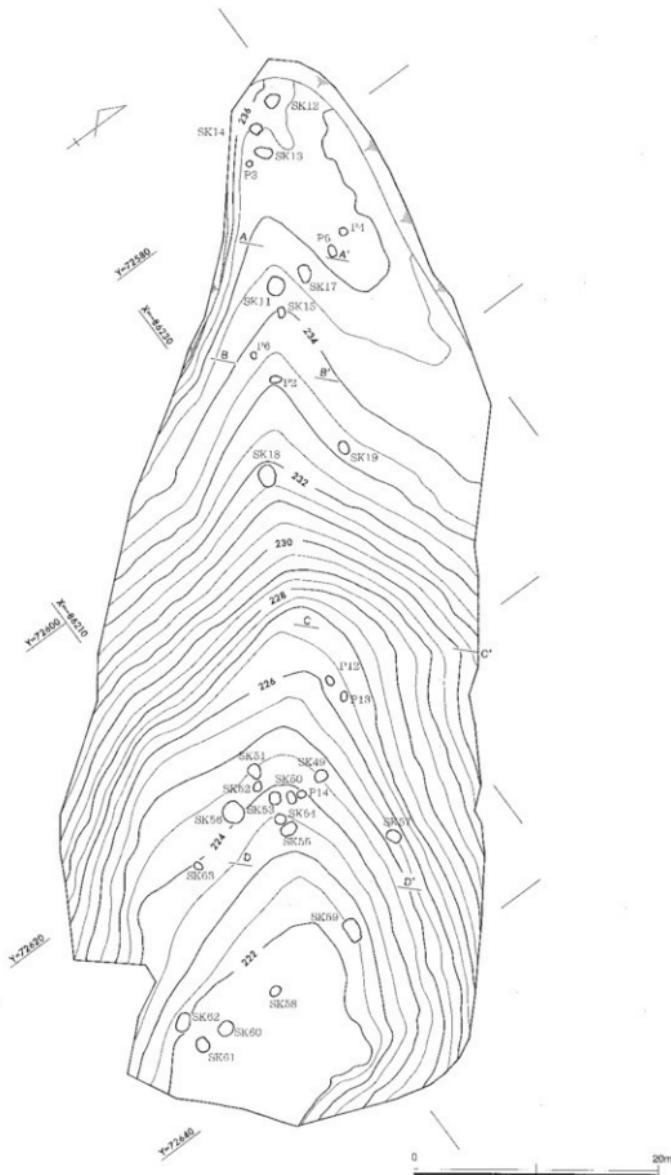
P09 1:灰黒色土  
2:暗褐色土 (粗面)

P10 1:灰黒色土  
2:緑褐色土 (粗面)

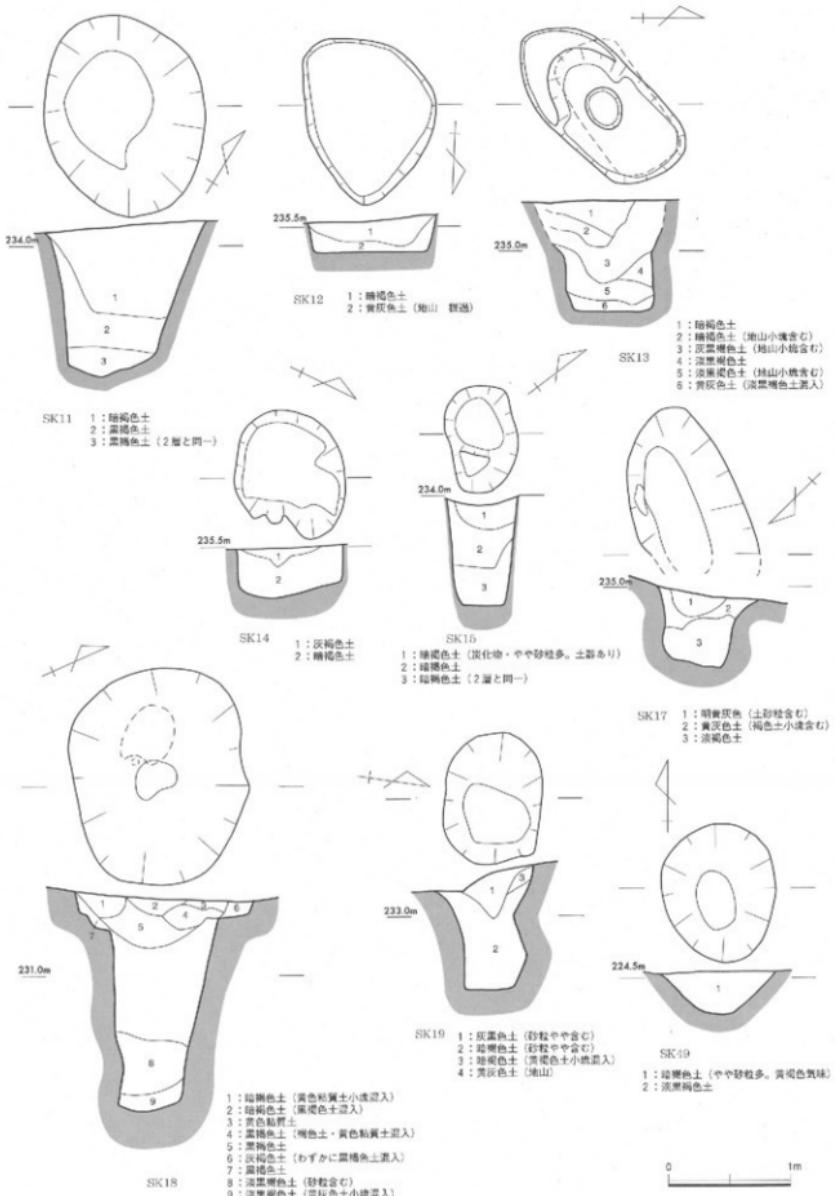
P11 1:暗褐色土

0 1m

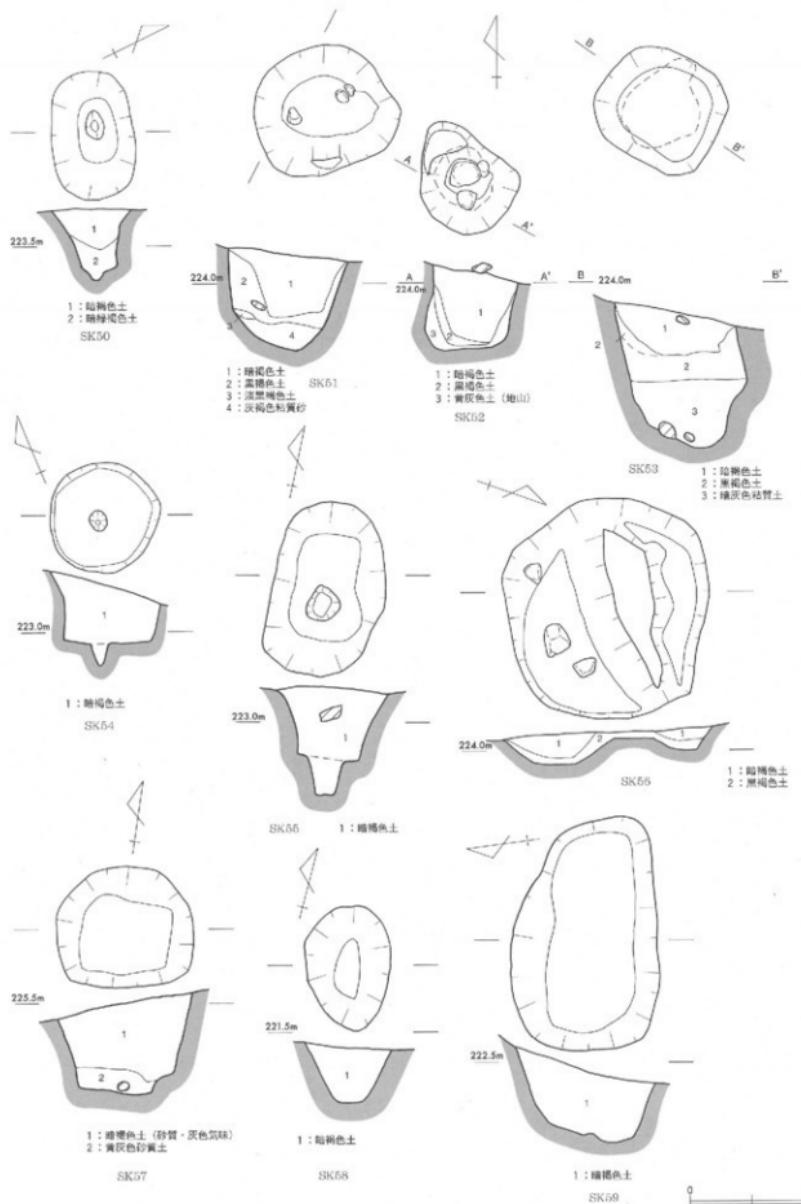
第11図 I区 2層上面遺構図4 S = 1/40



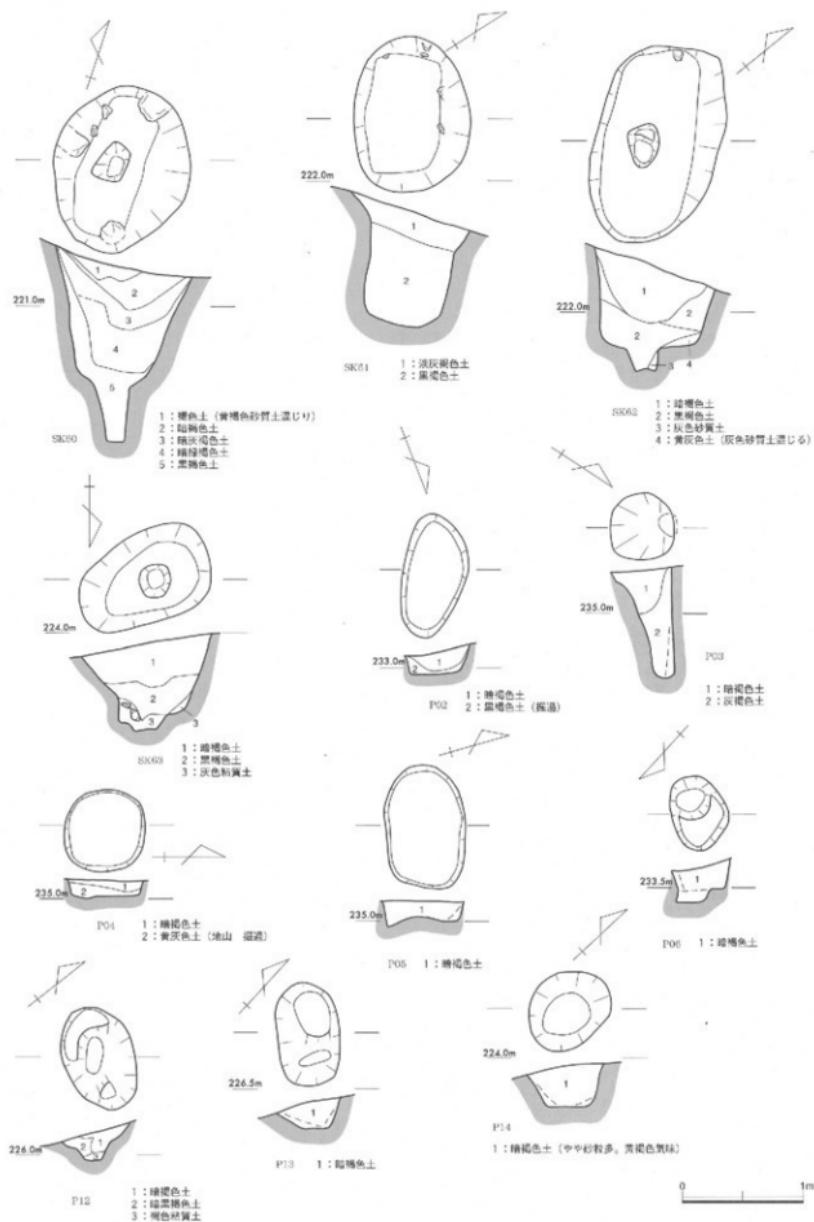
第12図 T区 3層上面平面図  $S = 1/400$



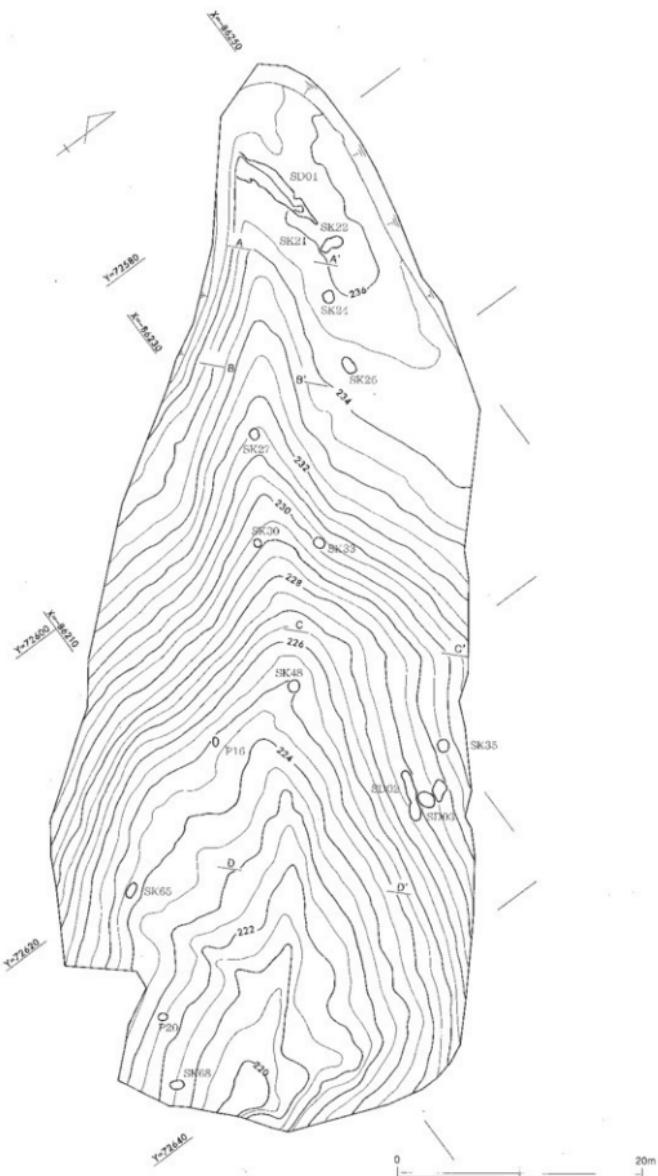
第13図 1区 3層上面遺構図 1 S = 1/40



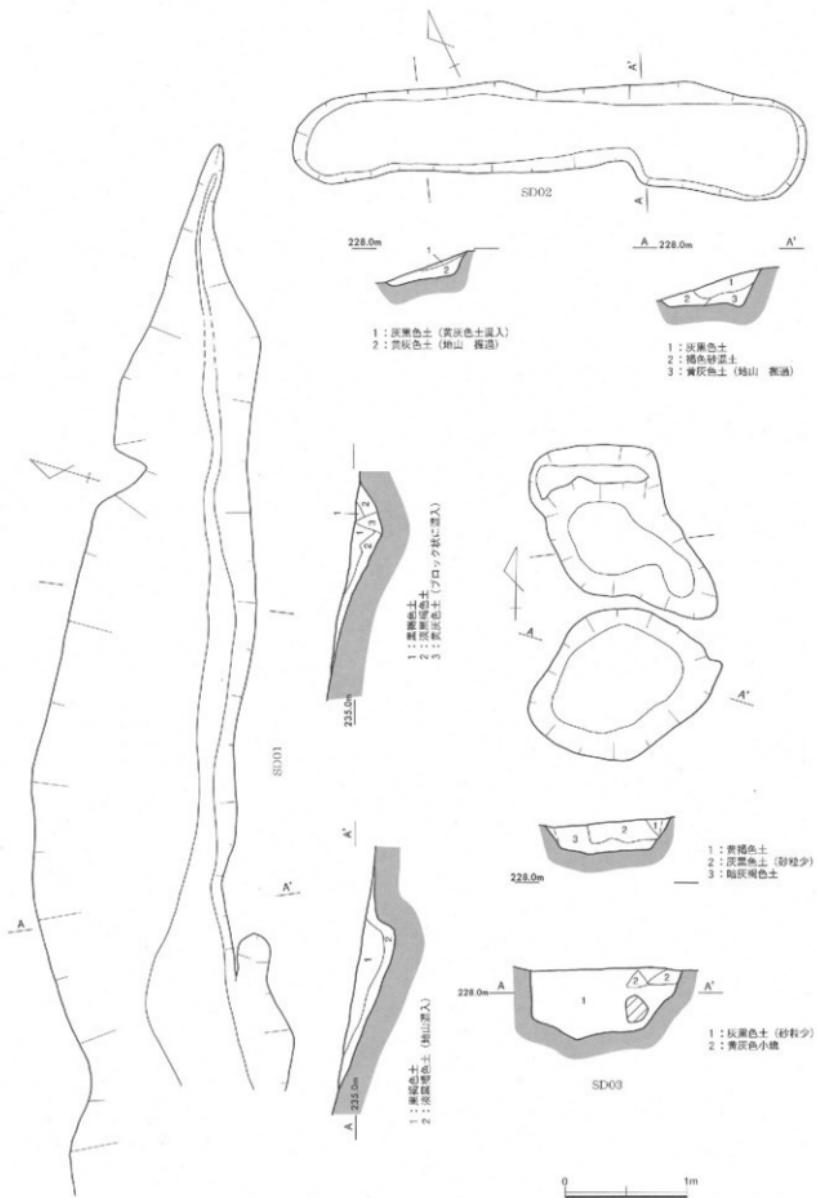
第14図 I区 3層上面遺構図 2 S = 1/40



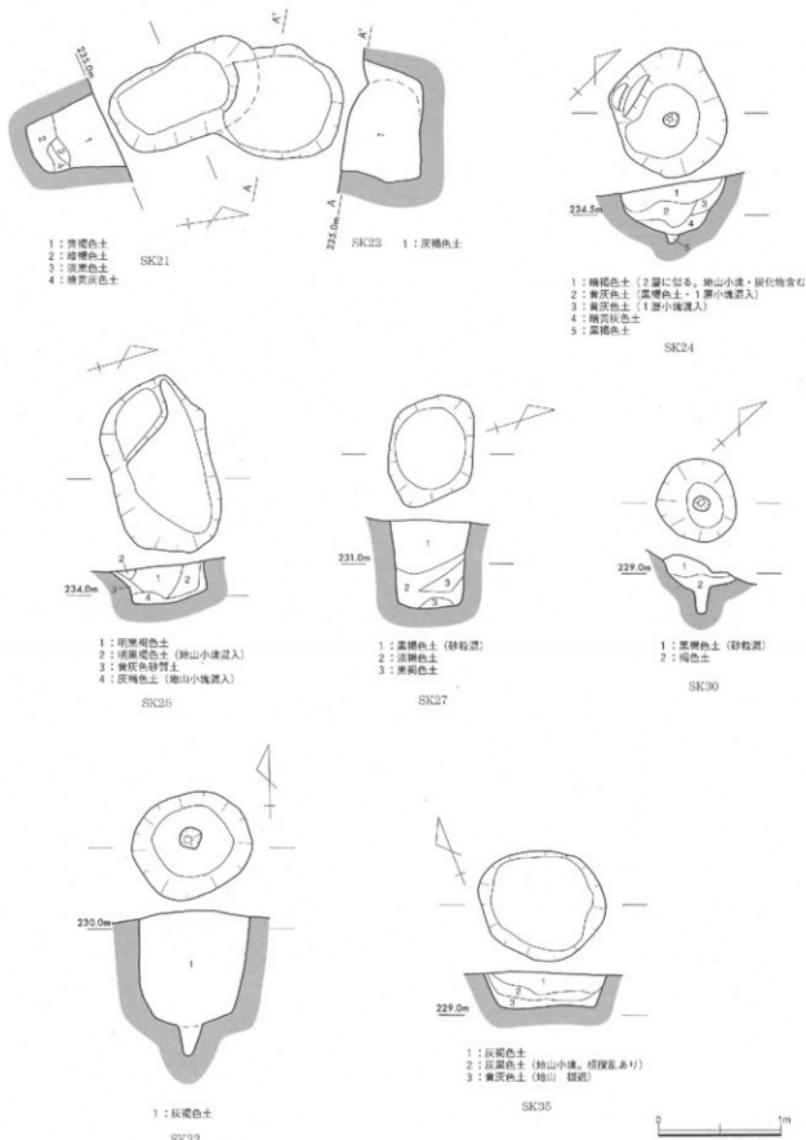
第15図 I区 3層上面遺構図 3 S = 1/40



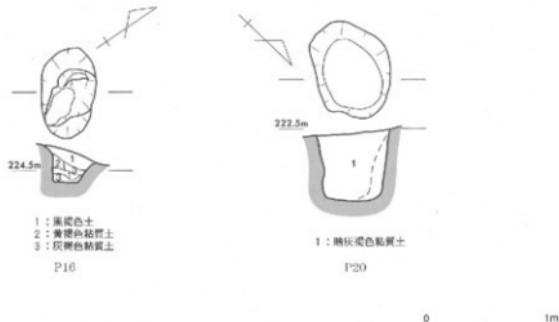
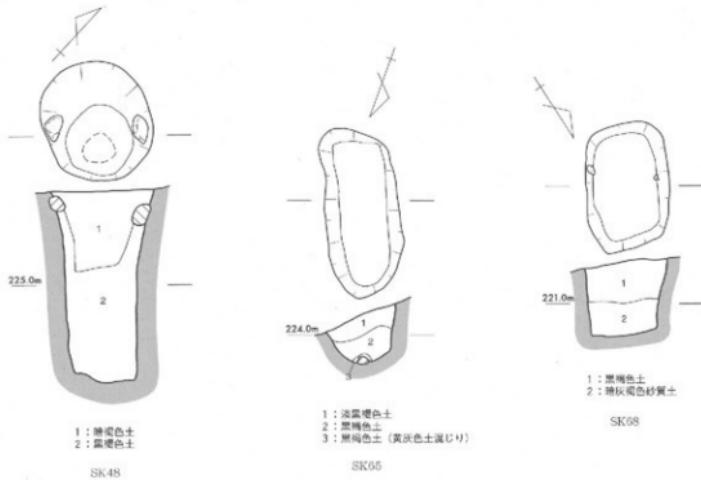
第16図 I区 4層上面平面図  $S = 1/400$



第17図 I区 4層上面遺構図1 S = 1/40



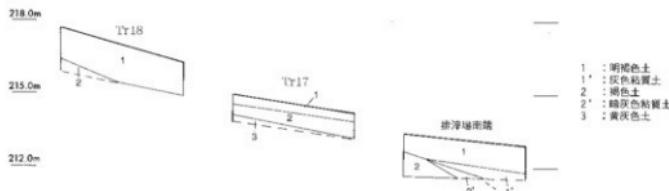
第18図 I区 4層上面遺構図 2 S=1/40



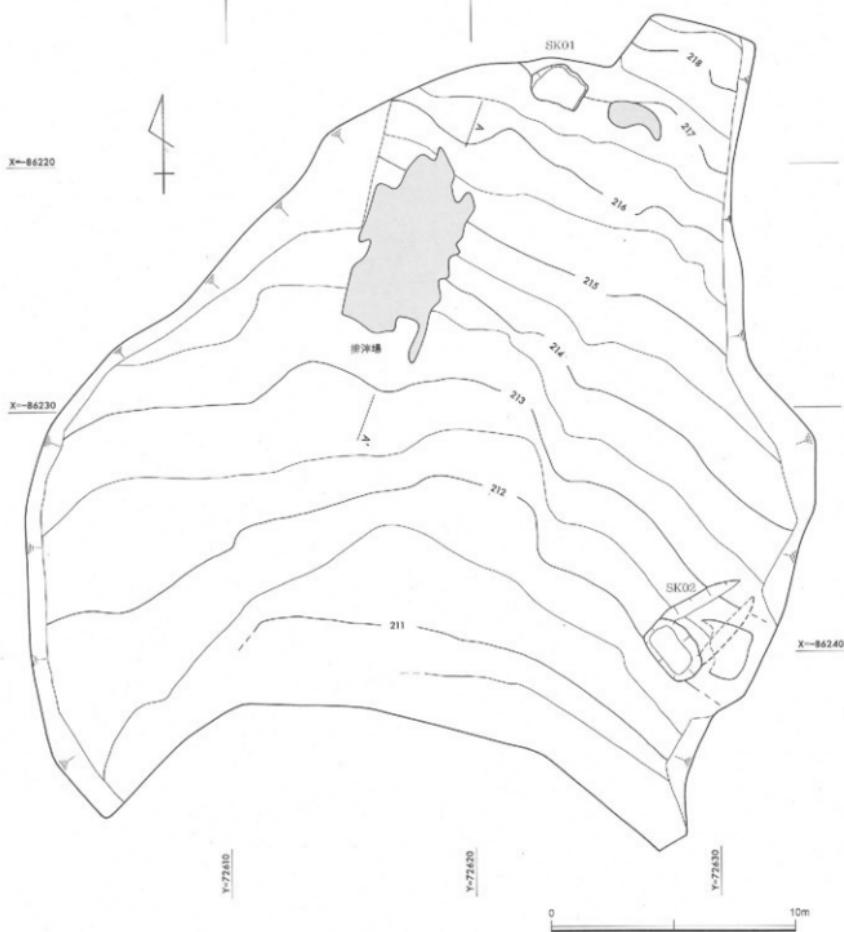
第19図 I区 4層上面遺構図 3 S = 1/40



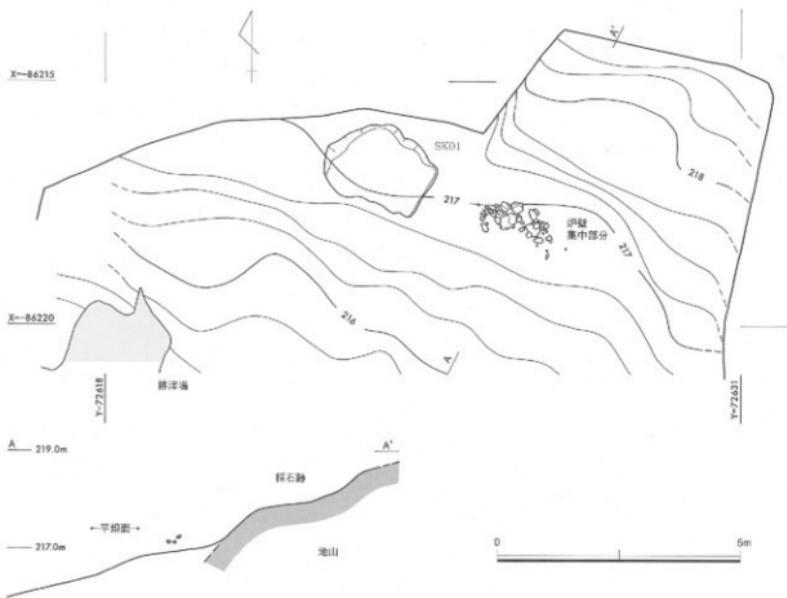
第20図 II区 調査前地形図・トレンチ設定図  $S = 1/400$



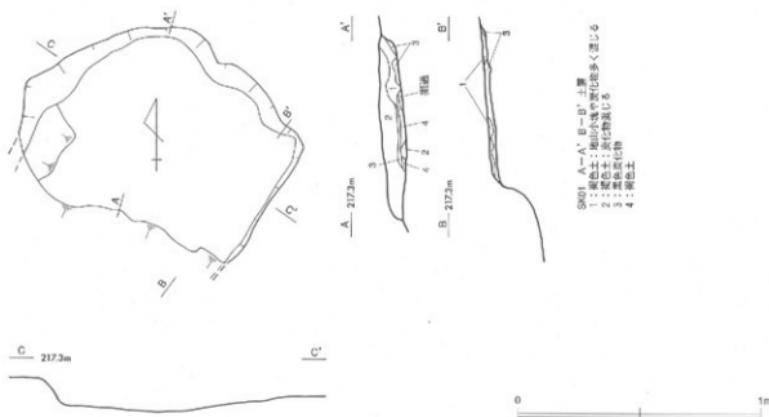
第21図 II区 調査区内土層断面模式図



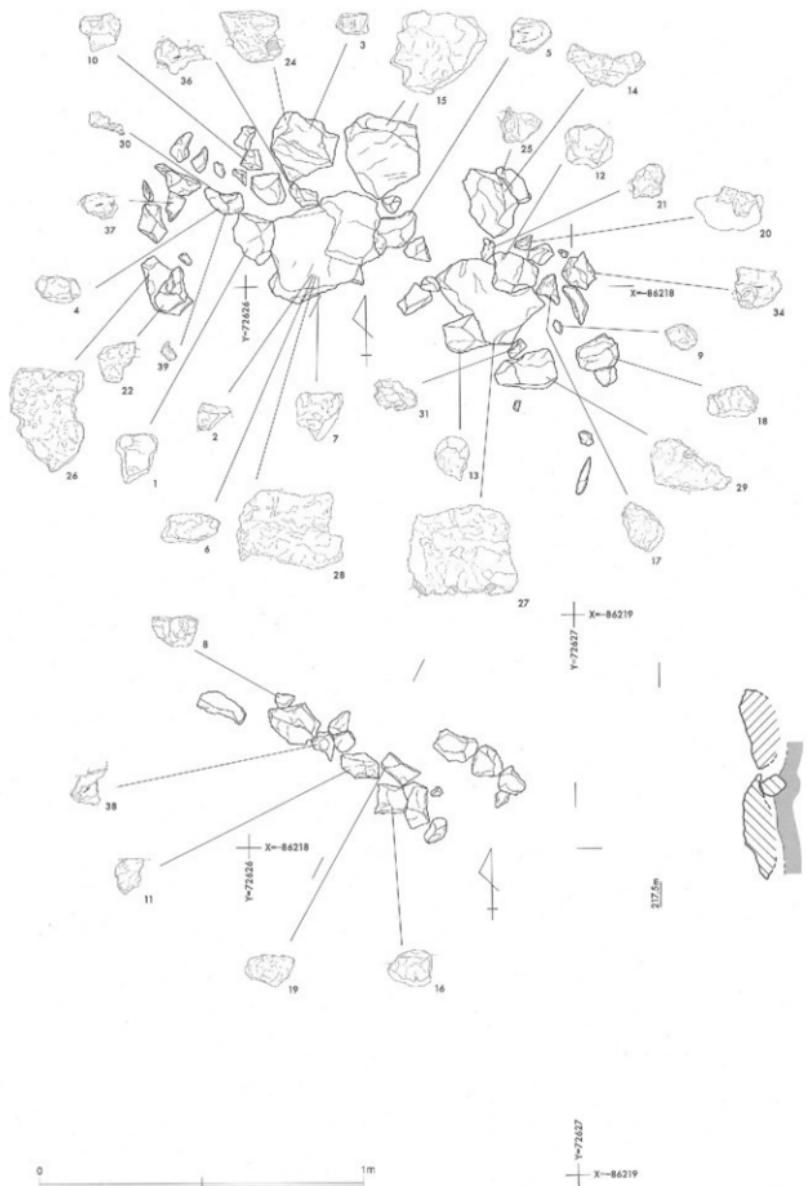
第22図 II区 調査区全体図（排溝場検出時） S = 1 / 200



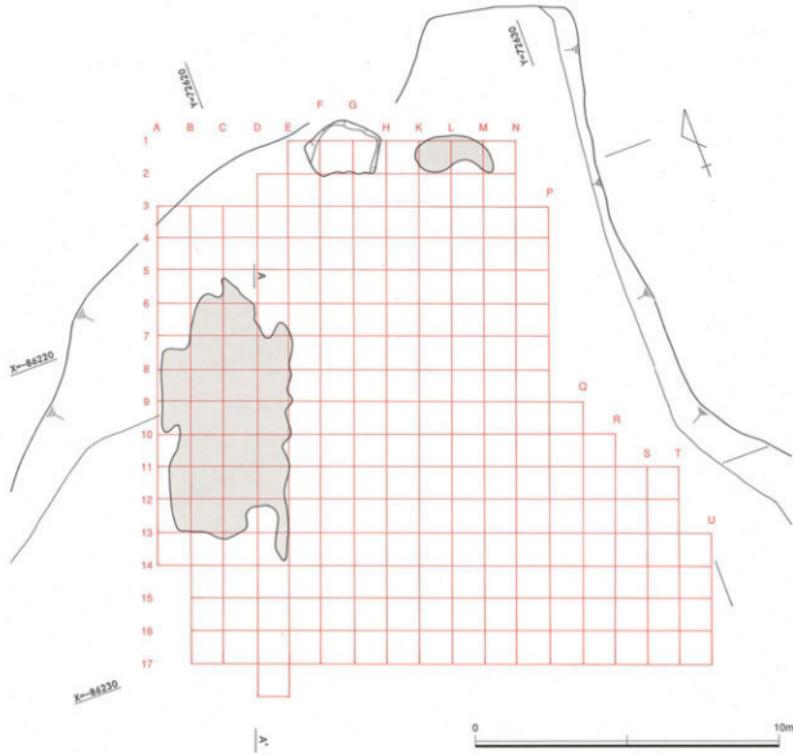
第23図 II区 平坦面平面・断面図  $S = 1/100$



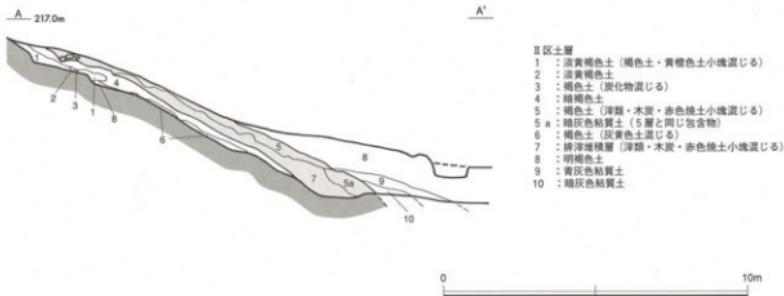
第24図 II区 平坦面上SK01平面・断面図  $S = 1/20$



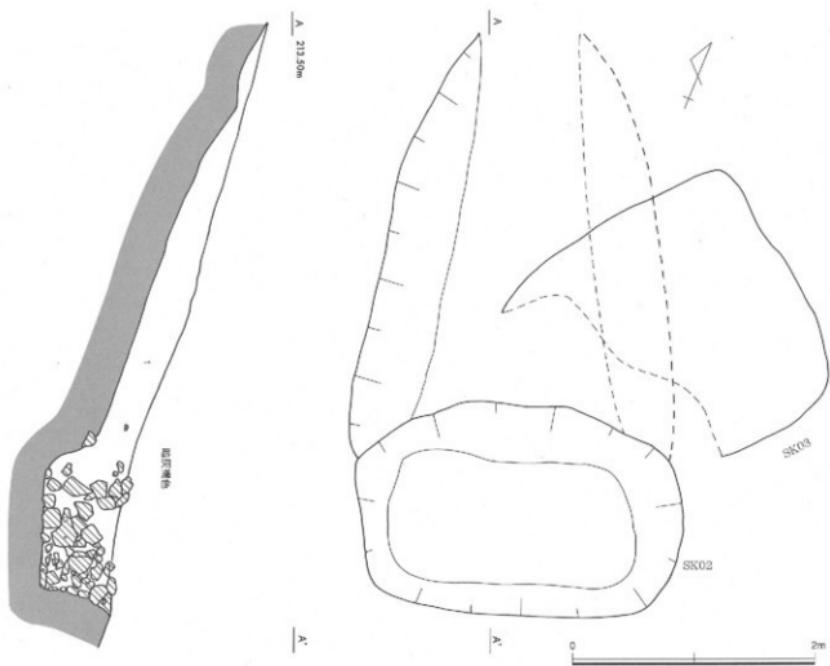
第25図 II区 平坦面上炉壁群平面図 S = 1 / 15



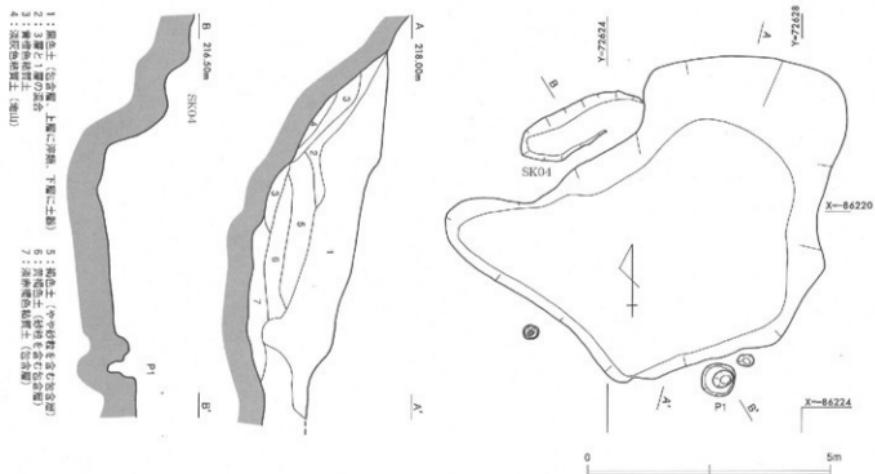
第26図 II区 排溝場平面図・グリッド設定図  $S = 1/150$



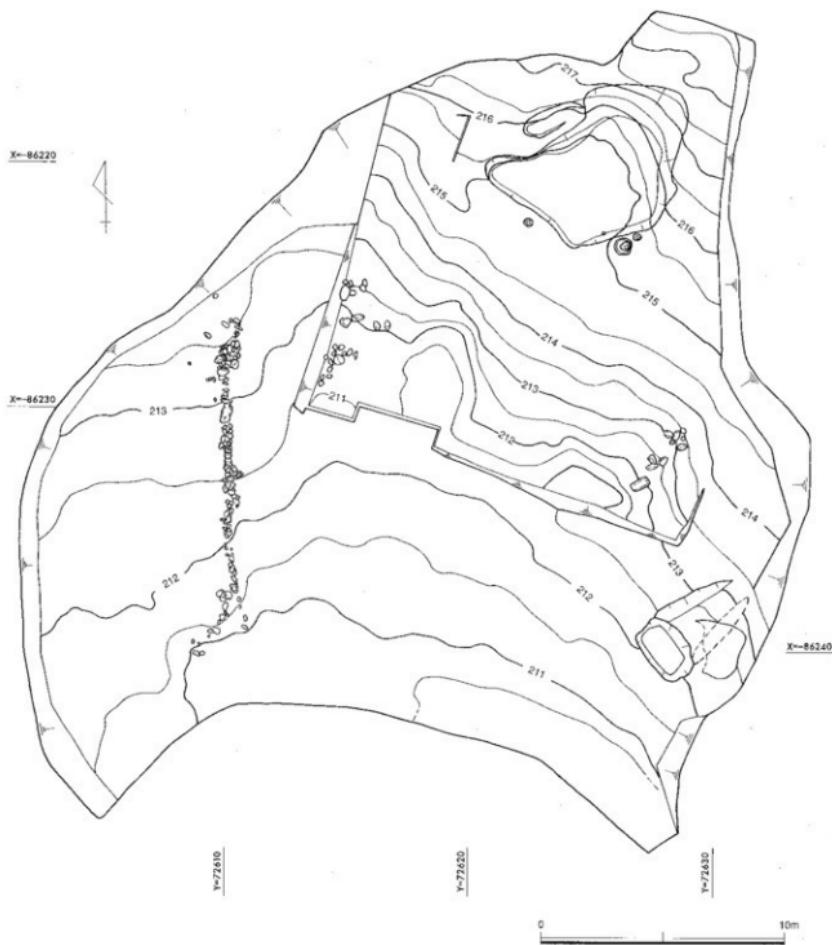
第27図 II区 排溝場土層断面図  $S = 1/150$



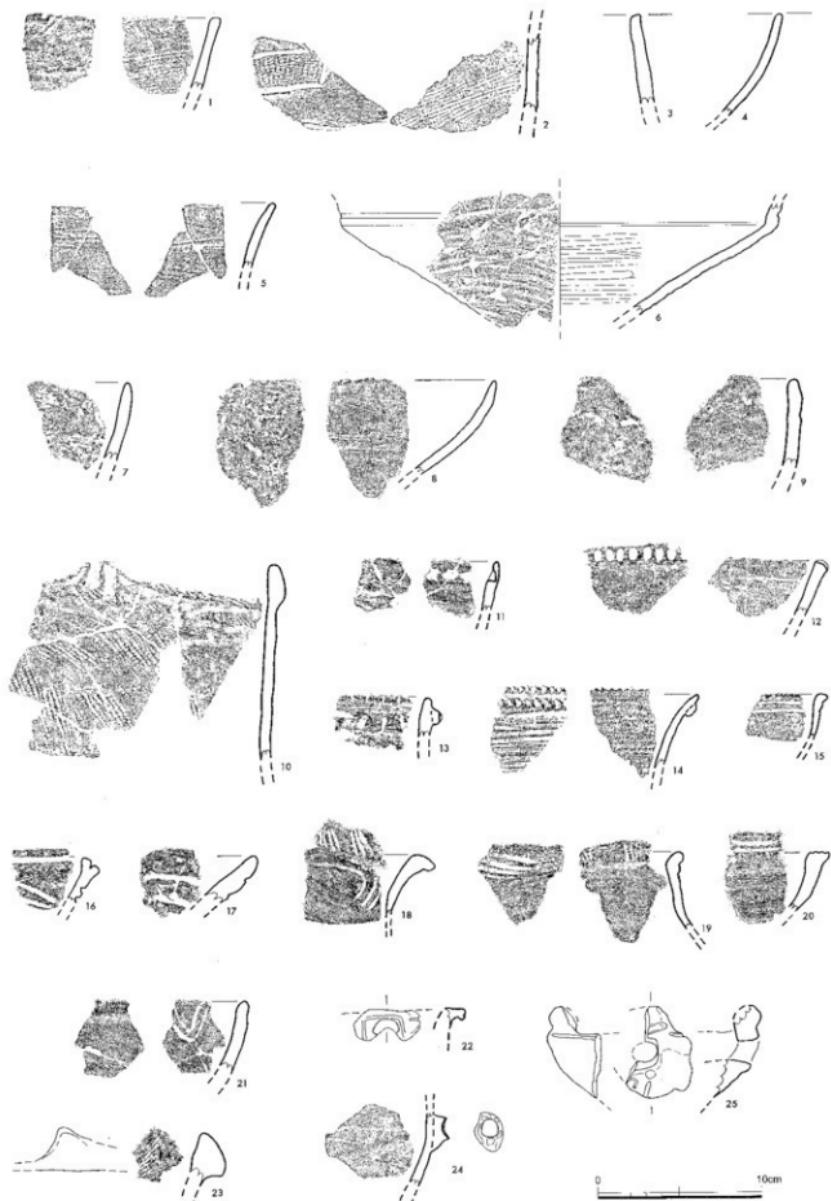
第28図 III区 SK02・03 (麻蒸し土坑) 平面・断面図 S = 1 / 40



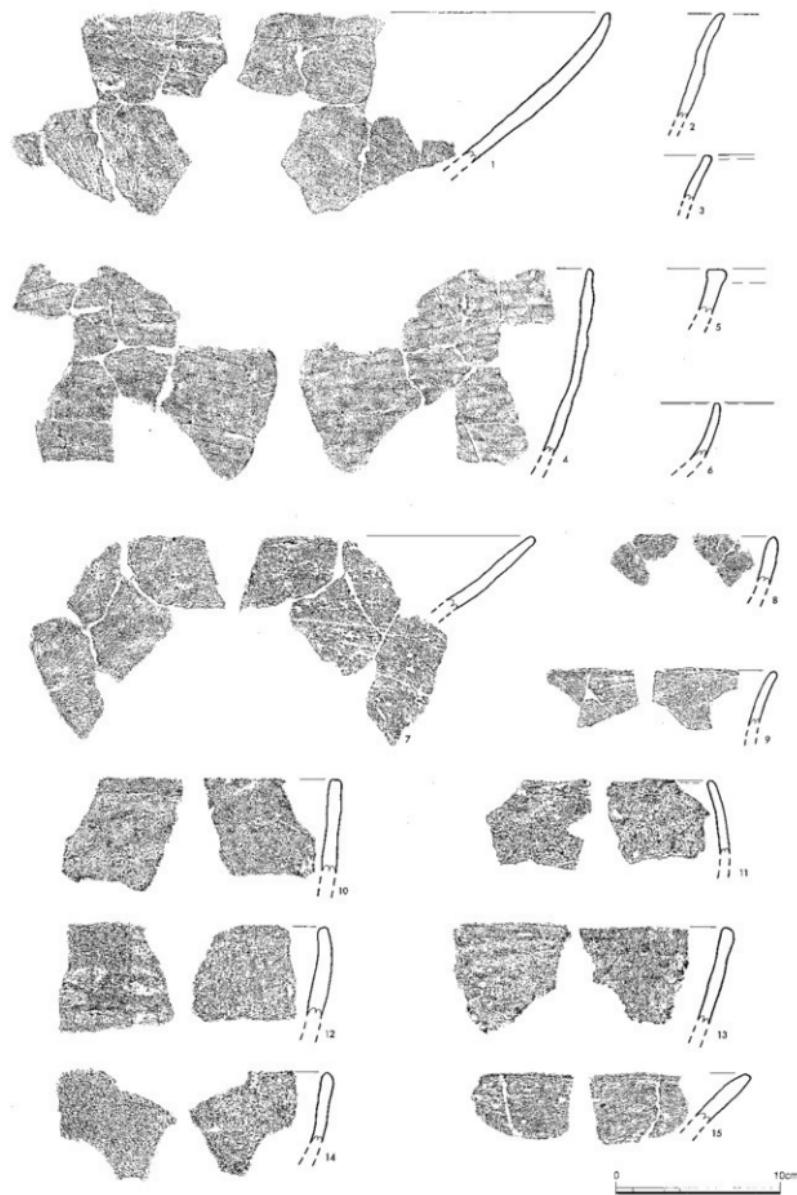
第29図 II区 加工段平面・断面図 S = 1 / 100



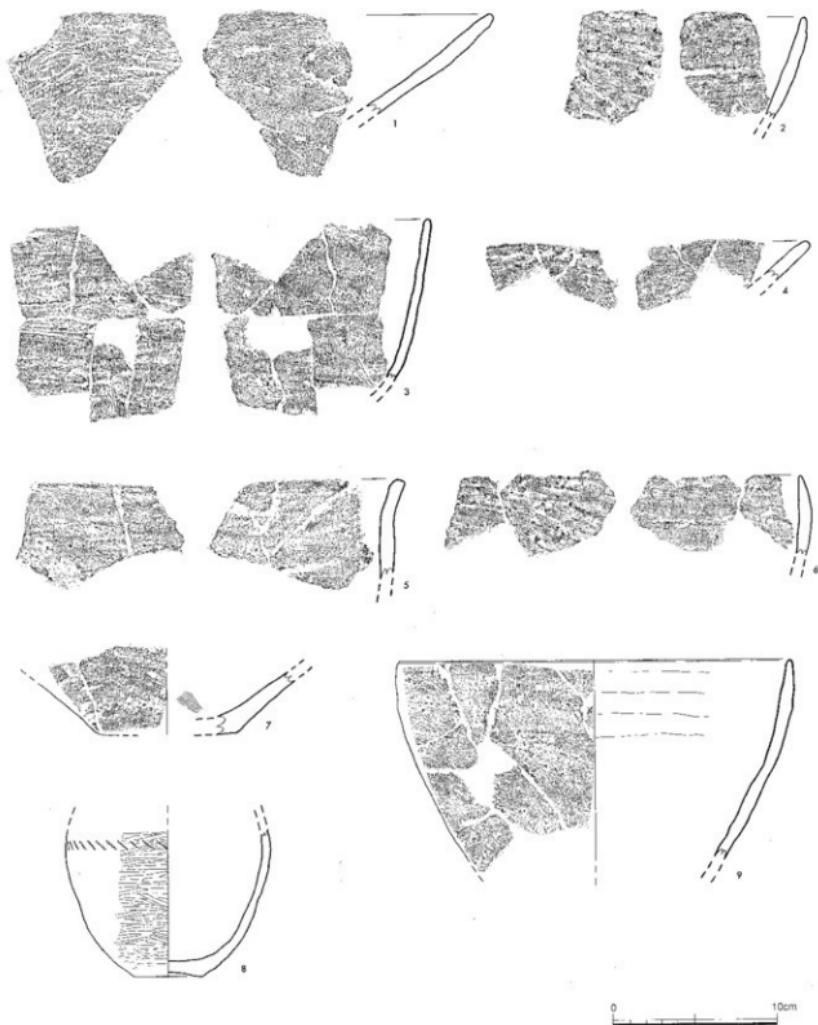
第30図 II区 調査後地形図 S = 1 / 200



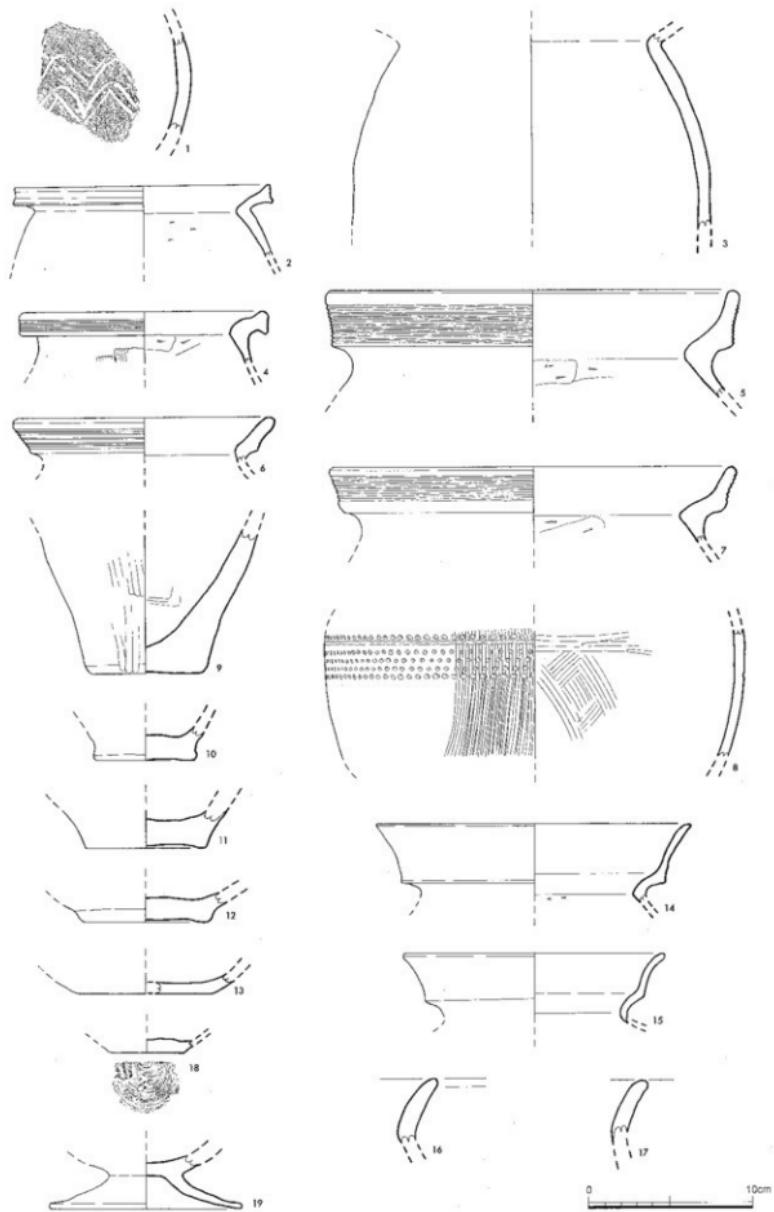
第31図 I区 出土土器実測図1 S = 1 / 3



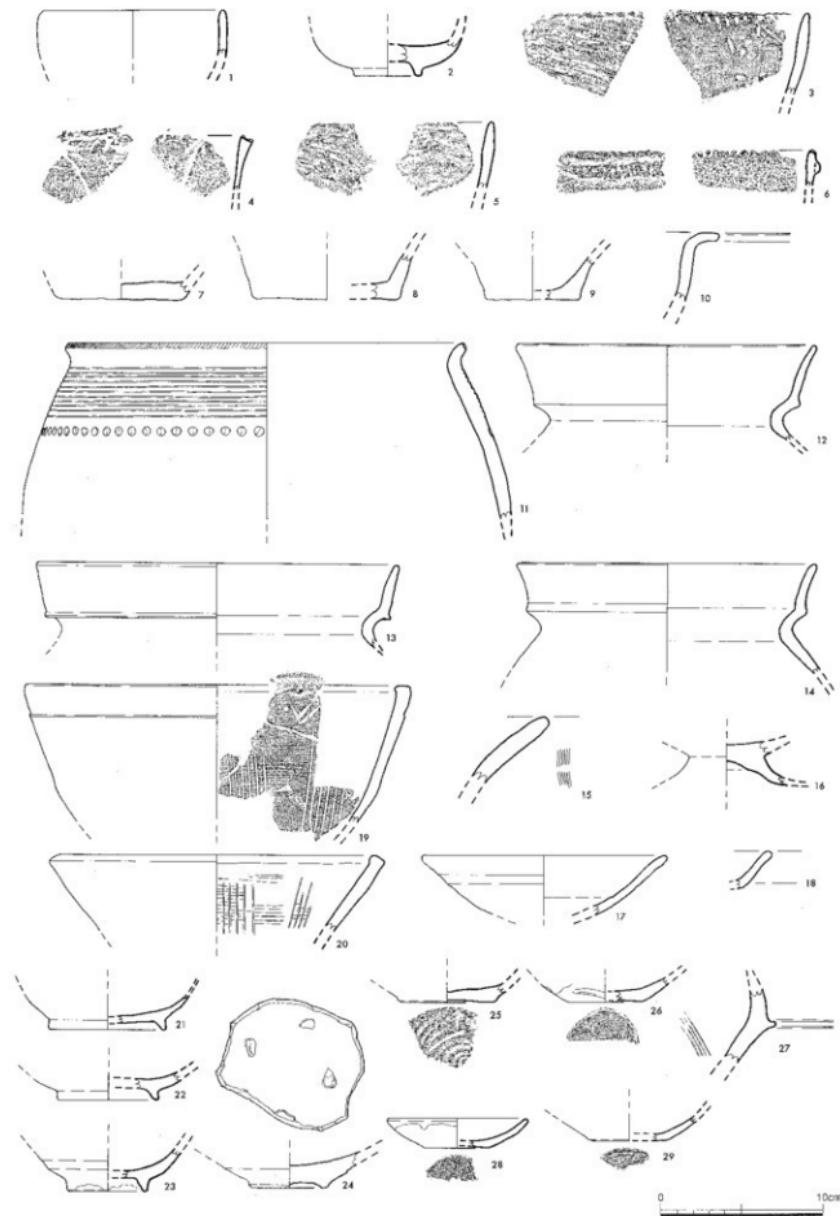
第32図 1区 出土土器実測図 2 S = 1 / 3



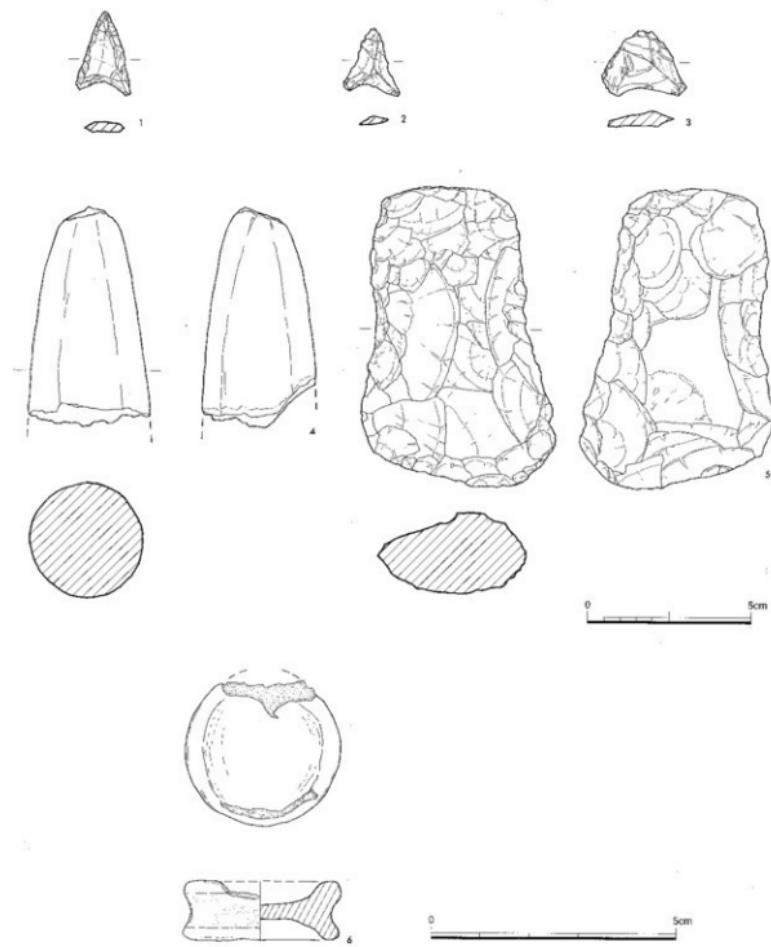
第33図 I区 出土土器実測図 3 S = 1 / 3



第34図 I区 出土土器実測図4 S = 1 / 3



第35図 II区 出土土器・陶磁器実測図 S = 1 / 3



第36図 I・II区 出土石器・土製耳飾実測図  $S = 2/3 \cdot 1/1$

第2表 横ヶ塙遺跡I区 出土器類観察表

発掘番号	団体番号	出土場所	出土層位	種類	基盤	残存率 (%)	法量(cm)	測定・技法	色調・質感	型式	備考
32-1		SX08		縄文土器	深鉢?		鉢高 4.5	外面: 内面:	外面: 淡褐色 内面: 淡褐色 焼成: 良好		P. No. 331
32-2		SK40		縄文土器	深鉢?		鉢高 4.9	外面: 縄文・凹線 - ナデ 内面: 朱痕	外面: 淡赤褐色 内面: 淡赤褐色 焼成: 良好		P. No. 616
32-3		SK40		縄文土器			鉢高 5.5	外面: ナデ 内面: ナデ	外面: 淡褐色 内面: 乳白色 焼成: 良好		P. No. 614
32-4		SK46		縄文土器	鉢?		鉢高 6.2	外面: ナデ 内面: ナデ	外面: 淡赤褐色 内面: 淡赤褐色 焼成: 良好		P. No. 622
32-5		SK46		縄文土器	深鉢		鉢高 4.1	外面: 内面:	外面: 淡赤褐色 内面: 淡赤褐色 焼成: 良好		P. No. 491
32-6	B2	0.3	縄文土器	浅鉢			鉢高 7.0	外面: 内面: 1万キ	外面: 淡褐色 内面: 淡褐色 焼成: 良好		P. No. 33 外面に黒斑あり
32-7	C7		縄文土器	深鉢?			鉢高 4.7	外面: 内面: ナデ	外面: 淡褐色 内面: 淡褐色 焼成: 良好		P. No. 476
32-8	C8		縄文土器				鉢高 5.8	外面: 内面:	外面: 淡赤褐色 内面: 淡赤褐色 焼成: 良好		P. No. 539
32-9	B8		縄文土器				鉢高 5.4	外面: 内面:	外面: 淡褐色 内面: 淡褐色 焼成: 良好		P. No. 437 外面にスス付着
32-10	B8		縄文土器				鉢高 12.0	外面: ナデ - 縄文 内面: ナデ	外面: 淡褐色 内面: 淡褐色 焼成: 良好		P. No. 422, 436, 446, 451 外面に久又付着
32-11	C8		縄文土器				鉢高 3.0	外面: 内面: 孔列	外面: 淡赤褐色 内面: 淡赤褐色 焼成: 良好		P. No. 458
32-12	B8		縄文土器	鉢?			鉢高 3.3	外面: 内面:	外面: 淡赤褐色 内面: 淡赤褐色 焼成: 良好		P. No. 430
32-13	C9		縄文土器				鉢高 2.6	外面: 刻文 - 刻文裏部 内面: ナデ	外面: 乳褐色 内面: 乳褐色 焼成: 良好		P. No. 615
32-14	B8		縄文土器				鉢高 4.6	外面: 朱痕 - 刻文裏部 内面: 鮎目 - 朱痕	外面: 乳褐色 内面: 乳褐色 焼成: 良好		P. No. 425
32-15	B8		縄文土器				鉢高 2.9	外面: 内面: ナデ	外面: 淡褐色 内面: 淡褐色 焼成: 良好		P. No. 427
32-16	C8		縄文土器				鉢高 2.7	外面: ナデ - 凹線 内面: ナデ	外面: 乳褐色 内面: 乳褐色 焼成: 良好		P. No. 606
32-17	C9		縄文土器				鉢高 2.9	外面: ナデ - 凹線 内面: ナデ	外面: 乳白色 内面: 乳白色 焼成: 良好		
32-18	B8		縄文土器				鉢高 3.9	外面: 内面:	外面: 淡赤褐色 内面: 淡赤褐色 焼成: 良好		P. No. 430
32-19	B8		縄文土器				鉢高 4.9	外面: 内面:	外面: 乳褐色 内面: 乳褐色 焼成: 良好		P. No. 429
32-20	C9		縄文土器				鉢高 3.6	外面: 内面:	外面: 淡褐色 内面: 淡褐色 焼成: 良好		P. No. 571, 574, 645
32-21	B8		縄文土器				鉢高 4.5	外面: 小字 内面: ナデ - 陰線	外面: 乳褐色 内面: 乳褐色 焼成: 良好		P. No. 443
32-22	D9		縄文土器				鉢高 1.9	外面: 内面:	外面: 乳褐色 内面: 乳褐色 焼成: 良好		
32-23	D9		縄文土器				鉢高 2.4	外面: 内面:	外面: 乳褐色 内面: 乳褐色 焼成: 良好		
32-24	C9		縄文土器				鉢高 4.5	外面: 内面:	外面: 淡赤褐色 内面: 淡赤褐色 焼成: 良好		P. No. 577

番号	測定番号	出土地点	出土層位	種類	計量	残存率(%)	寸法(cm)	調査・技術	色調・焼成	型式	備考
32-25		B7		縄文土器			器高 5.6	外面：内面：	外面：乳白色 内面：乳白色 焼成：良好		P.No.584
33-1		B7・C8		縄文土器	浅鉢		器高 7.4	外面：内面：	外面：淡赤褐色 内面：淡赤褐色 焼成：良好		P.No.511, 525, 536, 557, 558, 647
33-2		C7	0.1	縄文土器	鉢		器高 6.4	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：淡褐色 内面：乳褐色 焼成：良好		P.No.559
33-3		C9		縄文土器			器高 9.8	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：赤褐色 内面：淡褐色 焼成：良好		P.No.582
33-4		B7・B8・C8		縄文土器	深鉢		器高 11.5	外面：内面：	外面：淡赤褐色 内面：暗褐色 焼成：良好		P.No.470, 484, 495, 508
33-5		C9		縄文土器			器高 2.8	外面：内面：	外面：褐色 内面：淡褐色 焼成：良好		P.No.579
33-6		B8	0.1				器高 3.5	外面：内面：	外面：乳褐色 内面：乳褐色 焼成：良好		P.No.428
33-7		C8	0.1	縄文土器	浅鉢		器高 4.5	外面：内面：	外面：淡赤褐色 内面：淡赤褐色 焼成：良好		P.No.529
33-8		B8		縄文土器			器高 2.0	外面：内面：	外面：乳褐色 内面：乳褐色 焼成：良好		P.No.425
33-9		C8	0.1	縄文土器	鉢		器高 3.4	外面：内面：	外面：淡赤褐色 内面：淡赤褐色 焼成：良好		P.No.462
33-10		C5		縄文土器	深鉢?		器高 5.8	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：淡褐色 内面：淡褐色 焼成：良好		P.No.412
33-11		B8		縄文土器			器高 4.7	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：淡褐色 内面：淡褐色 焼成：良好		P.No.419
33-12		B8		縄文土器			器高 5.7	外面：内面：	外面：淡褐色 内面：暗褐色 焼成：良好		P.No.630
33-13		C5		縄文土器	深鉢?		器高 5.9	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：淡褐色 内面：淡褐色 焼成：良好		P.No.413
33-14		B8		縄文土器			器高 4.3	外面：内面：	外面：暗褐色 内面：黄褐色 焼成：良好		P.No.563
33-15		C8		縄文土器			器高 3.0	外面：内面：	外面：褐色 内面：褐色 焼成：良好		P.No.531, 536
34-1		C8	0.1	縄文土器	浅鉢		器高 6.1	外面：内面：	外面：淡赤褐色 内面：淡赤褐色 焼成：良好		P.No.529
34-2		C8		縄文土器			器高 6.2	外面：内面：	外面：淡赤褐色 内面：淡赤褐色 焼成：良好		P.No.525
34-3		B8・C8		縄文土器	深鉢		器高 10.0	外面：内面：	外面：淡褐色 内面：淡褐色 焼成：良好		P.No.467, 481
34-4		C8		縄文土器			器高 2.4	外面：内面：	外面：褐色 内面：褐色 焼成：良好		P.No.530
34-5		C8	0.1	縄文土器			器高 0.2	外面：内面：	外面：淡赤褐色 内面：淡褐色 焼成：良好		P.No.506, 518, 531
34-6		C8		縄文土器			器高 4.9	外面：内面：ナデ	外面：淡赤褐色 内面：淡赤褐色 焼成：良好		P.No.543, 531
34-7		C8	0.1	縄文土器	鉢	30	底厚 6.6 器高 3.8	外面：内面：	外面：淡赤褐色 内面：淡赤褐色 焼成：良好		P.No.529
34-8		A3・B3		縄文土器	盆or淺	30	網附底 12.6 器高 9.0	外面：ナデ-ミガキ-押引 内面：ナデ	外面：淡赤褐色 内面：淡赤褐色 焼成：良好		P.No.100, 127, 129, 141

辨識番号 器名	出土地点	出土層位	地 點	形 態	残存率 (%)	径量(cm)	調整・技法	色調・焼成	型式	備考
35-9	B8	0.2	縄文土器	鉢	20	口径 器高	23.9 12.3	外面: 内面:	外面: 淡褐色 内面: 乳白色 焼成: 良好	
35-1	B8		弥生土器	器or壺		器高	6.4	外面: 内面:	外面: 淡褐色 内面: 乳褐色 焼成: 良好	P.No.624
35-2	C9		弥生土器	壺	10	口径 器高	15.6 4.4	外面: 内面:	外面: 淡褐色 内面: 乳褐色 焼成: 良好	P.No.642
35-3	C9	0.1	弥生土器	壺	30	口径 器高	16.0 12.0	外面: 内面:	外面: 淡褐色 内面: 乳褐色 焼成: 良好	P.No.578, 632 外面にスジ付
35-4	B9	0.1	弥生土器	壺	30	口径 器高	14.4 2.8	外面: 内面:	外面: 淡褐色 内面: 乳褐色 焼成: 良好	
35-5	A3	0.1	弥生土器	壺	50	口径 器高	24.5 6.6	外面: 内面:	外面: 淡褐色 内面: 乳褐色 焼成: 良好	P.No.32
35-6	C9	0.1	弥生土器	壺	20	口径 器高	15.4 2.8	外面: 内面:	外面: 淡褐色 内面: 乳褐色 焼成: 良好	P.No.644
35-7	B8		弥生土器	壺		口径 器高	24.4 4.7	外面: 内面:	外面: 淡褐色 内面: 乳褐色 焼成: 良好	P.No.117
35-8	C9	0.1	弥生土器	壺	10	口径 器高	25.6 7.9	外面: 内面:	外面: 淡褐色 内面: 乳褐色 焼成: 良好	P.No.634
35-9	C9	0.1	弥生土器	器or壺	90	底径 器高	6.8 8.8	外面: 内面:	外面: 淡褐色 内面: 乳褐色 焼成: 良好	P.No.633
35-10	C8	0.1	弥生土器	器or壺	90	底径 器高	6.9 2.1	外面: 内面:	外面: 淡褐色 内面: 乳褐色 焼成: 良好	P.No.537
35-11	B8	0.1	弥生土器	器or壺	60	底径 器高	7.2 2.4	外面: 内面:	外面: 淡褐色 内面: 乳褐色 焼成: 良好	P.No.439
35-12	C7	0.1	弥生土器	壺	90	底径 器高	7.5 1.9	外 面:	外面: 淡褐色 内面: 乳褐色 焼成: 良好	P.No.474
35-13	C8	0.1	弥生土器	器or壺	40	底径 器高	8.2 1.3	外 面:	外面: 淡褐色 内面: 乳褐色 焼成: 良好	P.No.565
35-14	C9	0.1	弥生土器	壺	10	口径 器高	19.2 4.8	外 面:	外面: 淡褐色 内面: 乳褐色 焼成: 良好	P.No.643
35-15	C9	0.1	弥生土器	壺	90	口径 器高	13.9 4.3	外 面:	外面: 淡褐色 内面: 乳褐色 焼成: 良好	P.No.572, 573
35-16	C9	0.1	土師器	壺		器高	3.9	外 面:	外面: 淡褐色 内面: 乳褐色 焼成: 良好	P.No.595
35-17	B8・C8	1.壺	壺			器高	4.0	外 面:	外面: 淡褐色 内面: 乳褐色 焼成: 良好	P.No.481, 515
35-18	C9	0.1	土師器	壺	70	底径 器高	4.8 0.9	外 面:	外面: 淡褐色 内面: 乳褐色 焼成: 良好	P.No.609
35-19	B9		土師器	低脚壺	25	底径 器高	11.6 3.3	外 面:	外面: 乳白色 内面: 乳白色 焼成: 良好	P.No.541

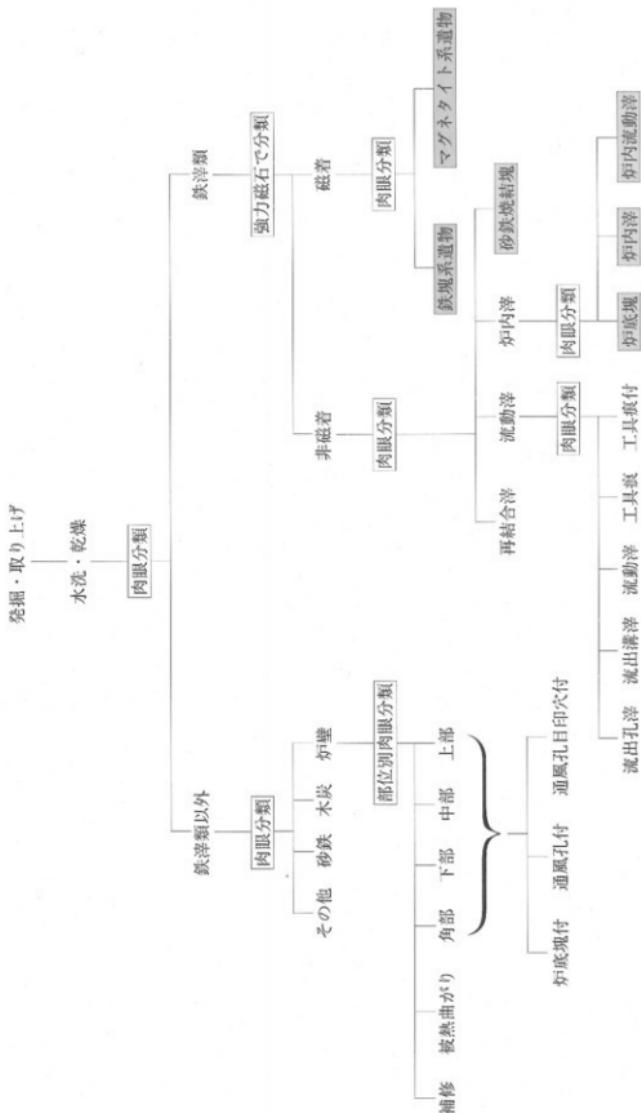
第3表 横ヶ崎遺跡II区 出土土器類観察表

前回番号	試験番号	出土地点	出土層位	種類	基種	保存率 (%)	法長(cm)	調査・技法	色調・焼成	要記	備考
36-1	SK02	01	陶器 (有土名)				口径 形高	11.0 3.0	外面：施釉 内面：施釉	外面：緑・乳白色 内面：緑・乳白色 焼成：良好	P.No.103
36-2	SK02	01	陶器		直径 高さ	4.2 2.4			外面：施釉 内面：施釉	外面：灰褐色 内面：灰褐色 焼成：良好	P.No.103
36-3		03	縄文土器	鉢?	器高	5.0	外面：ナデ・刻目		外面：淡茶褐色 内面：淡褐色 焼成：良好	P.No.289	
36-4			縄文土器		器高	3.3	外面：ナデ・刻目		外面：淡褐色 内面：淡茶褐色 焼成：良好	P.No.296	
36-5		03	縄文土器		器高	4.1	外面： 内面：		外面：乳褐色 内面：乳褐色 焼成：良好	P.No.727	
36-6			縄文土器		器高	2.2	外面：ナデ・刻目・突唇式		外面：赤褐色 内面：淡褐色 焼成：良好		
36-7		03	縄文土器	直径 高さ	7.4 1.1		外面：ナデ 内面：ナデ		外面：淡茶褐色 内面：淡茶褐色 焼成：良好	P.No.450	
36-8		03	縄文土器		直径 高さ	8.4 2.8	外面： 内面：		外面：淡褐色 内面：淡茶褐色 焼成：良好	P.No.849	
36-9		03	弥生土器	甕或壺	直徑 高さ	5.6 2.6	外面：摩滅のため不明 内面：ナデ		外面：淡茶褐色 内面：淡茶褐色 焼成：良好	P.No.634	
36-10			弥生土器		器高	4.2	外面：ナデ・ミガ穴 内面：ナデ		外面：乳褐色 内面：乳白色 焼成：良好	P.No.883	
36-11		03	弥生土器	甕	直徑 高さ	24.3 10.8	外面：刻目・施縫・孔立式 内面：ナデ		外面：黒褐色 内面：淡褐色 焼成：良好	P.No.872	
36-12			弥生土器	直径 高さ	18.2 5.7		外面：摩滅のため不明 内面：摩滅のため不明		外面：淡褐色 内面：淡褐色 焼成：良好		
36-13		03	弥生土器	甕	口徑 高さ	22.2 5.2	外面：ナデ 内面：ナデ		外面：淡褐色 内面：淡褐色 焼成：良好	P.No.756	
36-14		02	弥生土器	甕	口徑 高さ	18.3 6.7	外面：ナデ 内面：ナデ		外面：淡褐色 内面：淡褐色 焼成：良好	P.No.24	
36-15			弥生土器 或 土器部		器高	4.0	外面： 内面：		外面：褐色 内面：淡茶褐色 焼成：良好	P.No.640	
36-16	9-16T (トレンチ)	1集器	高環				外面：凹輪ナデ 内面：凹輪ナデ		外面：淡褐色 内面：淡褐色 焼成：良好		
36-17		03	土器部	甕 (凸輪)	直徑 高さ	15.0 3.6	外面：凹輪ナデ 内面：凹輪ナデ		外面：淡褐色 内面：淡褐色 焼成：良好	P.No.539, 536, 532	
36-18			陶器		器高	2.4	外面：施釉 内面：施釉		外面：淡褐色 内面：淡褐色 焼成：良好	P.No.440	
36-19		02	土器部	縦縫	口径 形高	23.6 8.4	外面： 内面：		外面：淡茶褐色 内面：淡茶褐色 焼成：良灯	P.No.398, 470, 491, 501	
36-20		02	土器部	縦縫	口径 形高	20.5 4.7	外面： 内面：		外面：淡褐色 内面：淡茶褐色 焼成：良好	P.No.10, 11	
36-21	C10	桙冠直下	土器部	高台付等	直徑 高さ	7.3 2.3	外面：凹輪ナデ 内面：凹輪ナデ		外面：淡褐色 内面：黑色 焼成：良好		
36-22	D8	土器部	高台付等		直徑 高さ	6.3 1.8	外面：凹輪ナデ 内面：凹輪ナデ		外面：淡褐色 内面：黑色 焼成：良好	P.No.898	
36-23		明褐色 土器	(剥削)		直徑 高さ	4.8 2.7	外面：施釉 内面：施釉		外面： 内面： 焼成：良好		
36-24		褐色土器	陶器		直徑 高さ	4.8 2.3	外面：施釉 内面：		外面：淡茶褐色 内面：淡茶褐色 焼成：良好		

測定番号	図版番号	出土地点	出土層位	種類	基準	残存率(%)	長さ(cm)	調整・技法	色調・斑成	形式	備考
36-25		浮置層下	土塗器	环			6.1 1.2	外面：凹輪ナメ 内面：山形ナメ・圓輪系 切り	外面：淡黃褐色 内面：淡黃褐色 斑成：良好		
36-26		05	陶器 (布志名)				4.5 1.5	外面：凹輪ナメ 内面：凹輪ナメ・山形系 切り	外面：棕色 内面：赤褐色 斑成：良好	P.No.54	
36-27		01	(港面)	器体	器高	4.7	外面： 内面：		外面： 内面： 燒皮：良好	P.No.19	
36-28		01-05	陶器 (布志名)		口径 底径 器高	8.7 4.2 1.8	外面：圓輪ナメ 内面：凹輪ナメ・圓輪系 切り		外面：棕色 内面：淡黃褐色 斑成：良好	P.No.120, 33	
36-29		02	上部			5.0 1.5	外曲：凹輪ナメ 内曲：凹輪ナメ・圓輪系 切り		外面：淡黃褐色 内面：淡黃褐色 斑成：良好	P.No.494	

第4表 横ヶ岡遺跡 出土石器類観察表

測定番号	図版番号	出土地点	器種	石材	形状	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
37-1		II区・D7	石鎚			2.6	1.7	3.5	1.32	
37-2		I区・SK10	石鎚	安山岩		2.1	1.7	0.3	0.72	
37-3		I区・B3	石鎚	黒耀石		2.0	2.6	0.5	1.98	
37-4		I区・C7	磨製石斧	綠泥片岩		6.8	3.7	3.5	121.03	
37-5		I区・B9	扁平打製石斧	玄武岩?		9.3	5.9	2.5	160.70	

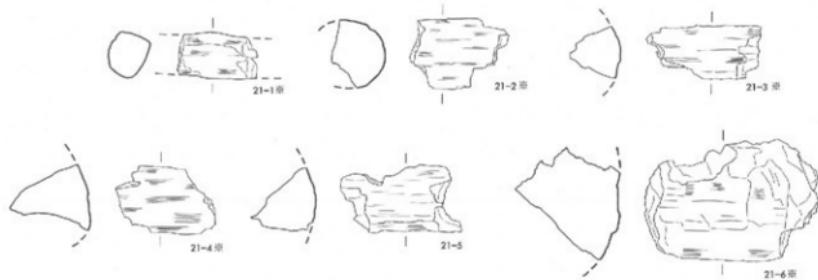
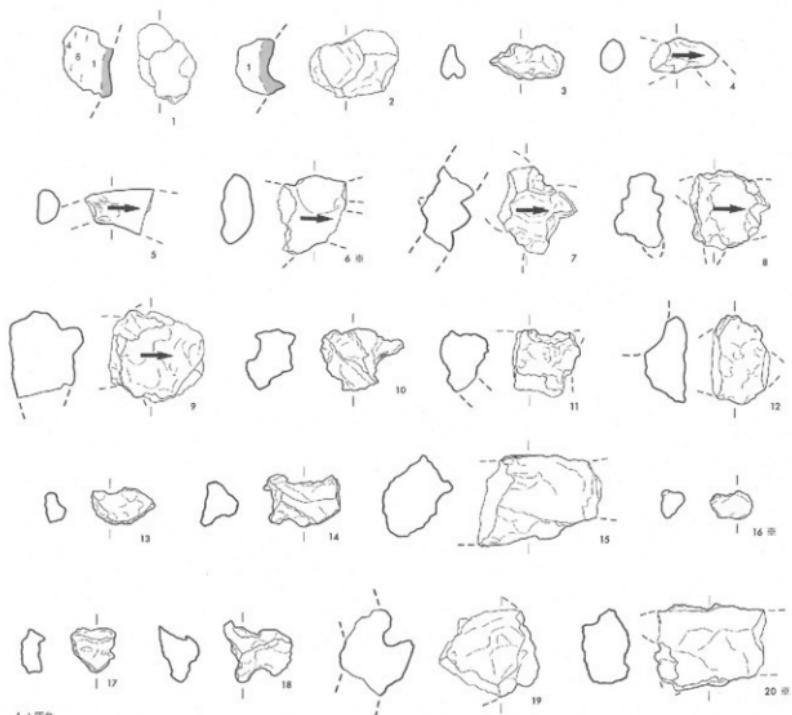


アミ部分の遺物については、特殊金属探知機による分類を実施

第37図 I・II区 出土製鐵関連遺物分類模式図

第38図 1区 出土製鉄関連遺物構成図 ※!は分析資料

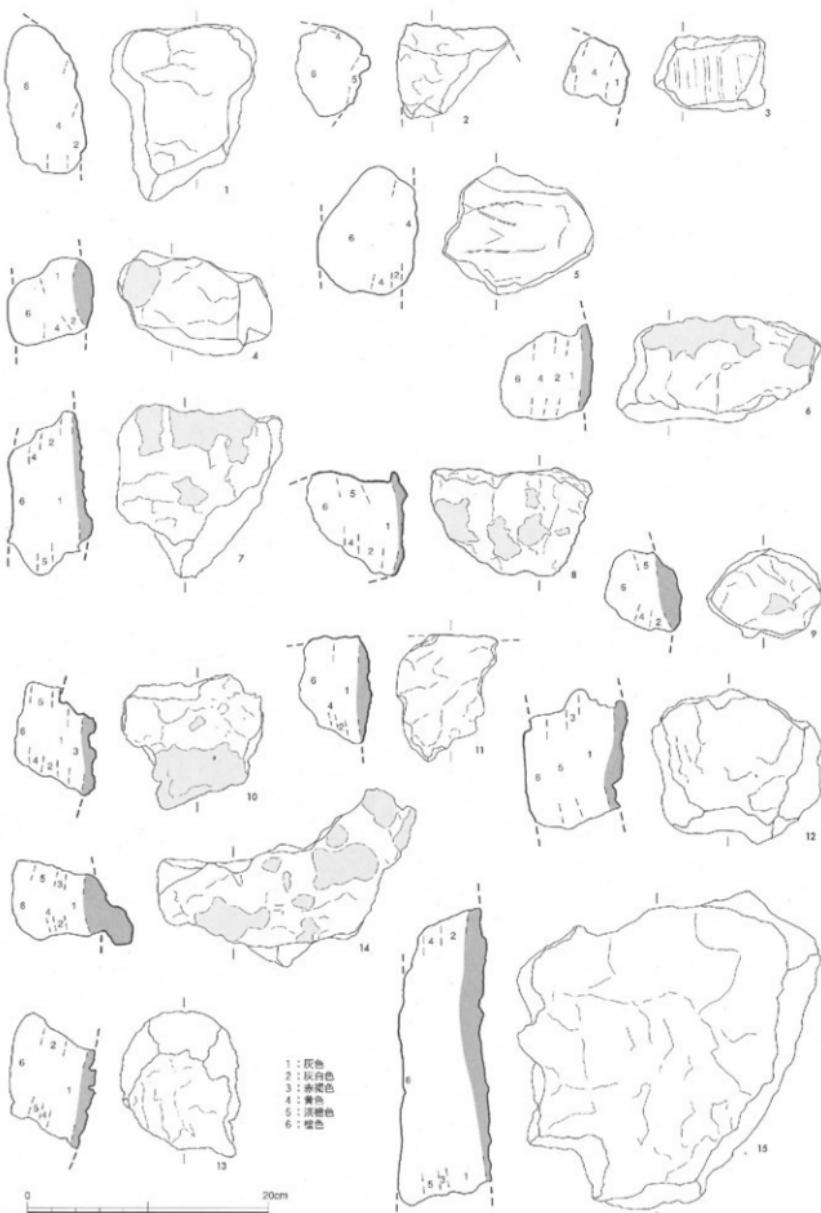
炉 塵	粘質燒結塊 粘質燒結塊 H(○)	流出孔渾(小)	流出孔渾(中)	流动渾	炉内渾	碳化(△)	炉内渾(含鉄)	H(○)	M(○)	木炭
										21-1※
										21-2※
										21-3※
										21-4※
										21-5
										21-6※
										20※
										18
										15
										12
										9
										5
										2
										3
										16※
										14
										11
										8
										6
										7
										10
										13
										17
										19
										21-1※



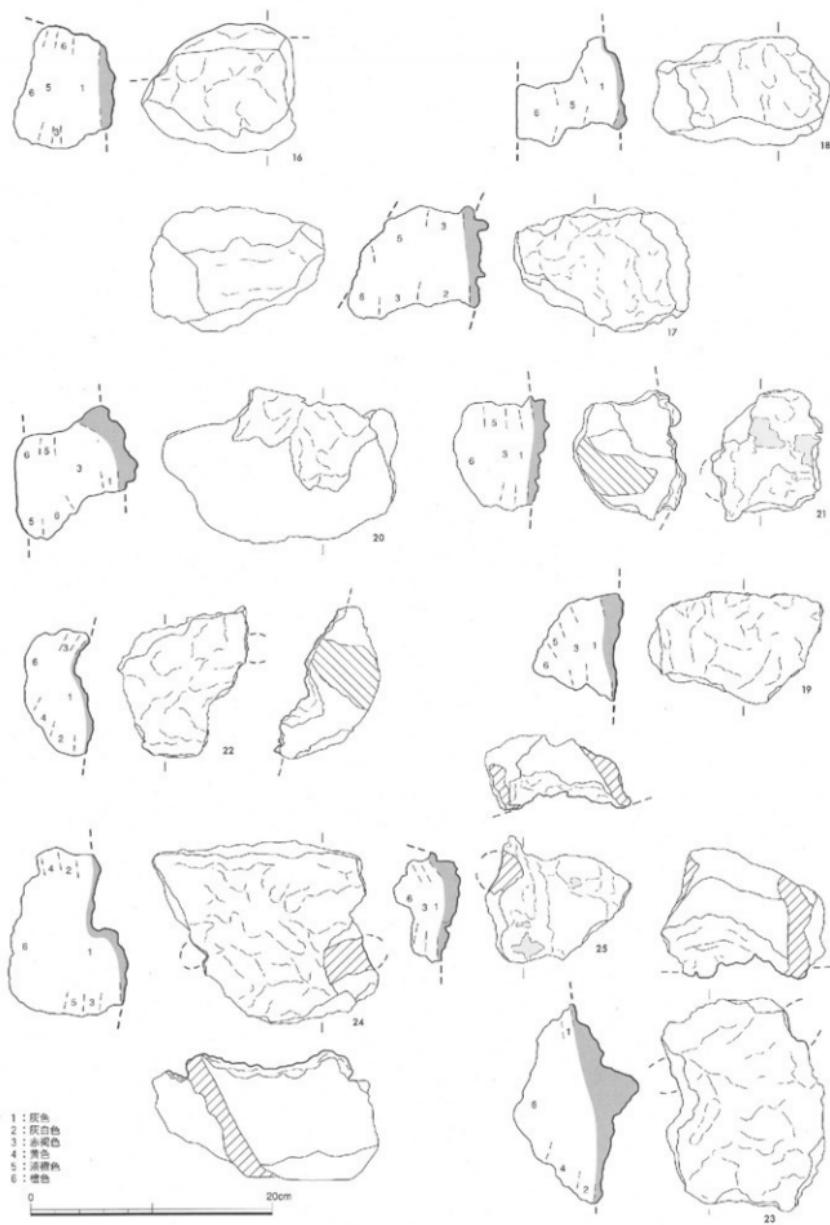
第39図 I区 出土製鉄関連遺物実測図 S = 1 / 3 · 1 / 2

	長 部 鉄 器 (セイト)			短 部 鉄 器 (セント)			炉 内 渣 (炉内渣 (含鉄量 36%)	流出孔 洋 (含鉄量 33%)
上段上半 (頂 面)	1	2					30	33
上段上半 (底 面)	3	4	5				39	
上段下半 (鉛錫焼結)	6	7	8	9	10	11		
中段上半 (溶 化)	12	13	14				16	34
中段下半 (漏窓孔上)	17	18	19				20	
下段上半 (漏窓孔付-1)	21	22	23	24	25		26	32
下段上半 (漏窓孔付-2)							28	38
							29	

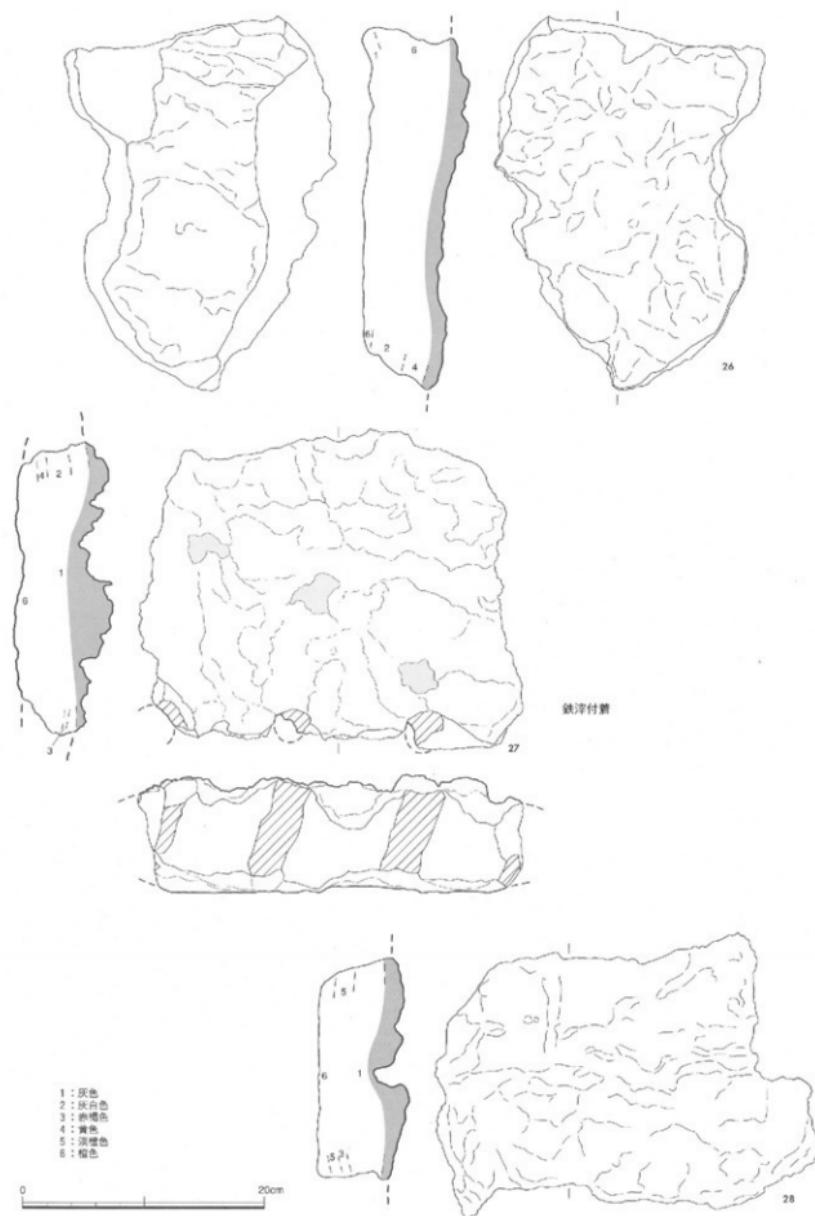
第40図 II区 出土製鐵関連遺物構成図 1 ※(は分析資料)



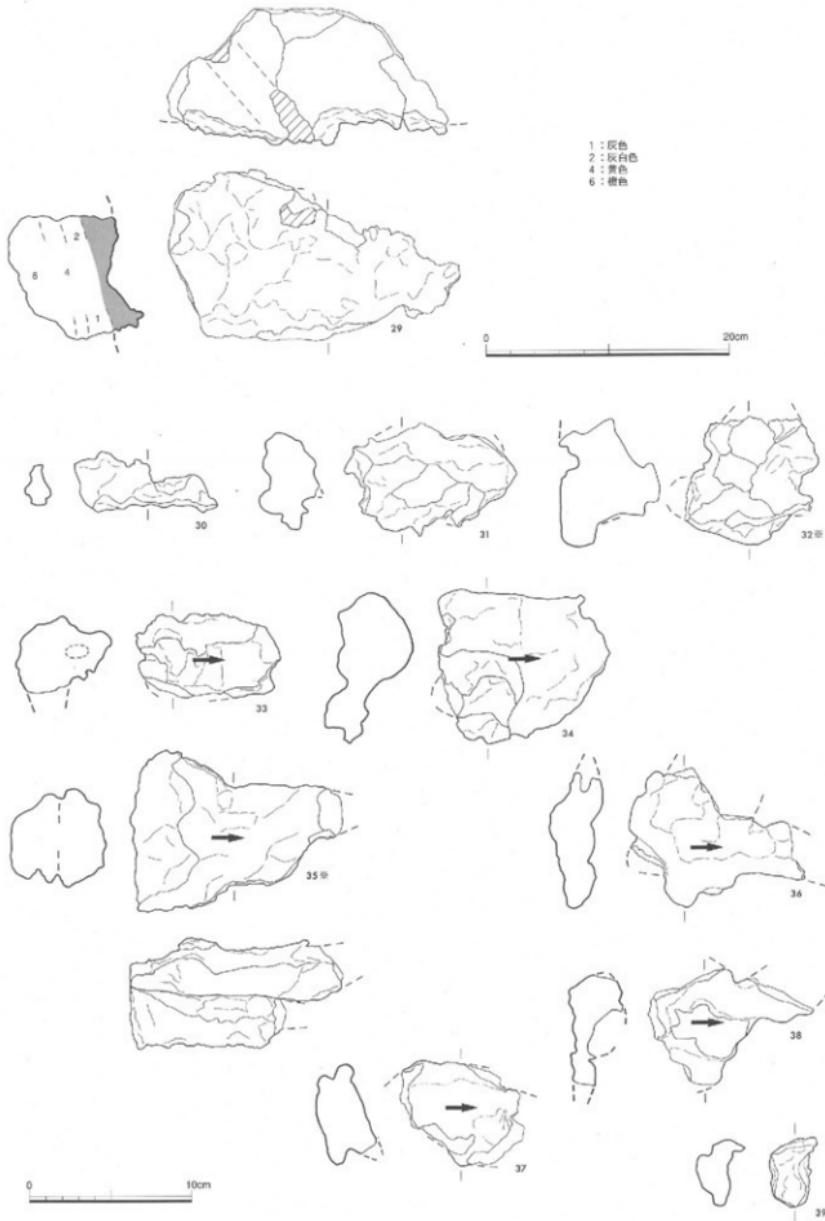
第41図 II区 出土製鉄関連遺物実測図1 (炉壁) S=1/4



第42図 II区 出土製鉄関連遺物実測図2 (炉壁) S=1/4



第43図 II区 出土製鐵関連遺物実測図3 (炉壁) S = 1 / 4



第44図 II区 出土製鉄関連遺物実測図4 (炉壁・他) S=1/4・1/3

通風孔印六付		追跡個		追跡(セツト)		側	
上段上半 (頂部)				44	45	46	47
上段上半 (極熱)				48	49	50	51
上段下半 (移鉄船)				59	60	61※	62
中段上半 (掌化)	40	72	73	74	75	76	77
中段下半 (通風孔上)	41	82	83	84	85	86	87
下段上半 (通風孔付-1)	42	93	94	95	96	97	98
下段上半 (通風孔付-2)	43	105	106	107	108	109	110
下段下半 (中底焼付)		118	119	120	121	122	123
						124	125

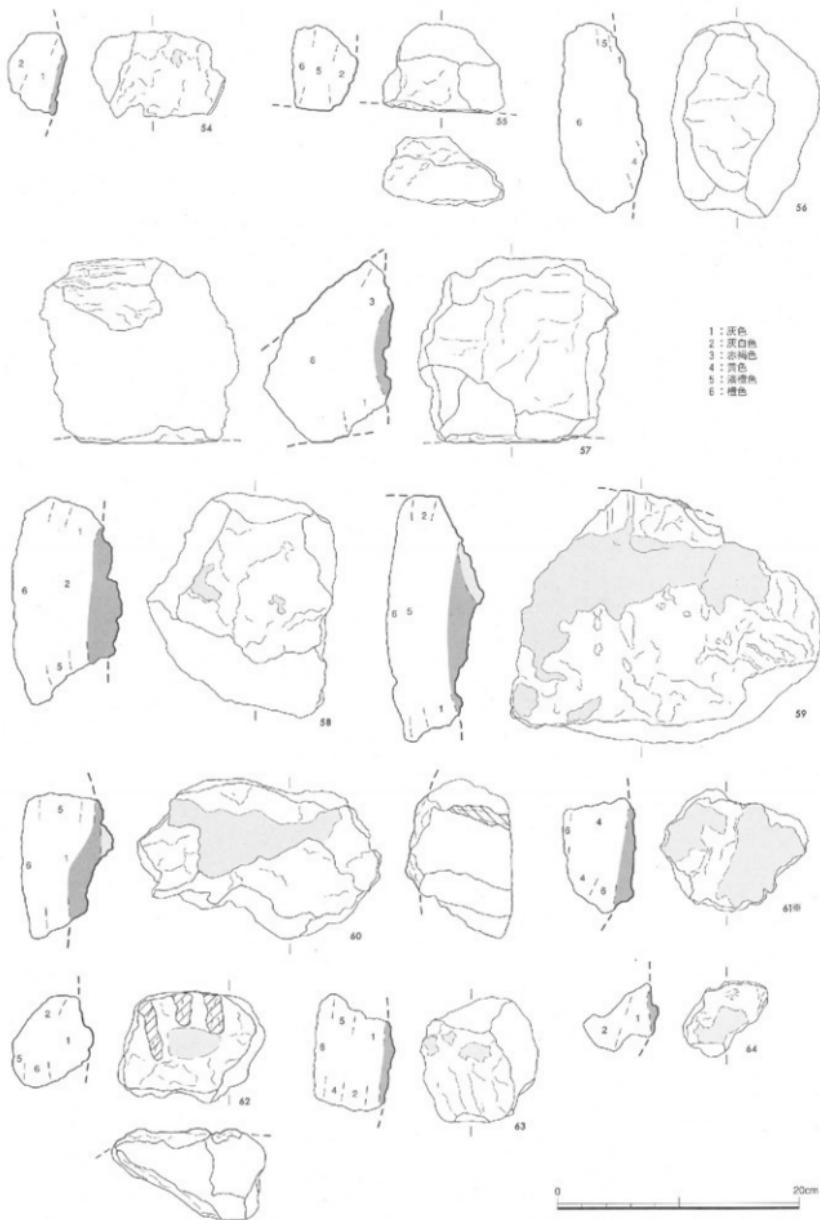
第45図 II区 出土製鉄関連遺物構成図 2 ※は分析資料

		器 物 (セラト)																						
		直 杆 棒 剑						曲 焙 釜																
		上 院 上 半			上 院 上 半			上 院 下 半			中 院 上 半			中 院 下 半			下 院 上 半			下 院 上 半				
上 院 上 半 (直 頭)																								
上 院 上 半 (直 頭)		54			55			56			57			58			59			60			61	
上 院 下 半 (弓鉗燒結)								62			63			64			65			66			67	
中 院 上 半 (炭 化)								68			69			70			71			72			73	
中 院 下 半 (通風孔上)								74			75			76			77			78			79	
下 院 上 半 (通風孔上-1)								80			81			82			83			84			85	
下 院 上 半 (通風孔内-2)								86			87			88			89			90			91	
下 院 下 半 (印底燒付)								92			93			94			95			96			97	
								98			99			100			101			102			103	
								104			105			106			107			108			109	
								110			111			112			113			114			115	
								116			117			118			119			120			121	
								122			123			124			125			126			127	
								128			129			130			131			132			133	
								134			135			136			137			138			139	
								140			141			142			143			144			145	
								146			147			148			149			150				

第46図 II区 出土製鉄関連遺物構成図



第47図 II区 出土製鉄関連遺物実測図 5 (炉壁) S = 1 / 4

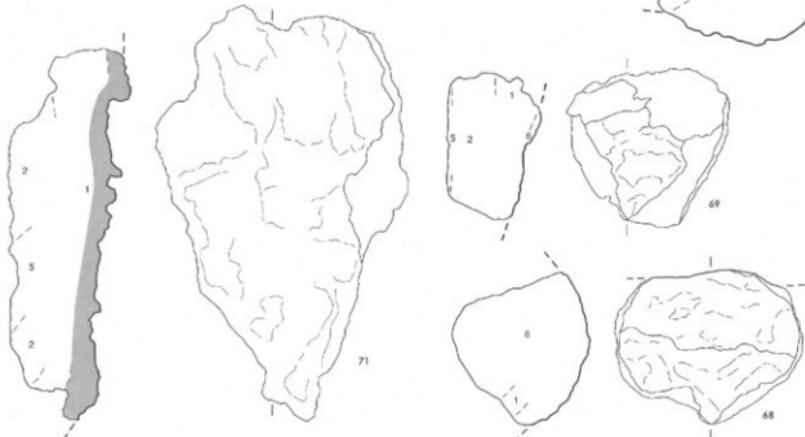
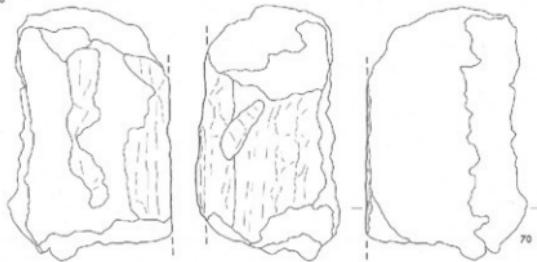


第48図 II区 出土製鉄関連遺物実測図 6 (炉壁) S = 1 / 4

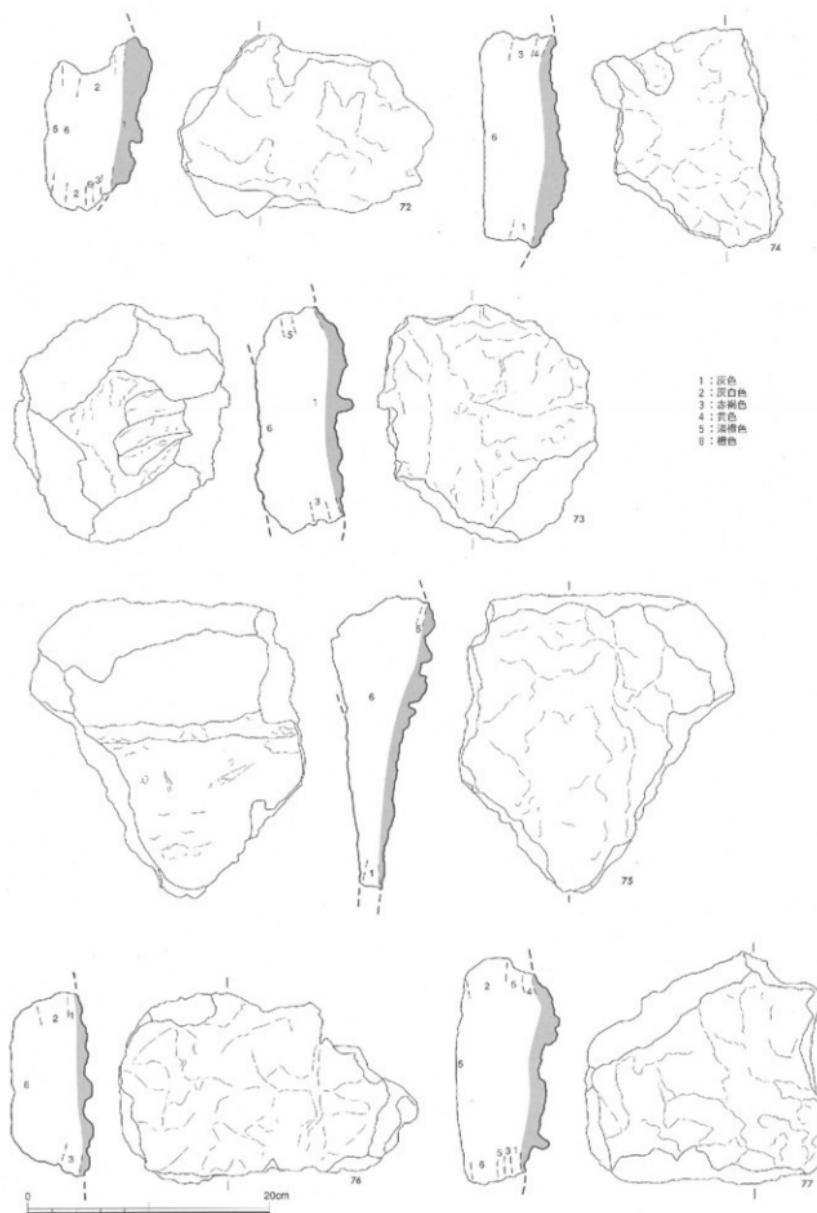


1:灰色  
2:灰白色  
3:浅褐色  
4:青色  
5:淡棕色  
6:棕色

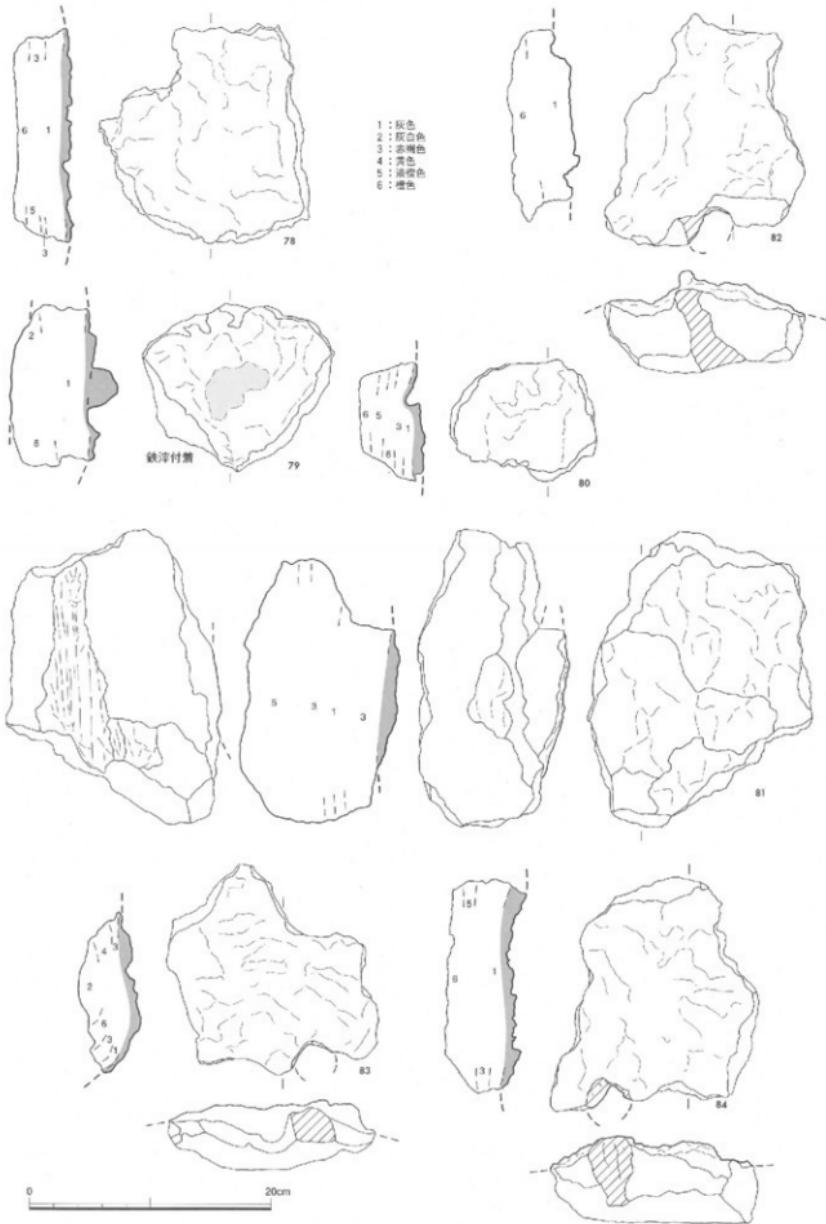
0 20cm



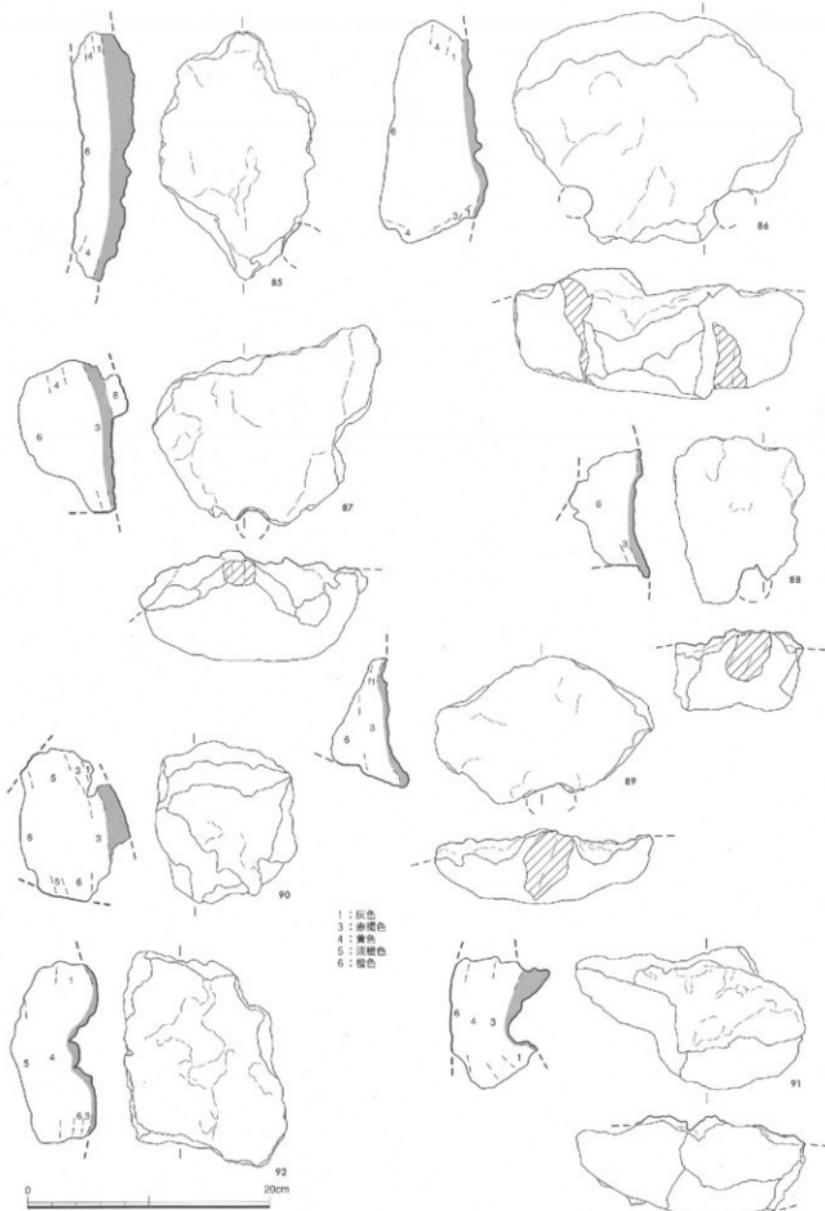
第49図 II区 出土製鉄関連遺物実測図7 (炉壁) S = 1 / 4



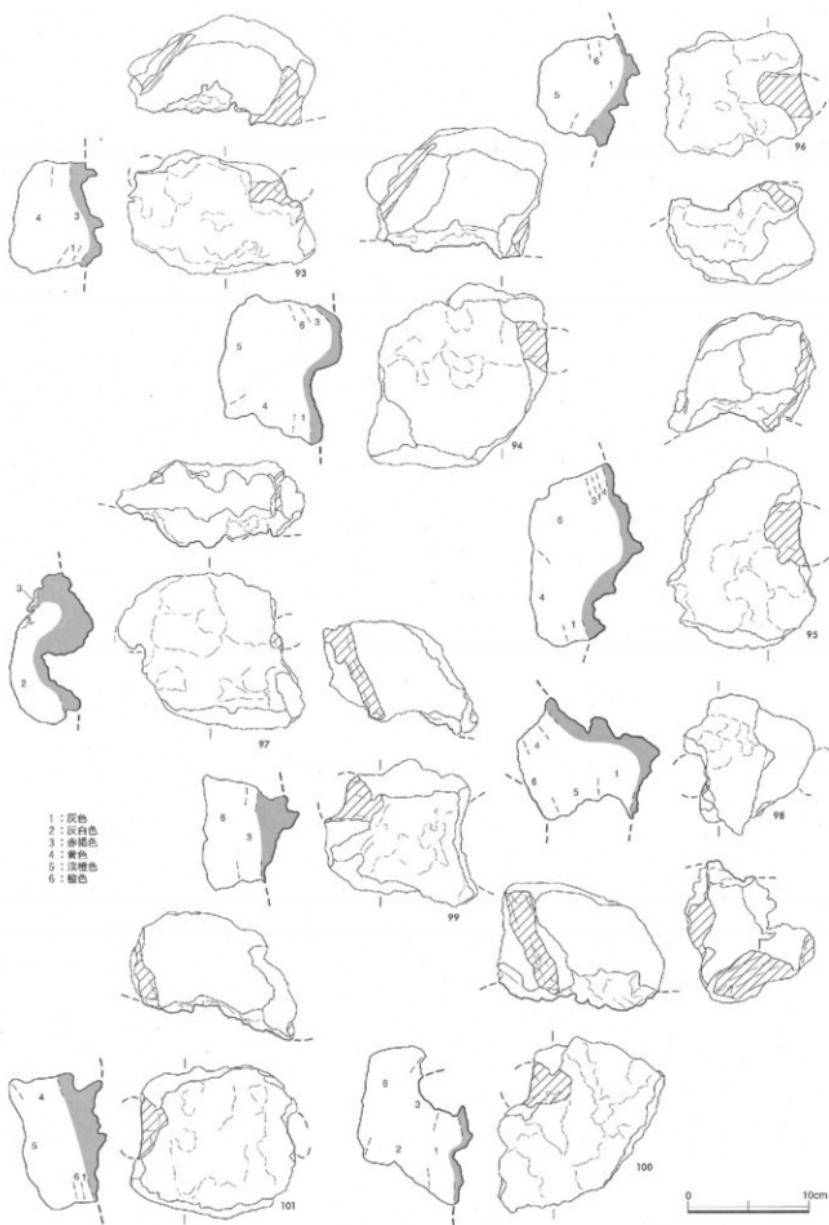
第50図 II区 出土製鉄関連遺物実測図 8 (炉壁) S = 1 / 4



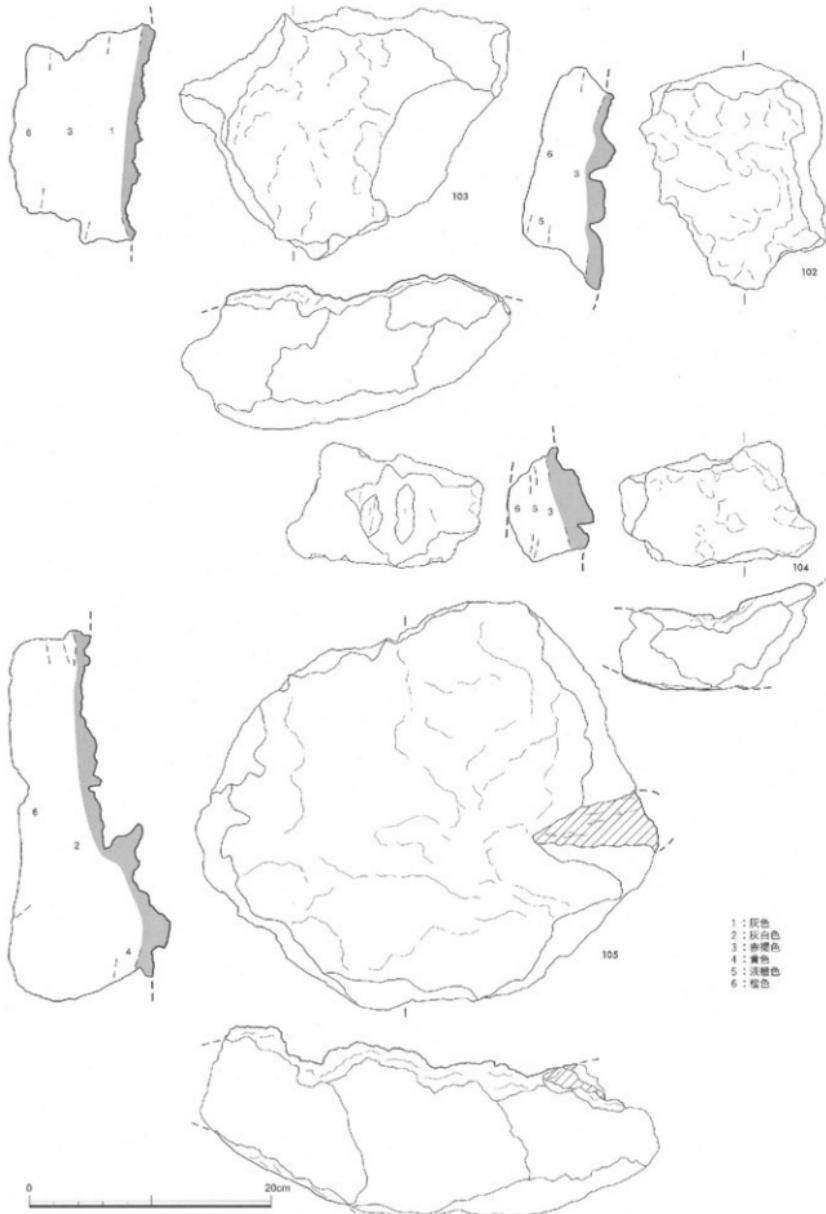
第51図 II区 出土製鉄関連遺物実測図 9 (炉壁) S = 1 / 4



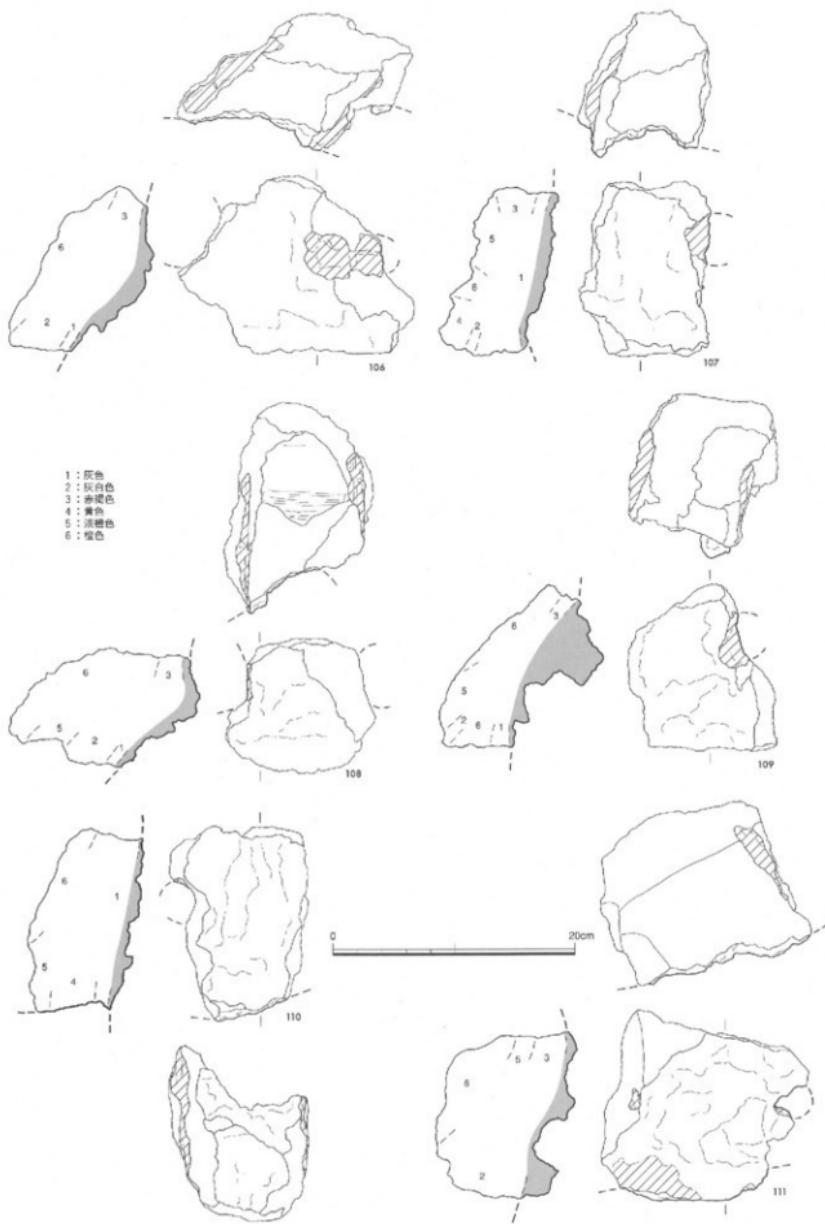
第52図 II区 出土製鉄関連遺物実測図10 (炉壁) S = 1 / 4



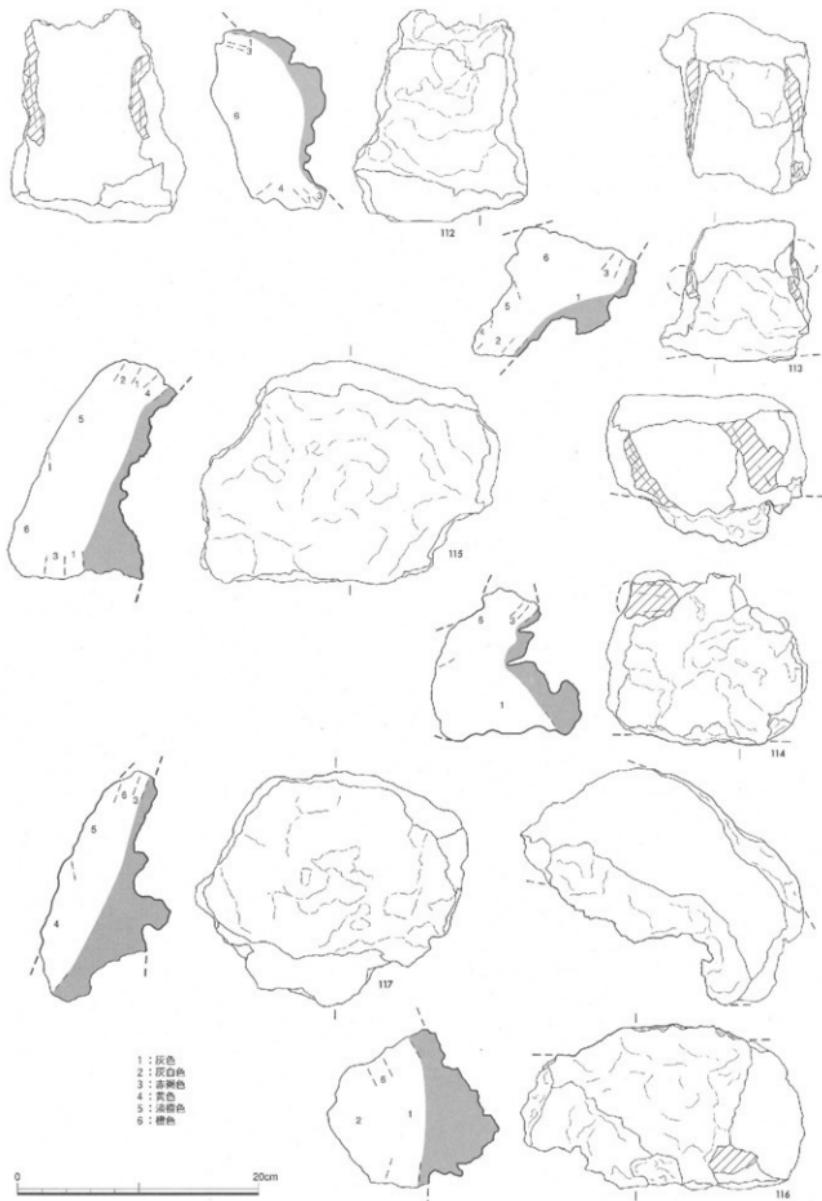
第53図 II区 出土製鉄関連遺物実測図11 (炉壁) S = 1 / 4



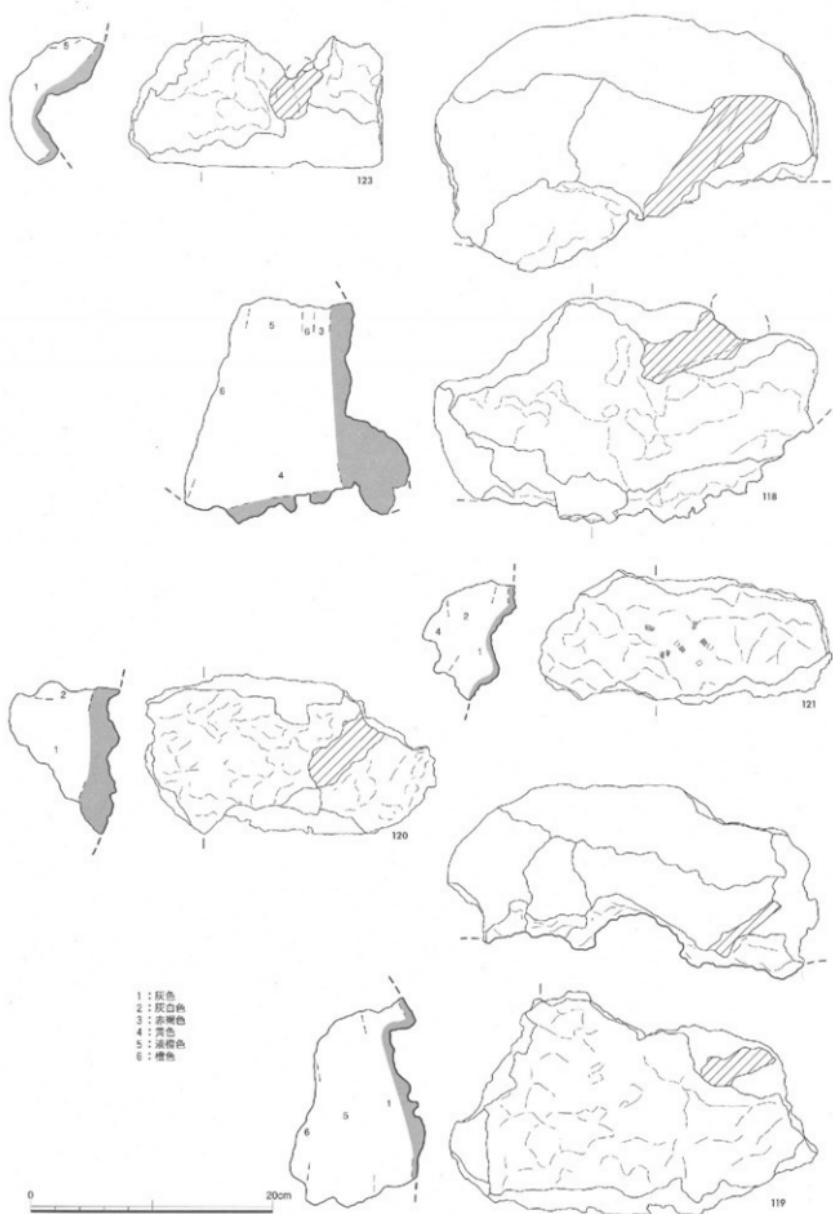
第54図 II区 出土製鉄関連遺物実測図12 (炉壁) S = 1 / 4



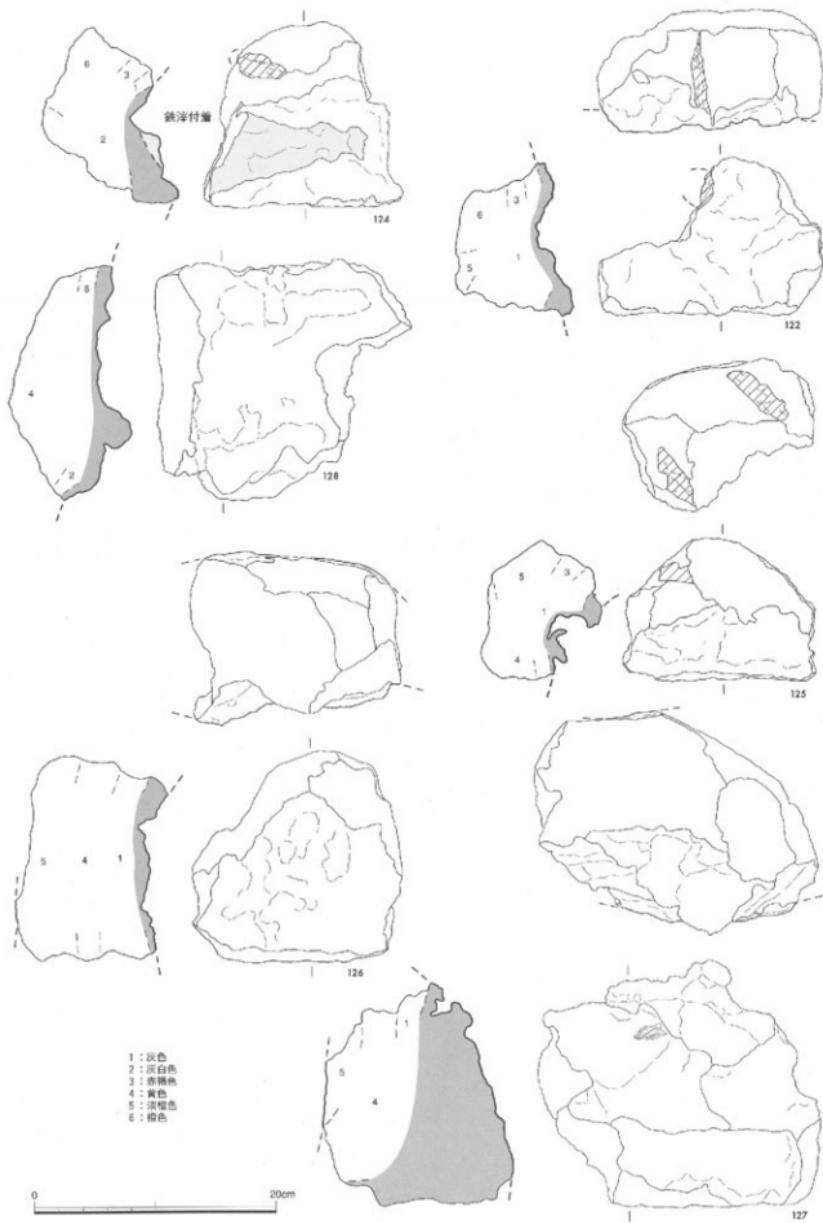
第55図 II区 出土製鉄関連遺物実測図13 (炉壁) S = 1 / 4



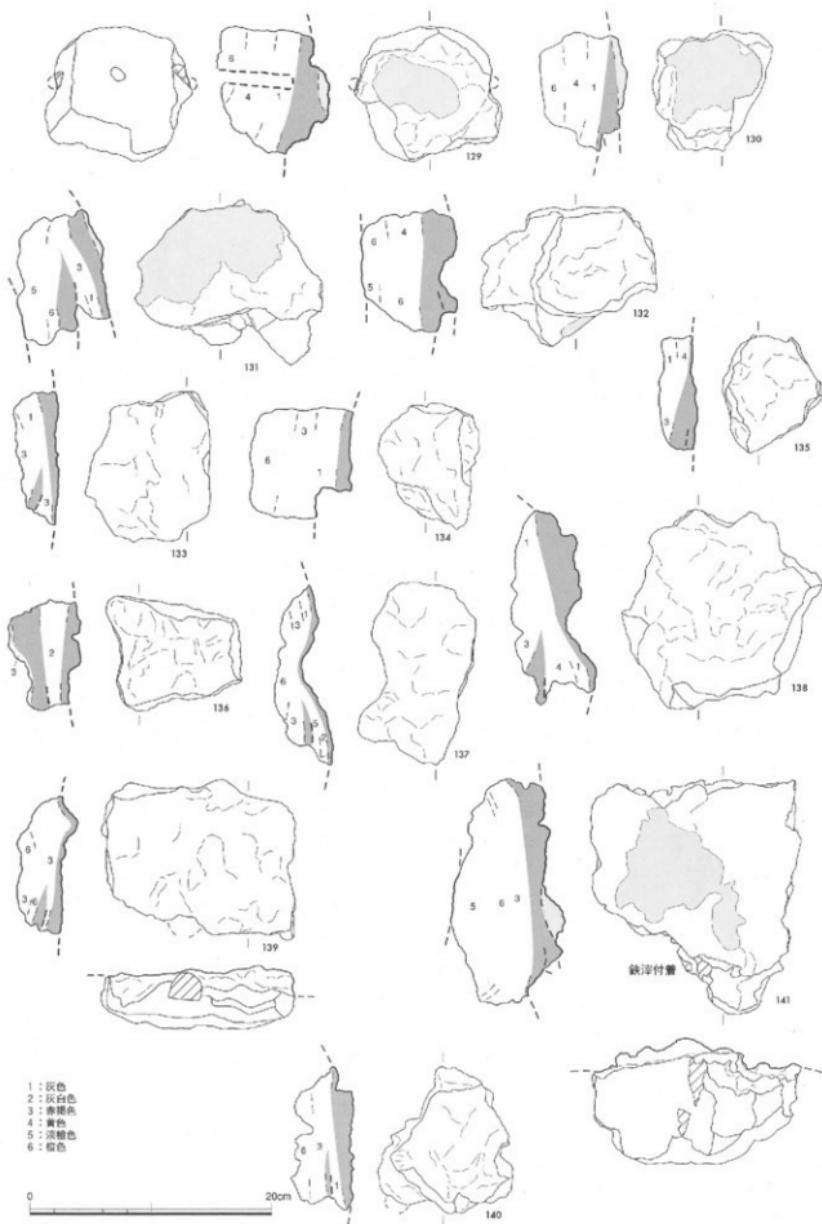
第56図 II区 出土製鉄関連遺物実測図14 (炉壁) S = 1 / 4



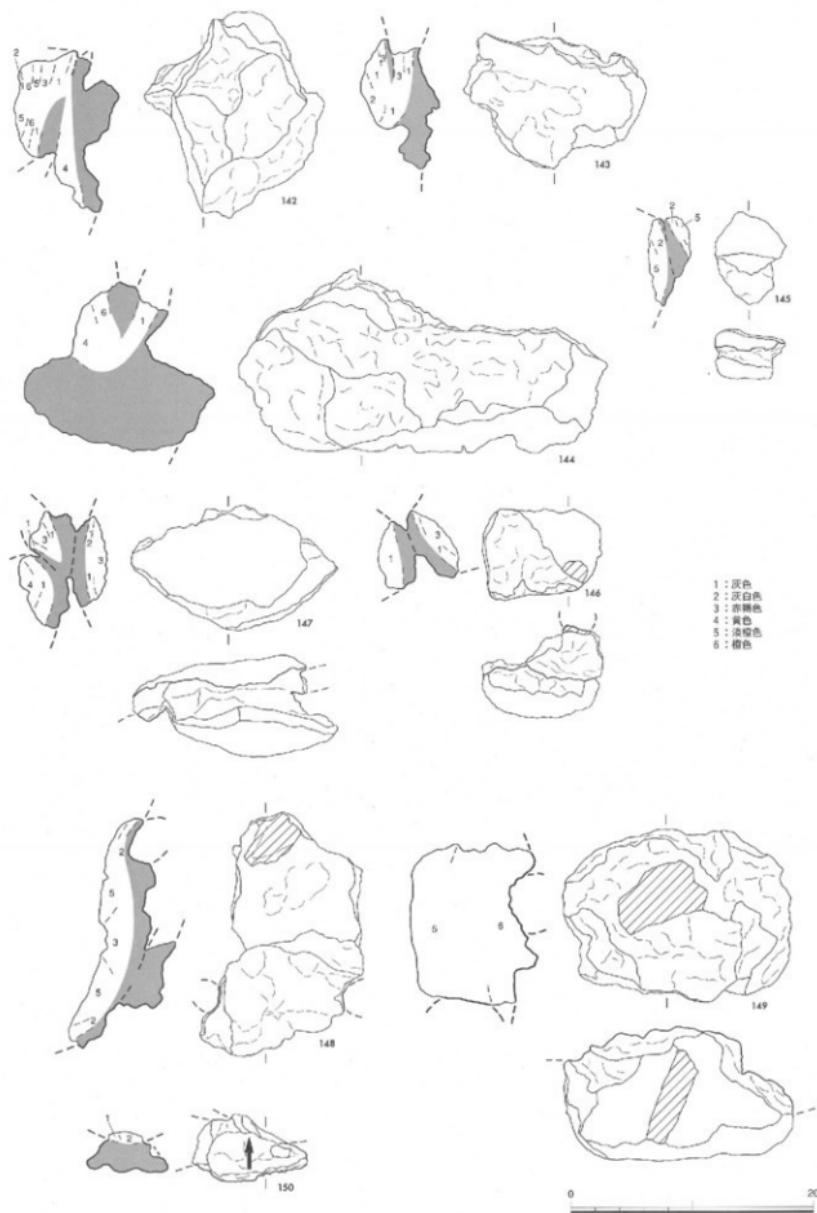
第57図 II区 出土製鉄関連遺物実測図15 (炉壁) S = 1 / 4



第58図 II区 出土製鉄関連遺物実測図16 (炉壁) S = 1 / 4



第59図 II区 出土製鉄関連遺物実測図17 (炉壁) S = 1 / 4



第60図 II区 出土製鉄関連遺物実測図18 (炉壁) S = 1 / 4

地山粘土		アラネイト下層物 H (○) M (○)			炉内渣滓洋			渣出大			渣出中			渣出小			工具痕			工具痕付			炉底鐵一塊出乳浮					
石炭	(自然)	好鐵燒結燒	アラネイト下層物 H (○) M (○)	小	中	大	炉内渣滓洋	渣位	渣滓洋	工具痕	流入洋	渣出大	渣出中	渣出小	工具痕	流入洋	渣位	渣滓洋	工具痕付	流入洋	渣位	渣滓洋	工具痕付	流入洋	渣位	渣滓洋	工具痕付	
I 区	II 区	156 周辺 153#	162 163	169 175	181	182	176 170	187 188	193 194#	200	206	223 212	234 224	235	250 245	251	258 259	260	261	250 251	252	253	254	255	256#	257	267	
		157 164	170 171	183	189	195	196	197	198	202	207	213 214#	225 226	236 237	238	247	248	249	250	251	252	253	254	255	256#	257	267	
		158 165	166 172#	178	184	190	191	192	199	203	208	216 217	227 228	238 239#	239#	240	241	242	243	244	245	246	247	248	249	250	251	
	D 12	154# グリッド 154#	159 166	167	173	179	185	186#	190	191	192	198	204 205	210 211	219	220	221	222	223	224	225	226	227	228	229	230	231	232
II 区	III 区	緑色土 161 168	161	168	174	180	186#	192	199	199	205	211	211	211	211	211	211	211	211	211	211	211	211	211	211	211	211	211

第61図 II区 出土製鉄関連遺物構成図 4 ※は分析資料